
我復讐す、故に我あり

big bear

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我復讐す、故に我あり

【Nコード】

N6440U

【作者名】

big bear

【あらすじ】

その日、彼は全てを失った

しかし、今、その体に「この世全ての悪」を宿し駆け抜ける

何分、処女作でいたらぬ所も多々ありますが楽しんでいただければ幸いです。

Arcadiaでも投稿しています。

今さらですかタイトル修正しました。

ブローグ

ブローグ

彼は幸せだった。これと言った悩みもなく、そのまま彼なりの平凡な幸せを感じたまま生きていくはずだった。

その日が来るまでは

1999年5月某日

その日は、観測史上稀に見る真夏日だったと記録されている。人々は茹だる様な暑さから逃れるように屋内に駆け込んでいく。

1年ほど前にできたこの雑居ビルも例外なく人で満ち溢れていた。祝日であるということも重なり家族ずれがその大半を占めていた。

その人々の中に、家族と共に彼もいた。

そんな、いつもの風景だと言うのにその日は何処か違っていった。どこかこの場所だけ、何かが少しずれていた。

最初に、異変が起こったのはペットショップの動物たちだった。

正午を越えたあたりから何かに怯えるるように一斉に吼え、泣き喚き始めたのだ。

次に、屋上での原因不明の小火騒ぎ。おそらく、これが本当の始まりだった。

当初、これらの騒ぎはすぐに収まると考えられていた。しかし、いくら宥めても動物たちは吼える事をやめず、小火はいくら水をかけても消えず、遂には屋上全体に燃え広がった。

さらに、事態は悪化した。アナウンス装置の突然の故障である。ア

ナウンスができないならばと職員たちが避難誘導するも、予想以上の火の回りに人々はパニックに落ちる。ほとんど人々は我先にと階段に殺到し、自ら自分たちの命運を断ってしまった。

運よく、1階にいた人々も同じく不運というにはあまりにも出来すぎた偶然に襲われていた…

「おい、開かないぞ」

だれかがそう呟いた瞬間を皮切りに周辺に動揺が広がっていく、そして、言い争う声や職員をせめる声に炸裂音とともに瓦礫が彼らの頭上に覆いかぶさってきた。

こうして一階にいた人々の命運は絶たれた。

そして、彼の人生もここで一度終わりを告げる。

side ???????

熱い 痛い 熱い 痛い 熱い 痛い 熱い 痛い 熱い 痛い
あつい いたい……………

あまりの痛みと熱さに意識が覚醒する

「っがぐっあづいあゝあゝ いたいづうグソったれ」

どうにかして、体をうごかす

「くっくくそ痛い」

とにかく、ここから逃げなければ、助けを呼べばまだみんな助かるかもしれない・・・そのためにも、まずはこの体の上の瓦礫を

「くっだめか」

「おーい、みんな無事か。おーい」

返事は返ってこない。最悪の可能性が頭をよぎる。

いや、みんな無事だ、そう思え。そうじゃないと俺は・・・・・・・・他に動ける人に助けを求めろしかない。

「おーい誰か動ける人はいないか、おーい誰くぐほげほぐつ」

煙が肺に流れ込んでくる。しかし、それでも呼びかける

「くそ、おい誰かいないのか。だれか・・・・・・・・えっ」

居た。動ける人間が・・・だが、その人物はあまりにも、この場所には場違いだった

この場にいるとゆうのに、まったく煤の着いていない夜の闇より黒い黒髪

まるで物語の魔法使いのようなローブ

万人がそろって美しいと評価する端整な顔立ち

そして、この場において場違いとしか言いようのない、あまりにも美しく晴れやかな笑顔

「さつきから叫んでいるのは、貴方かしら」

やさしく、そして何処か喜色を含んだ声で話しかけられる

「あ、ああそうだ、頼むあんた助けを呼んできてくれないか。見てのとおり動けないんだ」

いくら、場違いでも動ける人間だ。これで、どうにかなるかもしれない

「ねえ、貴方の名前はなあに？」

帰ってきたのは、余りにも予想外なそして、場違いな答えにもなっ

ていない答え

「おい、そんなことどうでもいいだろう。それより、助けをまだ、みんな助かるかもしれない」
とにかく呼びかける。

「みんなってあれえ？」

そういうと、近くの瓦礫のそばを指差す

そこには

あれは何だ／あれを知っている

見る／見るな

あれは誰だ／あれをよく知っている

そうだあれは だ

そして、あれは だ

あれは

あれは

アレハ

アレハ

そうだ、あれは俺の だ

「そんな、そんなうそだ」

そうだ、これは夢だ。そうに決まっている。だから、直ぐに覚めるはずだ。／いや、現実だ

「ねえ、この程度で終わりいつまらないなあ。折角、ここで唯一生き残ったのに」

この目の前の人物も夢の中の登場人物だろう／違う、解っているだろう

「ふうん、なら良いこと教えてあげる」

どうでもいい、そんなことよりはやく、起きないと遅刻する／これは、夢じゃない

「これを、やったのわ・た・しのなの、どう驚いたあ？」

「えっ」

信じられない／そうだ、最初からおかしかった

「あらあ、信じられないって顔ねえ。じゃあ証拠を見せてアゲル」
そういうと、懐から小瓶を取り出す

それは、黒かった。まるで、人のありとあらゆる悪意を集めたような、そう、”この世全ての悪”のような

「それは・・・!？」

理解する、それは同じだと。いまだ、この地獄を形成している炎と、自分の　　を焼いたものと同じだと

「すごいわあこれ、すこし垂らしただけでこおんなに」

こいつが、こいつのせいで

「ねえ、聞いてるう」

こいつのせいで、俺の　　は

「ーしてやるーしてやる」

「んっ何か言ったあ」

こいつを必ず

「殺してやる、必ず、絶対に俺の手で」

叫ぶ、煙を吸い込もうがかまわず目の前の仇に呪詛を叩き付ける

「ああ、こんな憎悪久しぶり、貴方本当に素晴らしいわ」

しかし、どこ吹く風で恍惚とした表情で語り続ける

「殺してやる、殺してやる、殺してやる」

「ああ、だから、ご褒美をあげる」

そういうと、ゆっくりと歩み寄り小瓶の中身を俺の体に垂らす

「殺してやる、殺して」

中に、入っている固体とも液体ともつかないものが体に付いた瞬間

「　　ー!？」

もはや言葉にもならない悲鳴をあげる

痛い／死ね　痛い／死ね　痛い／死ね　痛い／死ね

痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ

痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ

痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ

痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ 痛い / 死ぬ

すさまじい痛みとともに、途方もない量の悪意が流れ込んでくる。

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

悪意に、自我を呑みこまれる

死が、悪意が俺を蝕む

すべてが、黒に塗り替えられていく
いつまで、この悪意の波は続くのだろうか

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
すこしずつ心が、自我が消えてゆく

俺は、消えるのか。ここで
このまま、仇も討てないまま、何も残せぬまま、この悪意に吞まれ
て死ぬのか

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

ああ、もう何も残っていないならここで消えてしまった方が・・・
・
・

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
ふと、脳裏に記憶がよぎる

みんなの思い出
幸せだったころの記憶
そして、みんなの笑顔

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
そうだ、これがお前の奪われた物だ
許せるのか？お前は。

仇を討たず、消えるのか？お前は

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

ふざけるな!!

こんなところで、こんなものに消されて殺されてやるものか!!

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

迫り来る悪意に向かい会い俺の憎悪（願望）を叩きつける。

しかし、押し返されさらに自我を侵される。

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

それでも、まだ抗う。

全身全霊を、魂を賭け抵抗する。

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

突然、悪意の波が止む

そして

「おまえの願望（生きる理由）は何だ」

ふと、どこからか問いかける声が聞こえる

「生きたい、死にたくない、生きて仇を……」

意識が消えていく、眠るように安らかに

「OKOK、気に入ったぜ相棒。これからは復讐者同士の仲良^{アヘンジャー}くやる
うぜ」

最後にそんな声を聞いた――

side ??????

「さいこつう、あんなものが見られるなんて、わざわざ、全身串刺しにされた甲斐あったわ」

もともと、八つ当たりのつもりで使ったのだがあんな成果が得られるなんて

「もつたいないないことしたと思ったけどこれで、okね」

「でもまさか、魔術回路があるとはいえ人間があれにたえるとはねえ」

あの程度の量とはいえ、あれは超極大の呪いだ。とうてい人間が自我を保てるようなものではない。

「本当に、人間って不可思議ね」

それをあの瀕死の人間は耐え抜いたのだ
なんという奇跡

なんという宿命

「名前、ちゃんと聞いとけばよかったあ」

さあ、人間よ

「いつか、必ず私たちを殺しにきなさい。名前も知らない復讐者さん」

存分に謳歌し、苦しみ、進め汝らの宿命を

プロローグ（後書き）

どうも、big bearです。

他の作者様の作品を読んでいる内に妄想に突き動かされ、今回、筆をとりました。

何分、初経験ですので拙い文章ですがこれから、この駄文をよろしくお願いします

ご感想、ご意見ございましたらぜひお送りください。

オリジナルキャラクター設定集

名前：刀崎 忠志

年齢：18歳

身長：180cm

体重：75kg

特徴：顔立ちは端正というより、精悍。体格もすらつとしているのではなく、どちらかというところがっちりとしている。目付きが悪い。髪の色は黒。

性格は、基本的に義理堅く、礼儀正しい。兄弟が居たため面倒見がいい。善意には善意、悪意には悪意で返すタイプ。欠点は一つのこと集中するとほかに対して完全に興味をなくす事とすぐ考えが顔に出ること。

服装：基本的には動きやすい服を好んできている。空の境界編ではYシャツに綿パンという服装である。

最終段階でのfate風ステータス

筋力：D(????????)発動時：D++

耐久：B(????????)発動時：B+

俊敏：D(????????)発動時：D++

魔力：B - (?????????発動時：B +++)

幸運：C

宝具：?????

保有スキル

執念：A

復讐にかける執念、仇またはそれに関係するものと対決する場合、
幸運以外のステータスを一時的にワンランク上昇。

勇猛：B

ある程度の幻惑、恐怖を無効化する

武芸百般：C

あらゆる武具を自在に操る能力

Cであれば一切の基本指南を受けずとも、あらゆる武器をそれなりに
使いこなす

心眼（真）：D C（倫敦編）

経験ではなく知識による行動予測、そのため熟練した使い手相手では
あまり役に立たない。

????????の恩恵

??????:?

礼装

無銘、蛮刀

普段は布のような形状だが魔力を通すと刀身に変わる。アトラス製で所有者の魔力特性を反映する。

柄は茶色、唾は金色、刀身は灰色。

伸縮自在だが、魔力を通す量によって鋼よりも硬く、鋭くすることも可能。

強化によりさらに形態変化を得る。

無銘、方天戟

普段は長さ七十センチ、幅五センチほどの金属製の円筒。中央の突起を押すことで長さ二メートル半の方天戟となる。外部に魔術的な加工はされていないが内部に衝撃緩和用のギミックがあり丈夫さは折り紙つき。

紺碧礼装

余り歴史を重ねているわけではないが、耐呪、耐火、耐衝撃の性能はかなりのものでさらに、装着者の背恰好に合わせ最適な形に変化する。忠志の場合の形状は肩と胸の部分に防具が付いており裾は足の下まで覆う形になっている。裏地には隙間無く魔術式と青崎橙子直筆のルーンが刻まれている。胸当てと肩当ては別パーツで外していればコートに見えないことも無い。色は濃い紺色。

無銘 破碎籠手（倫敦編から登場）

右腕用のガントレット。名前の通り、打撃の瞬間対象に爆炎を発生させ、あらゆる防護ごと対象を破碎する。これは忠志の属性を反映したものである。アトラス製。

肉弾戦においては絶大な能力を発揮する反面、爆破のダメージは忠志にも及ぶ。

オリジナルキャラクター設定集（後書き）

どうも、big bearです。

今回は設定集です。？の部分は本編で登場しだい追加していきます。

7月9日 追加、修正。

7月13日 追加

7月15日 追加

七月二十九日 追加

空の境界編 第一話 邂逅

side ??? ????

夢を見る………

まだ、みんなが………

まだ、 が居たころの

との思い出、 との思い出、 との、 との、 との、
との

そして、戻ってくる

あの場所に

全てを、失ったあの場所へ

そして

再び思い出す

仇を、そして最後に聞いたあの声を

「そっだ、俺は……仇を……」

そこで、夢から覚める

そうして、俺は戻ってきた

1998年7月下旬昼頃 伽藍の堂

side 黒桐 幹也

「妙だな・・・」

そんな、眩きを漏らしたのはこの伽藍の堂の所長こと、蒼崎橙子さんめつたなことでは動じないこの人が、そんなことを言うなんて珍しい
「どうしたんですか、橙子さん」

怪訝に思い尋ねる

「なあ、黒桐。先々月の終わりに起こったあの、隣町の大火事について何か知ってるか」

「えっ、たくさんの犠牲者がたということぐらいしか・・・」

「橙子さんがこんな事をきいてくるなんてまさか・・・」

「橙子さん、まさか、また浅上藤乃の時みたいな」

「いや、まだ分からん」

ということとは、まだ可能性はあるということだ。もし、浅上藤乃のときのような事件ならば、僕の友人は両儀式はじつとしていないだろう。

「この火事のどこがおかしいんですか？」

そうなら、僕も無関係ではない

「珍しいな、黒桐。この手の話には余り興味がないと思っていたんだが……」

橙子さんは少し驚いたような顔をしたかと思うとすぐ納得したような顔になりこう言った。

「ああ、そうか式か。黒桐、お前は本当に分かりやすいな」

たしかに、そうだがそう言われるとなんだか反発したくなる

「それもありますけど、どうせ橙子さん僕に調べろっていうつもりだったでしょう」

「でつどこが妙なんですか、この火事」

あらためて、聞きなおす

「ああなんでも、いくら水をかけても火が消えず、燃え尽きるまで放置するしなかったというはなしだ」

「けど、これだけならまだありえる話だ。薬品が燃えていたのかもしれないし。」

「けどまだ話には続きがあった」

「それだけではなく、後から分かった話なんだが自動ドアが故障していたらしい。さらについてないことに予想以上の火の回りに脆くなった天井が、開かないドアの前で立ち往生していた彼らの頭上に落ちてきたらしい」

たしかに、妙だ。これほど不幸な偶然が重なるなんて

「黒桐、偶然も三回続けばそれは偶然といはないよ」

「それにね、たった一人しかいない生存者も2ヶ月近く眠り続けていたらしい。脳には何の障害もなく、驚くべきことに怪我也完治しているというのにだ。」

たしかに、妙な話だ。生存者の話も含めてこの事故はあまりに不自然だ。一つ一つならばまだありえる話だ。しかし、それらが、重なって起きたというのは偶然と言いつけるのは、あまりに出来すぎた話だ。

「それにな、黒桐。そのビル私が設計したんだ。あまり、魔的な要素は含んでいないが利用されたなら我慢ならない。だから確かめて

くる事にする。じゃあ黒桐、生存者の身边について調べておいてくれ」

そういうと、橙子さんは立ち上がり、ドアのほうへ歩いてゆく

「えっどこに行くんですか橙子さん」

「病院だよ、病院」

「病院ですか」

「ああ、なんでも生存者は、藤が丘の病院に入院してるらしい。そういうことだから今日はもう帰って良いぞ黒桐」

「いえ、どうせ式が来るでしょうから待ってます」

橙子さんは、そうか、殊勝だなと呟くとさっさと行ってしまった。

しばらくすると入れ替わるようにドアが開く

「あれ、今日は橙子いないのか」

そんなことを言いながら、やってきた彼女に話しかける

「やあ、式。実はね……」

同時刻、藤が丘病院

「そういえば聞いた、例の患者さんの話」

「聞いた、聞いた。担当の子が言ってたんだけど、目が覚めたのはいいけど、事故のショックで少し錯乱してるらしいわよ。」

「そうなのよ。可哀想にね、たった一人生き残ったのに。でも、前に入院してた両儀さんといい、あの病室何かあるのかしら」

side?? ???

何度目か分からない悪夢を見る

目の前で燃えていく

そして、この世の何より憎むべき仇の顔

最後に聞いた、声

そうして目が覚める

背中に感じる感触で自身の居場所を再確認する

一体、何日この病室のベットで寝起きしたのだろう。それさえ、分からない

これから、また治療という名の尋問がはじまるのだろうか

最初に、目覚めたとき俺は医師にありのままに見たこと起こったことをはなした。

それからだ、医師たちの態度は言葉には出さないものの変った。まずは、俺が喋る事、仕草一つ一つをメモするようになった。

そして、もう体は治っているというのに部屋から出るのは禁止。

さらにそれとは別に、何度も何度も繰り返し採血される。

なんでも、こんなに早くかつ後遺症もなく完治するなんてありえない話らしい。

おそらく、奴が言っていた褒美。あれが、関係しているのだろうか
とはいえ、まるで、実験動物にでもされたような気分だ。

いよいよまともな人間扱いされていない。そろそろ白衣を着たテンプレート通りの精神科医がマッドサイエンティストが出てくるに違いない。

ギィイとドアの開く音がする。ほら、来た

「ハイイ、貴方が刀崎 忠志君よね。イメージじゃもっとゾンビみたいな重病人だと思ってただけ。部屋間違えてないかしら」

そう言いながら、話しかけてくるのは髪を後ろで縛り、眼鏡をかけた妙齡の美女

格好はYシャツにジーンズ、白衣じゃない。およそ、精神科医には見えない。

あまりのイメージとの違いに少し面食らってしまう。

「あ、ああそうだけど。そういうあんたも精神科医には見えないよ」

「あら、私は精神科医じゃないわよ」

「じゃあ、何なんだよ」

本当に精神科医じゃないなら一体何だというのだろうか

「そうね、私の職業は魔法使いかしら」

「は？」

そんなやり取りが、俺と生涯の魔術の師蒼崎橙子の初めての邂逅だった。

空の境界編 第一話 邂逅（後書き）

どうも、big bearです。

ここから、空の境界編です。

できれば、週2ぐらいのペースで更新できたらいいと考えています。
拙い文章ですがこれからよろしく願います。

ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひ、お送りください。

空の境界編 第二話 魔術（前書き）

「そうね、私の職業は魔法使いかしら」

「は？」

そんなやり取りが、俺と生涯の魔術の師蒼崎橙子の初めての邂逅だった。

空の境界編 第二話 魔術

side 復讐者

「まほうつかい？あの火を出したり、空を飛んだりする？そんな、馬鹿げてる……」

そうは言ったものの先日の、あの日の記憶が過ぎる。

お前は、あれを、あの小瓶の中身を何だと認識した……
そして、こども思ったはずだ

自身の仇は、あれは人間ではないと

「あら、意外と反応が薄いよね。呆れるか、怒るかどっちかだ思っただけだ」

「そっちの方がまともな反応だ。だけど、今の俺はあんまりまともじゃないらしいからな。信じるよ、魔法使いさん」

彼女は、そう、話をはやくて助かるわと言つと椅子を取り出し腰掛ける。

「蒼崎橙子よ」

そういつと手を差し出してくる。とりあえず、握手しておく

「刀崎忠志だ。えっと蒼崎さんでいいのか」

「橙子で良いわ」

そう言つとおもむろに眼鏡をはずす。すると、ガラリと雰囲気が変わる。

「ふう、やはりこっちの方が楽だな」

「あの、本当にさつきと同じ人だよな」

「ああ、私は間違いなく蒼崎橙子だ」

口調まで変わっている。眼鏡を外すと別人になんて話がよく聞くがこれはそんな程度ものではないだろう。本当に違う人間の様だ……

……

「でっその魔法使いさんが俺に何の用だ」

だが、そんなことは今、どうでもいい

「正確には、魔術師だ。」

そう訂正すると、胸ポケットからタバコを取り出し

「吸っても言いかね」

などと、言い放った

「ここは、病室だ。禁煙に決まってるだろう。で、その魔術師が俺に何のようだ。」

「例の火事についてだ」

「あんた、何か知ってるのか」

だとすれば、あいつも魔術師とやらなのかもしれない

「いや、知らん。だから、君に尋ねに来たんだ。」

「じゃあ、あれには魔術ってやつが関係あるのか」

「そうだと考えているが、核心がない・・・」

そこで一度、言葉を切る

「ゆえに、君の記憶を覗かせてもらいたい。同意してもらえたらありがたいんだが」

記憶をのぞく？俺の？そんな事ができるのか

「覗く記憶は、俺が決められるのか？」

普通なら、あの日までの俺ならこんな胡散臭い申し出を受けやしなかつただろう

「んっああ問題ないよ」

「一つ条件がある。もし、あんたが俺の記憶を見て分かったことがあれば絶対に教えてくれ」

だが、今は奴に、仇に少しでも近づけるなら

「それだけで良いのか？」

たとえ、”この世全ての悪”でさえ受け入れてやる

「ああ」

「ふむ、では始めようか」

その前に一つ

「なあ、一つ聞かせてくれないか」

「何だ」

「こんな事をして、あんたに何の得があるんだ」

「まあ、ケジメの様な物さ」

「ケジメ？」

「一体、何のことだ」

「ああ、あのビルの設計に関わっていてね。もし、私の術式を勝手に利用されていたならそれは、我慢ならない。それだけさ」

「そんな、理由で……だが不思議とそれがどんな飾り立てた言葉より信頼できた。」

「さあ、とつととすませるぞ」

「後一つだけ」

「なんだ、まだあるのか」

「痛いのか？」

「はあ？」

「痛いのか、その記憶を覗くのは」

「ふっはははははははははは」

彼女は一瞬、きょとんとしたかと思うと突然、笑い出した

「っ何だよ、笑うことないだろう」

「失礼、失礼。いやそんなことを聞かれるとは思わなくてね」

「言わなきゃよかった。で、痛いのか？」

「いや、大丈夫だ。君は目を閉じてリラックスしていればいい。すぐ済むよ」

「言われたままに目を閉じる。」

「では、始めるぞ。覚悟はいいか」

その、言葉が聞こえたと同時に俺は意識を失った。

消えていく意識の中で、どこかで聞いた声の高笑いが聞こえた

「くっこれは」

突然、意識が覚醒する。

記憶を覗かれた影響がまだ頭が、グラグラする。

「君は随分と、とんでもないものに眼を付けられたようだな」

その言葉に、意識が完全覚醒する

「あんた、あいつを知ってるのか!？」

「まあ、な」

「頼む、教えてくれ。あいつについて知っている事なら全部!！」

「まずは落ち着け。そう興奮しては、話も耳にはいらんだろう」

「これが、落ち着いていられるか」

だが、たしかにその通りだ

「奴らについて話すにはまずは魔術師について話さなくてはならないだろうな」

「それが、一体なんの関係があるんだ!？」

「まあ、聞け。それにさっき落ち着けと言ったばかりだろう」

「ああ、分かってる」

それから彼女は、淡々と語り始めた。

「魔術師というのは基本的に皆ある一つの目的のために魔術を行使する」

「目的？」

「そうだ、我々魔術師は魔法にそして、全ての始まりにして終わりの座標、根源の渦に至ることを目的にしている」

理解できないことはない。本か何かで読んだことがある。この世の何処かに過去、未来、現在すべてを記録した場所があると

「アカシックレコードってやつか？」

「そうだ。というより、その機能の一つだ」

となると、やはり

「やっぱり、魔法と魔術は違うのか？」

「ああ、魔術は他の手段で再現できるものだ。しかし、魔法は他の手段では再現できない。と言っても、もう五つしか残っていないがね」

なるほどつまりこういうことか。俺が言った火を起こしたり、空を飛んだりするのはライターや飛行機で代用できるから魔術で魔法は代用できないものつまり、タイムトラベルとかってことか。

「話を続けるぞ、幾人もの魔術師がそれに挑み敗れていった。抑止力という邪魔者によってな」

「根源に到るにはその邪魔者を避けていかなければならない。そして300年前、ある魔術師はこう考えた。

人間の魂こそが根源に繋がる扉だと、元からある道なら邪魔も入らないだろうと、そして、そいつには才能があった。」

そこで、一旦話を切る

「そいつは、自身の魂を解体する方法を見つけ出した。まあ、結局自我が消失して失敗したんだがね。」

しかし、そいつはある保険をにかけていた」

「その保険というのが”一つにして七つの人形たち（ワンオブセブンドールズ）”と言われる死徒。」

それが、君の家族を殺したやつらの名だ」

人形だと

そんなものに

そんなものに俺の　　は

「そいつらはどこに居るんだ」

「知らん」

「じゃあ、殺せるのかそいつらは」

「少なくとも、今の君では見つけることもできずに犬死にだ。あの場に居たのは七体居るうちの一体、狂喜だろう。世界のどこに居るかも分からない残り六体を手がかりもなく見つけるのは不可能に近い。それに運よく見つけても、相手は300年間魔術師たちの追撃を撃退してきた化け物だ。髑り殺されるのが関の山だろう」

「じゃあどうすればいい!!」

おもわず、声を荒げる。

「あきらめろ。それが最善だ」

「そんな事できるわけないだろう!!もう、俺には復讐しか残ってないのに・・・」

あの日、あの時、それ以外は消えてしまった。

「では、勝手にのたれ死ね」

ああ、勝手にさせて貰うさ

「と言いたいところだが、奴が君の体の中に入れたものには興味がある。それに、これだけ教えてはい、さよならでは、無責任すぎるからな」

「一体何が言いたいんだ」

「なあ、君・・・」

（三日後）

「いままで、お世話になりました」

「いえいえ、これから頑張ってください」

受付の看護師に礼を告げ、出口に向かって歩を進めていく

一歩踏み出すたびに思い出が、幸せだったころの記憶がよみがえる。

だけど、あの自動ドアを潜ればもう、後戻りはできない。

だから、この思い出が、記憶がこの先邪魔なら、ここにおいて行こう
機械音と共に自動ドアが開く

ここから、先は修羅の道

覚悟は決まった

自動ドアから出ると、ここ一週間で見慣れた人物が、聞きなれた声
で話しかけてくる。

「覚悟は決まったようだな」

「はい。もう、充分悩みましたから」

「何だ、やけに丁寧だな」

「いえ、これからはお世話になる身ですので」

「ふん、変に義理堅い奴だ。まあいい。ほら行くぞ」

「はい、これからよろしくお願いします。師匠」

この日から俺の魔術師としての人生がはじまった。

空の境界編 第二話 魔術（後書き）

どうも、big bearです。

これで実質のプロローグは、終了です。

これからも、この駄文をよろしく願います

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください。

空の境界編 第三話 才能（前書き）

「はい、これからよろしくお願いします。 師匠」

この日から俺の魔術師としての人生がはじまった。

空の境界編 第三話 才能

最初に感じたのは、悪寒と痛み

「まずいな、制御しきれっていないのか」

そんな橙子さんの声が聞こえた瞬間、あの時と同じく流れ込んでくる悪意の波と内側から体を焼く制御しきれない力。

それと共に流れ込んでくる知識。

剣の知識、槍の知識、弓の知識、斧、刀、槌、短剣、戟、鎌、ありとあらゆる武器の知識とその使い方

そして、魔術の知識

「ああアアガアアアア」

脳が焼けるようになるような痛みと熱。

流れ込んでくる情報量のあまりの多さに脳が悲鳴を上げる

「おい！どうした！！」

どこか、遠くから声が聞こえる

「おい、声が聞こえるか！！おいーー」

あまりの痛みに意識が薄れていく……………

声が聞こえる

あの時と同じ

「なんだお前、また気絶したのか」

「やっぱり、一度に贈るにや多すぎたか。でも、プレゼントしてやったんだぞ。それでチャラにしてくれよ相棒」

13時間前伽藍の堂へ向かう車内1

side 復讐者

「そつえば師匠、墓のことと大学のこと何から何までありがとうございました」

みんなの体は燃え尽きてしまったらしいが、それでも墓ってやつは大事だと思う。それを、師匠は手配してくれた。

それだけでなく退学の手続き、近所への説明等々すべて、師匠がおこなってくれたらしい。感謝してもしきれない。

「ああ、気にするな。魔術師というのは身内に甘いものだからな。お前の荷物も2、3日すれば届くはずになっている。それにしても、本当によかったのか。」

「ええ、全部終わらせたあと自分で見つけ出します」
墓参りは全て終わった後でいい。もし、枷になるかもしれないなら、

墓の場所なんて知らないほうがいい。

「終わらせたあと、か。あれだけ聞いても諦める気はさらさらないよūdな」

曰く、最強最古の吸血鬼たち、死徒27租第19位

曰く、七重存在

曰く、災厄のもたらす人形たち

ここ、何日かで橙子さんから聞かされた奴らの情報。

なんでも、一時期興味がわいて調べた情報らしい。

だが、師匠でも直接姿を見たことがあるのは、俺を、みんなを襲った女性型の狂喜だけらしい。

あとは、“傲慢”と“激怒”が男性型、“情熱”が女性型らしいということしか分ってないらしい。

「いい覚悟だ、しかし、捨て身の復讐ならーー」

「はい、わかってます。」

「やれやれ、まあいいさ。あと師匠と呼ぶな、背中がむず痒くなるおっと」

急に車が止まる。予期せぬ衝撃に思わず、悲鳴を上げる。

「どうしたんですか師匠!？」

「だから、師匠と呼ぶな。それより、着いたぞ」

「えっはい」

目の前には、何処にでもあるような辺鄙な廃ビル。

とても、神秘的な魔術が行われる魔術師の隠れ家には見えない。

たしかに、世間から隠れるには最適かもしれないが……

「なんだ、釈然としないような顔だな。ははあん、お前怪しげな洋館とか森の小屋とかを想像してたんだろう」

「い、いえそういう訳じゃ」

図星だ。でも、少しぐらいそんな物を期待してもばちは当たらないはずだ

「図星か、顔に出てるぞ。まあいい、とりあえずようこそ我が弟子。ここが、私の工房“伽藍の堂”だ。」

―伽藍の堂・事務所―

「ここが、事務所として使っている場所だ」

最初に長机とそれを挟んで置かれた二つの革張りの椅子とソファ―
が目に入る。

その奥には、あれはテレビか？テレビがいくつも重ねられそれぞれ
違う番組を写している。逆側には仕事机が置かれている。おそらく、
一番奥に置かれた最も散らかった仕事机が師匠の物だろう。

テレビ以外はなんの変哲もない事務所だ。だが、どことなく浮き世
離れたような場所だった

「あれ、橙子さん帰ってきてたんですか。あれ・・・」

そんなことを言いながら奥の扉から現れた人物は、この場にいるに
はどうも違和感がつきまとう。

黒縁のメガネを掛けた男性。

背格好も顔立ちも平凡な何処にでもいるような人物。たぶん、この
人は誰も傷つけないのだろう。

「ああ、そういえば黒桐には言っていなかったな。こいつは、今度か
ら私の弟子になった男だ」

「刀崎、刀崎忠志です。えーと」

「黒桐、黒桐幹也です。よろしく、刀崎さん」

「いえ、忠志でいいですよ。黒桐さん」

「じゃあ僕も幹也でいいよ。忠志くん」

「では、改めてよろしく幹也さん」

「よろしく」

お互い、握手を交わす

この人とはうまくやっていけそうだ。

ひとつ確認しておこう

「幹也さんも魔術を？」

「いや、僕はここで働いてるだけだよ」

そうなのか。だがこれで仕事机にも納得が行った

「おい、何をやってるんだ早く来い」

いつの間にも移動したのか、奥から師匠の急かす声が聞こえる。

「じゃあ、俺はこれで」

「ああ、頑張つて来るといい」

―伽藍の堂・急造修練所―

案内された階段をくだりおわると、そこいらの学校の体育館よりも広い開けた場所に出た。

明らかに、外から見たこの建物の横幅よりも大きい。壁には魔方阵のようなものや、幾何学的な模様が刻まれている。

その光景に今更ながら、自分が決して表に出てくることのない世界に踏み込んだのだと実感させられた。

「ぼんやりしている暇はないぞ。すぐに始めるからな」

「あ、ああはい、わかりました。」

師匠の声に、意識を引き戻される。

「さてと、急造だが中々の物だろう。ここなら、核爆発でも起きないかぎり音が外に音が漏れることもない。当然、魔力もな」
急造？つことは

「じゃあ、師匠の工房は別なんですか」

「ああ、いずれ見せてやる」

「あとな、師匠と呼ぶな。」

「わかりました。では、橙子さんで」

「それでいい」

「まずは、魔術回路を開かなくてはならない。回路がなければ始まらないからな」

魔術回路。魔術師が先天的にもつ器官。これがなければ、魔力の生成ができないらしい。素人がいくら、本物の呪文を唱えても無駄なのは、この回路がないか開いてないのが原因らしい。

「とりあえず、これを飲め」

いつのまに取り出したのか、橙子さんは、陶器のカップを片手に持っている。

遠くからでもわかる。あれはヤバイ。絶対に人が飲む物ではない。

「ほれ」

橙子さんがカップを手渡してくる。色は、緑。まるで、沼のような心無しか、ゴボゴボという音が聞こえてくる気がする。

臭いは・・・香がない方が身のためだろう。

「橙子さん、これ一体何が入ってるんですか？」

「聞きたいのか？」

「いや、いいです」

これも、聞かない方が身のためだ。

どちらにしる飲まなきゃいけないのだ。覚悟を決めよう。

鼻を摘んだまま、一気に飲み干す。見た目に反さず、とてもドロドロして、粘着質だ。

「—————!?!」

あまりのまずさに舌が麻痺したのが、せめてもの救いだっただうにかして、飲み干す

「なんだ、飲み干したのかお前。少量でよかったのに」

「そういうことは、先・・・に・・・言っただけ!?!」

体の中から、沸き上がる熱

そして、全身を駆け巡る高揚感と異物感

これが……

「魔力……」

「成功したようだ。半人前だが、これでお前も魔術師の仲間入りだ。」

「やっとこれで一歩」

だが、一歩進んだ

ふと、なにかが引つかかる

「よし、そのまま閉じていけ」

「橙子さん」

「どうした？」

「はい、なにかその引つかかりみたいな物があるんですけど」

「ふむ、接触できるのか」

「はい、やってみます。」

取っ掛かりのようなものに呼びかける

― 魔術回路の起動から二時間後 ―

「うっぐっ」

目が覚める。

いつのまに運ばれたのか革張りのソファ―に寝かされていた。

「目が覚めたようだな」

橙子さんの声が聞こえる。

「俺は……一体なにが」

そうだ、俺は何かのスイッチをいれてそれから、気絶したんだ。

「お前は、自分の魔術回路以外に魔力の供給元があるようだ。おそらく、それが奴の言っていた褒美とやらのようだな」

おそらく、その通りだ。

最初に感じた悪意の波。

あれは、量こそ違うが、あの時と同じものだった。

「だが、魔力の暴走が原因で気絶したわけではないようだ。何か他に感じたことはないか？」

そうだ、あの時と違うものが一つあった。

「知識、知識みたいなものが流れ込んできました。」

「知識？何のだ」

「実際に見てもらったほうが早いと思います。何かナイフみたいなもの的にして良いもの有りますか？」

すぐに、行えかつこの部屋にもありそうなものとなると、ナイフ位しかないだろう。

「ナイフ？少し待て」

ガサゴソとモノを探す音が聞こえてくる。

その間に、なんとか立ち上がる。

「っぐ」

頭が痛み、たちくらみを起こす。

「おいおい、大丈夫か。」

倒れそうになったところを橙子さんに支えられる。

「すみません」

「そんなことより、ほれナイフだ」

「ありがとうございます。あと、的は――」

「そうだな、あの隙間でどうだ。」

そういうと、橙子さんは積み重ねているテレビの隙間を指さす。

「わかりました。」

脳内に散乱する知識に検索をかける。

頭痛がさらに酷くなる。

だが、目当ての知識は直ぐに見つかった。

「はっ」

知識にあるとおりの動きと力加減でナイフを投擲する。

ナイフはイメージ道理に飛び、隙間に滑り込む。

そして、ザクツという鈍い音とともに背後の壁のに突き刺さった。

「驚いたな、お前そんな特技があったのか」

橙子さんの感心と驚きが入り交じったような声でつぶやく。

「いえ、違います。あの時、ナイフとか剣とか武器の知識と使い方

が流れ込んで来たんです。それと魔力の使い方――」

足元がふらつきソファーに倒れ込む。

「あとは――」

頭の痛みで、うまく言葉がでない

「無理をするな。大体何が起こったのかは把握出来た。だから、今

日はもう休め。お前の鍛錬の方針も決まったし明日から本格的に指

導していくから覚悟しておけ」

意識が遠くなっていく

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

ソファーに横になり目を閉じて意識を手放す。

そうして、俺の魔術師としての人生の一日目は終了した。

空の境界編 第三話 才能（後書き）

どうも、big bearです。

おそらく、この回は加筆することになると思います。

週末にもう一度、更新できたらいいなと思っています
無理だったらすいません。

拙い文章ですがこれからよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りくだ
さい。

7月9日午後4時

加筆

空の境界編 第四話 修練

「……出来た」

約二時間、ランプ十個を犠牲にしてやっと一つ成功した。

試しに、ランプを床に叩きつけてみる。

帰ってきたのは、ガラスの割れる音ではなく石と石をぶつけた様な鈍い音。

「ふう」

やっと一つだ。橙子さんが俺に出した課題はランプ五個の強化の成功。

あと四個、まだまだ先は長い。だが、コツは掴んだ、それほど時間はかからないはずだ。

魔術回路を開くため、自分の中に意識を向ける。

深く、深く意識の中に埋没していく。

そして、炎を見つける。あの日と同じ赤黒く燃える炎。

橙子さんは曰く、魔術師は一人一人魔術回路開く際のイメージが違うらしい。

俺は、炎だった、あの日炎に身を焦がすイメージだった。

「起動(WAKE UP)」

起動キーとなる呪文を唱えると、同時に全身に流れ込む熱と異物感。

思わず、顔をしかめる。

橙子さんはすぐに慣れるといていたが、本当だろうか？

もうひとつ、取っ掛かりの様なものを感じるが無視する。

この前の様に気絶するのは御免だ。

目の前のランプに意識を集中する。

魔力をランプに流し込む。

少し少しずつ、多すぎず少なすぎず的確な量流し込む。

存在の隙間を埋めランプを強化する。
成功だ。

さあ、次だ。

一時間後　―伽藍の堂・事務所―

「ほう、意外と速かったな。丸一日掛かると踏んでたんだが」とりあえず課題を終えた俺は、報告のため事務所に来ていた脇に抱えていたランプを机の上に置く。

「ちゃんと成功しているようだな」

ランプを手にとると橙子さんはそう評価を下した。

「次は何をすれば――」

「ああ、少し休め。あいつらもそろそろ来るころだしな」

「あいつら？」

やはり、幹也さん以外にもここで働いている人が居るのだろうか。

「そういえば、お前はまだあったことがなかったな。まあ、百聞は

一見にしかずだ。」

「はあ……」

一体どんな人物なのだろうか？

二十分ほど待ったたろうか。不意にドアが開く。

「おはようございます」

挨拶しながら、幹也さんが入室してくる。

「ああ、おはよう」

「おはようございます。幹也さん」
挨拶を返す。

「おい、橙子。こいつがお前の言ってた弟子か？」

そついいながら入室してきた人物は、幹也さんに比べあまりに個性的だった。

和服の上に真っ赤なジャケットを着た凛々しい顔立ちをした美人。

幹也さんとは別の意味で場違いだった。

「刀崎忠志です。よろしくお願いします」

「んっああ、よろしく。両儀式だ」

「両儀さんもここで働いてらっしゃるんですか？」

「式で良いよ、後、ここで働いてるわけじゃない」

「式には、主に荒事を担当してもらっている。」

橙子さんから補足が入る。たしかに式さんの動きは知識の中の理想とされる身のこなしに近い。

「僕は反対ですけどね」

「後、式にはお前の戦闘訓練を担当してもらおう。式、来て早々悪いが始めてやってくれ。」

「ああ、わかった」

そついうと、式さんは修練所につづく階段へ足早に歩いていく。

「でも、なんで橙子さんじゃ駄目なんですか？」

幹也さんが質問する。それは俺も疑問に思っていたことだった。

「私は作る者であって戦うものではないからな。式の方が向いているのね」

そついうことか。なら、式さんを待たせるわけには行かない、急いで向かおう。

「おい刀崎、これを持っていけ」

そついうと、橙子さんは何かを投げ渡してくる。

「うっおつと」

なんとか受け取る。

それは柄だった。唾はなく刀身の変わりに布のようなものが垂れている。

「橙子さん、これは何ですか？」

「口で話すより試した方が速い。とりあえず、魔力を通してみる。言われたとおり魔力を通してみる。」

「!?!」

魔力を通した瞬間、電気が布の様な部分にはしる。すると、布の様な部分は厚みをもった刀身になる。

「これは、すごいな」

幹也さんが驚嘆の呟きを漏らす。

「昔拾ったものなんだがね、銘はないがアトラス製らしい。私が持つていても仕方ないからお前にやる。」

握り込んでみると手にしっくり来る。

重さも刃渡りも丁度いい。

知識によると、蛮刀と言っらしい。

魔力を抜くと元の布の様な形に戻る。

「ありがとうございます、橙子さん」

「いいから、速く行け。あまり式を待たせると何をするか分からんぞ」

「はは、冗談ですよな？まあとにかく行ってきます」
階段に向かって歩いていく。

「冗談じゃないんだがな」

―伽藍の堂・修練所―

修練所に下りると式さんは中央あたりに立っていた。

「遅かったな。じゃあ早速始めようじゃないか、頼むから一撃で終わりなんてつまらないことに成ってくれるなよ」

そう言いながら式さんは手に持った短刀を引き抜く。

その瞬間、肌を刺すような痛みと悪寒を感じる。

これが、殺気。

「よろしくおねがいします。式さん」

手に持った壺刀に魔力を通す

頭の中の知識が一斉に警告を発する。

あれは、今のお前が勝てる相手ではないと

今のお前では、確実に殺されると

壺刀を知識通りに構える。

勝てない？殺される？

だから、なんだ！！

そんなことは百も承知だ。

お前の仇は殺せない化け物だ。

ならば、こんなところで臆している暇はない。

死地に向かい一歩踏み出す。

「いきますよ、式さん!!」

「ああ来い!!」

瞬間、刃が交差した!!

空の境界編 第四話 修練（後書き）

どうも、big bearです。

日付けが変わる前に更新したかったんですが、できませんでした。

今回で戦闘シーンまでいくはずだったのですが………うまく
いかないもんです。

拙い文章ですがこれからよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りくだ
さい

空の境界編 第五話 戦闘（前書き）

死地に向かい一歩踏み出す。

「いきますよ、式さん!!」

「ああ来い!!」

瞬間、刃が交差した!!

空の境界編 第五話 戦闘

容赦なんてできるような甘い相手じゃない。それだけは分かる。考えていても仕方がない。とにかく。戦ってみよう。知識に従って体を動かす。

「はっ！」

踏み込みと同時に袈裟懸けに切りかかる。

式さんの武器はナイフ。

リーチならばこちらが有利だ。先手はもらった。

最低限の動きで避けられる。だが、それは織り込み済みだ。

勢いを殺さずそのまま横になぎ払う。しかし、空振りに終わる。

視界から、式さんが消えた。

身を屈める事でかわされたのだ。

瞬間、斬撃が走る。

どうにか、手に持った蛮刀で防ぐ。続いて振るわれるナイフを逸らし、避け、防ぎ続ける。

知識が警告を発する

距離をとれ、ここは相手の間合いだと。

ギンッ

金属がぶつかり合う甲高い音と共に刃と刃で唾競り合う。

締めた、腕力ならこちらが上のはず。力を込め彼女を押し返そうと

する。

「!?!」

途端にバランスを崩す。

蛮刀に込めた力ごと受け流されたのだ。追撃の短刀が振るわれる。前方に転がるようにして、なんとかそれを回避する。そのまま、転がり距離をとる。

無様だが距離をとることは出来た。

「へえ、なかなかやるなお前。橙子の話と違うな」

式さんは余裕の表情だ。まだまだ、本気じゃないってことか。蛮刀を構えなおす。

さっきの攻撃が避けられたのは正直すぎたからだ。如何に攻撃が早くとも直線的すぎて読まれてしまう。

だが、今の俺には知識に従っていくので精一杯だ。攻撃に彼女を騙し切れる様な高度なフェイントを組み込むことは出来ない。

だから、速度を上げればいい。避けきれないほどに防ぎ切れないほどに。

だが、どうやって

「起動(wake up)」

簡単だ、俺は何だ

魔術師だろう。

なら魔術を使えばいい

「強化開始(start)」

筋肉を補強、骨格を補強、血流を補強、間接を補強、体の全てを補強する。

「今度はこっちからいくぞ!!!」

突っ込んで来る式さんに向かいカウンターを繰り出す

先ほどと同じ袈裟懸け。しかし、剣速は先ほどとは段違いだ。

式さんは先ほどと違い避けるのではなく短刀で受け流す。

「……!?」

表情には、少し驚愕が混じっている。さすがに、予想外だったらしい。

そのままの勢いで掌底を繰り出す。避けられる。

しかし、体勢は崩れた。

そのまま、畳み掛ける。切り下ろし、横なぎ、逆袈裟、突きの四連撃。

しかし、その全てを短刀で防がれ、受け流される。だが、今はこちらに勢いがある。

これを逃しては、勝利はない。

防御を砕くため大振の一撃を繰り出す。

「なっ……!?」

何時の間に取り出したのかナイフの鞘で受け流される。

そうして、見事に体勢を崩される。

「くっ」

何とか体勢を立て直そうとするが、大砲のような衝撃に吹き飛ばされる。

式さんが体当たりしてきたからだ。

「……がっ」

そのまま流れるように地面に叩きつけられる。

衝撃に体が一時的に麻痺する。

そして、首元に短刀が突きつけられる。

「参りました。降参です」

回路を閉じ強化を解除する。

「ぐっ」

全身に痛みが走る。無理な強化のせいだろう。よく、成功したものだと思う。

スツと式さんが無言で手を差し伸べてくる。

「ありとうございます」

式さんの手を借りなんとか立ち上がる。

「それにしても、式さんは強いですね。勝てるとは思ってなかったけど、まったく歯が立ちませんでした」

「当たり前だ。素人に負けちゃ立つ瀬がない。だけとお前、本当に素人か？」

式さんが怪訝そうに尋ねてくる。

「ちょっと反側みたいものですが、素人ですよ」

俺は知識のとおりに戦っただけなのだから。おまけに、それに振り回されてる。まったくもって情けない。

「反側？まあ、どうでもいいか、そんなこと。それより、刀崎。おまえのそれどうなってるんだ？」

それとは、この今は刀身を布に戻している蛮刀のことだろうか。

「この布の部分に魔力を通すと刀身になるんですよ。これ」

魔力かと呟くと式さんは途端に興味をなくしたような残念そうな表情を浮かべる。

もしかして、これがほしかったのだろうか？

「まあいいさ。で、まだやるのか？」

体は痛むが魔力も体力もまだ、余裕が有る。なら、

「はい、お願いします。式さん」

蛮刀を構えなおす。

「いいね、そうこなくちゃ面白くない」

そして、

再び、刃が交差する。

空の境界編 第五話 戦闘（後書き）

どうも、big bearです。

戦闘シーンがうまく書けてるかとても心配です。

おかしな所がないと良いのですが……

拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください

7月十六日 修正、加筆

空の境界編 第六話 浮遊

side 復讐者

「起きろ(wake up)」

炎に身を焦がすイメージを鍵に、魔術回路を開く

体を熱と異物感が駆けめぐる。

意識を、魔力を自分の体に集中する

魔力に肉体を侵食させる

筋肉を、骨格を、血流を、内臓を

侵食し補強してゆく

「ふっ」

「ふむ、約0.5秒か。肉体強化のスピードは中々の物だな。次は変化だ。やって見せる」

「はい」

身体強化を解き、今度は目の前のナイフへ意識を集中させる。

魔力をナイフへ侵食させていく様なイメージで流し込む

少しずつ確実に変化させる。

ナイフを侵食し変化させ新たな機構を付け加える。

付け加える機能は、熱。

何者をも焼き尽くす灼熱を付加していく。

「はあ、はあ」

やっと成功した！

「ようやく、成功させたな刀崎。まあ、出来はへっぽこと言ったところだがな」

そんな、橙子さんの毒舌を聞きながら膝を突く。

体が言うことを聞かず、手足に力が入らない。

「まったく、ちゃんと睡眠をとれと言った筈だが。三日も徹夜すればそうなることぐらい分かっていたはずだ。焦る気持ちは分からないでもないが、無茶しすぎだ。この馬鹿弟子」

「なんとかなると思ってたんですけどね。それより橙子さん、俺の属性と特性は……」

俺の魔術特性と属性は強化では分からなかった。普通は特性と属性は回路を開いたときに分かるしいが俺の場合は、すこし事情が特別だった。橙子さんが直接調べるにもあんなものが体にあつたんじゃない。あ危険過ぎるから、強化した物から属性と特性を調べようとしたのだが……

それも無理だった。なんでも、魔力とランプが一体化しすぎて調べられなかったらしい。

だから、次は強化の発展でもある変化で調べようとしたのだが、そこでまたもや、問題が発生した。

俺が変化を成功させられなかったことだ。

「属性と特性が分からなければ、これ以上の鍛錬は不可能」

そう、橙子さんに言われた俺は大いに焦った。

もし、ここで魔術の鍛錬が終わってしまったら俺が仇を討つことは本当に不可能になってしまう。

そんなことは許されないし、耐えられない。

ゆえに、寝る間を惜しいんで変化の鍛錬を続けた。

「やれやれ、仕方ない奴だ。安心しろ。お前の属性と特性は分かった。属性は風と炎の二重属性。そして、特性は侵食だろう」

炎と侵食……

なんて、因果な

俺の全てを奪った炎が、俺のなかの物の悪意と同じ侵食が俺の力とは……

上等だ！！

いつか奴にこれで奴を殺すときに、後悔させてやる。

俺に力を与えたことを、俺を生かしておいたことを

「ともあれこれで第一段階修了ということだ。おめでとう、刀崎。

これでお前の仇へまた一步近づけたわけだ。もっとも無残な死の方へ、かもしれんがね」

そんな橙子さんの皮肉と祝福を聞いたのは、俺が橙子さんに弟子入りしてから一週間ほどだった、

八月上旬のことだった

―伽藍の堂・事務所―

「連続飛び降り？知りませんが。何か幹也さんが寝り続けていると関係あるんですか？」

幹也さんは八月が始まった当たりからもう二週間以上眠り続けている。

明らかかな異常事態だ。普通、人間は二週間以上眠り続けない。というかてきない。ましてや、何か事故にあったわけでもないと言うのに。

「と言うより、原因そのものだな。おそらく、現場を目撃したか、巫条ビルにでも入り込んだんだ時に連れて行かれたんだろう」
連れて行かれた？一体何に？

「まあ、すぐに目は覚めるさ。式が巫条ビルに向かっているしな」
事情はよく飲み込めないが式さんなら大丈夫だろう。

「それにしても、浅上、巫条、両儀そして刀崎。退魔と混血とはな式と関わると決めた時から想定はしていたが……」

橙子さんのそんな言葉が聞こえてくる。刀崎？俺がどうかしたのだろうか。それに……

「橙子さん。俺がどうかしたんですか、それに混血って……」

「ん、そういえばお前は知らなかったんだな。自分の家系ことは。

混血と言うのはね刀崎。人ならざるものたちと人が混じったものそれの子孫のことだ」

人ならざるものたちと人が混じったもの？よく分からない。そもそも、人ならざるものたちって怪物とかのことか！？

「橙子さん、人ならざるものってまさか吸血鬼とかですか？」

「それも含まれるが基本はこの国において鬼とか妖怪とか言われるものだ。混血は人ならざるものつまりは魔との共存を選んだこの国特有の現象と言っても良いだろうな。魔と交わることで共存を選んだ家系。幸か不幸かお前はその一つの末裔と言っわけだ」

魔との共存……

「じゃあ俺の体には魔の血が……」

そんなことまったく知らなかった。自分の　　のことなのに……

「……
「といっても、お前の家は刀崎とついてるが分家の上に能力を発現出来なかった家系だ。流れていても少量、純度も低いはずだ。ゆえに伝えられてすらいなかったんだろう」

そんな俺の心境を知ってか知らずか橙子さんの説明は続く。

「そんなこと知らなかった……」

自分の家系にそんな秘密があったなんて……

「でも、橙子さんがなんでそんなこと知ってるんですか？」

「調べたのさ、私ではなく黒桐が、だがね」

幹也さんが？この人はあまりこういうことには関わりがない人物だ
と思っただけだ。――

「なら、橙子さん。俺の能力や体の中にあるあれにも、魔の血つて
奴は関係あるんですか？」

これは聞いておかねばならない。もし、その血を制御することで力
を制御することが出来るなら、それは願ってもないことだ。

「それはわからん。私はその分野についての専門家ではないからな。
あと血については制御しようなどと思うなよ。下手に刺激して先祖
還りなどして怪物になられては堪らんからな」

怪物になる？確かにそれは勘弁だ。仇は人間としての俺が討たなけ
ればならないのだから……

「はあ、わかりました」

不意に、ギィとドアの開く音がした。

――翌日――

――藤が丘病院・巫条霧絵の病室前――

まさかこの病院に再び足を踏み入れることになるなんて思っても見
なかつた。

幹也さんが二週間ぶりに目覚めた後、橙子さんに「巫条霧絵の後始
末をするから、ついてこい」と言われのこのこ付いて来たのだ。

と言っても病室の前で待っているだけなのだが。

二十分ほど待っただろうか。

病室のドアが開き中から橙子さんが出てくる。

ドアの隙間から人影が見えた。

腰の辺りまで伸びた流れるような黒髪。白魚のようなというより死人のように白くやせ細った手足。

それが俺の見た巫条霧絵だった。

「終わったんですか？ 橙子さん」

「ああ」

「少し彼女と話しても良いですか？」

「かまわんが、何故だ？」

「少し聞きたいことが有りました」

「聞きたいこと？ まあいい、先に車へ行っているぞ」

そう言うなり、橙子さんはそそくさと出口に向かって歩いていってしまっただ。

それを見届けた後、ノックして病室へ入る。

「こんにちは、巫条霧絵さん」

「こんにちは、さっきの人の知り合いかしら」

「あんたが襲った人と襲われた人の知り合いでさっきの人の連れだよ。名乗りは必要かな？」

「必要ないと思うわ。それで何の御用かしら？」

一呼吸いれて本題に入る。

「一つか二つ質問したいんだが。かまわないかな？」

「ええ、かまわないわ」

「あんたに力を与えた奴について知りたい。特徴、名前なんでもいい」

有無を言わせぬような声色で尋ねる。もし、それが奴らなら……

「男の人だったわ。確か魔術師だと名乗っていたわね、名前は……
……荒耶宗蓮」

荒耶宗蓮……名前から見て日本人。奴らじゃない。しかし、

あまり落胆はなかった。もともと駄目元で聞いた質問だったからだ。

「それだけかしら？」

「ああ、邪魔したな」

踵を返し出口へ向かい歩き出す。

「ねえ、どうしてそんなことを聞きに来たの？」

思いにもよらない質問に思わず足が止まる。

「人を、探してるんだ。もしかしたらあんに力を与えた奴がそいつかと思ってたんだが。違うみたいだ」

「そう、見つかるの良いわね」

「ありがとう」

「ああ、後一つ。あんたは結局何処へ行きたかったんだ」

「私は、何処でもよかったのかもしれない。何処かここじゃないところなら何処でも」

「そうか」

この人は結局そうだったんだ。

自由な体を得て、何処へでも自由に行きたい。それだけが望みだった筈だ。

人を巻き込んで事件を起こすつもりなんて一切なかったのだろう。

だが、力を得てしまったがゆえに事件を起こしてしまったんだろう。

この人もある意味では被害者なのかもしれない。

病院の無機質な廊下を出口に向かい歩いてゆく。

心なしか足取りが重かった。

「橙子さん、今の飛び降り自殺でしたね」

「ああ、そのようだね」

「去年は多かつたって聞いたけど、また流行り出したんでしょ。でも私、自分で死んじゃう人の気持ちって分かんないな。橙子さん、解ります?」

「自殺に理由はないよ。鮮花。たんに、今日は飛べなかっただけだろ」

「そう、ですか。そういえば橙子さん。私の弟子ってどんな人なんですか?」

「会えば解るぞ。まあ、しいて言うなら義理堅い奴だ」

空の境界編 第六話 浮遊（後書き）

どうも、big bearです

今回で原作の第一章終了です。

あとリアルの都合により来週は一回しか更新できません。
すいません。

拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りくだ
さい

七月二十四日 改修

空の境界編 第七話 螺旋（前書き）

「そう、ですか。そういえば橙子さん。私の弟子ってどんな人な
んですか？」

「会えば解るぞ。まあ、しいて言うなら義理堅い奴だ」

空の境界編 第七話 螺旋

???????

「去れ、人形。ここには貴様の愉悦足りうる物は存在しない」
有無を言わせぬ絶対的な拒絶を込め男は宣言した。

「ああ、つれないのねえ魔術師。せつかく手を貸してあげようつて言うのに」

そんな拒絶さえも意に介さず女はその笑みを深くする。

この魔術師がその気になれば女の体を簡単に挽肉できるという事実さえ楽しくて仕方がないと言うかのように。

「貴様の手助けなど不要だ。二度はない、去れ人形。さもなければ――」

そういうと、魔術師はゆつくりと腕を女に向ける。

「無駄・無駄。空間をつぶす程度じゃ私たちは死なないわあ。知ってるでしょう。まあ、忠告くらいは受け取りなさい魔術師」

「忠告だと?」

「そう、忠告。この世には無価値なものはあっても無意味なものはないってことをよくおぼえておきなさい。魔術師」

「.....」

「それと一つだけ私の使い魔おまけを置いて行くわ。好きに使っていいけど。男の魔術師しかも、体の中身のおかしい人が来たら必ず戦わせなさい。絶対よ。そうじゃないと私、怒っちゃうかもしれないわ」
相変わらず笑顔だというのに女の雰囲気はまるで悪魔のような邪悪さと残忍さを持ったものに変化していた。しかし、魔術師は顔色も変えず無言のまま思案する。やがて、今はこの人形の相手をしてい
る時ではないという結論に達すると、言葉ではなく首を少し縦に動かし受諾の意志をしめす。

「そう、ありがとう。あと、そのときは私からの贈り物だと伝えて頂戴ねえ」

それだけ言っていると、女は先ほどまでとは打って違って上機嫌に鼻歌を歌いだす。

「それじゃあ、さようなら魔術師さん。せいぜいかんばってねえ」
そういうと、女は影の中へ消えていく。そして、女と入れ替わるように現れる人型の何か。

女の消えたその場所に残されたのは何処からか聞こえる蒸気の音と低い悲鳴のような唸り声だけだった。

十一月七日、早朝　―伽藍の堂・修練所

ガキンツ　ガキ　ガツ　キン

刃と刃の、鉄と鉄の、鋼と鋼のぶつかり合う音が修練所に響き渡る。突きを放ち相手を牽制し間合いを保つ。相手の得物はナイフ。対するこちらは刃渡りの大きい蛮刀。至近距離ではこちらに勝ち目はない。

「はああああ」

低い姿勢でこちらの懐に飛び込んでくる彼女を横薙ぎで追い払う。

「チツ」

後ろに飛ぶことで回避され、再び距離が大きく開く。

約3メートルほど。彼女が一步踏み込めばこちらの間合いに、二歩踏み込めばこちらが彼女の間合いに。

そんな距離。ならば俺のとする選択はカウンター。

あちらがこちらの間合いに踏み込んだ瞬間彼女が避ける事のできない速度で確実に切り伏せる。

刃を水平に構え、足を大きく開きいつでも迎え撃てる体勢を作る。彼女もこちらの狙いを察したのか姿勢を低くする。

柄を握る指に思わず力が入り緊張からか額に汗が流れる。

ザッ

動いた！

しかし、次の瞬間飛び込んできたのは

「グッ」

彼女ではなくナイフ。

蛮刀で弾くが………

投擲と同時に飛び出したのか彼女が弾丸のようなスピードで突っ込んでくる。

この間合いでは刀は役に立たない。
拳を繰り出し距離を取ろうとするが受け流され体勢がさらに崩れる。
そこに追撃のまわし蹴りが飛んでくる。

「………ガッハ」

受身も取れず、まともにわき腹に受ける。

痛みと衝撃に意識を持っていかれそうになるのを何とか保つ。

「くそっ………」

踏みとどまり、こちらも負けじと蹴りを繰り出す。

しかし、足に乗るようにして避けられ鳩尾に掌低を受ける。

「……………!?!」

たいした速度で殴られたわけではないのに凄まじい衝撃を受けたたらを踏む。

それでも倒れず前を向く。

首元を感じる冷たい金属の感覚。 ああ、またか。

ああ、そうかまた負けたのか。

「参りました。式さん」

「ああ、またオレの勝ちだな」

もう、二十回以上手合わせが行っているが未だ一撃も式さんに攻撃が当たったことはない。

今日は惜しいところまでいったんだが。

「さてと、そろそろ橙子が起きてくるころじゃないのか？」

「えっああ、そうですね。そろそろですね」

十一月七日、朝

―伽藍の堂・橙子の自室―

「大丈夫ですか？橙子さん」

「ええ、大分良くなったわ。ありがとう」

橙子さんは現在、性質の悪い風邪を引いて一週間近く寝込んでいる。あの橙子さんが、である。まさかこの人に侵入を試み成功するような風邪菌がこの世に存在しうるとは、まさに驚天動地、目から鱗を通り越し、目から魚が出てくるような驚きである。

「なーにその顔。まだ、信じられないって顔ね。失礼な、私だって風邪ぐらい引くわよ」

おまけに、いまはめがねをかけているのでやさしい口調になっている。

「い、いえ、そ、そんなこと思ってませんよ。断じてそんなことは」

「凶星だつて顔に出てるわよ。まったく私を何だと思ってるのかしらあなたは」

「す、すみません」

また顔に出てるらしい。気を付けないといけないな。

「まあ、いいわ。それよりおなかか空きました。何か食べるものあるかしら？」

「えーと、御粥ならありますけど」

「おい、まさかきみが作ったのか？
なぜか素に戻ってる。」

「いえ、違いますけど。式さんが作っていきましたよ」

「そうか、よかった」

ちよと、まて今のどうということだ。

「それ、どういう意味ですか？」

「いや、君の作るものはすべて辛くなる所じゃない物になるだろう。今の私にあれを食べるといふのか？君は私を殺す気か？」

確かに、そうだ。昔から何故かやたらと辛いものが好きだった。そのせいなのか、何か食べ物を作るとき

必ず辛くなるらしい。らしいというのも、何度味見しても辛いと感じず調整していくうちに見た目は普通なのに人にとっては「何これ、地獄絵図？」という辛さになってるそうだ。俺は平気なんだけどなあ。一度、橙子さんに振舞ったことがあったのだが三口で失神してしまっていた。

「はあ、いいですよ。どうせ俺は味覚が壊滅してますよ」「御粥をよそぐため台所へ足を向ける。

殺す気か？だって何もそこまで言わなくてもいいじゃないか。

「それにしても、式が私のために何かしてくれるなんてね。驚きねでも、まあ刃物の扱いは慣れてるものね」

たしかに、作っている様子はとても様になっていた。もの凄くうまいかもしれない。

すこし、つまみ食いしても罰は当たらないと思う。

たぶん

十一月七日 正午前 | 伽藍の堂・修練所

橙子さんに御粥を食べさせた後、登社してきた幹也さんに橙子さんの看病を任せ、俺は修練所に来ていた。

「起きろ(wake up)」

目の前の紙に向かい意識を集中していく。

イメージは火。

赤い、明るい火。

アンサズのルーン。アルファベットのFの逆文字を書いていく。ひとつ線を書くごとに魔力を込め、火のイメージを投影する。

ポウツとう音と共に紙が燃え上がる。

成功した。

今度は紙に硬化のルーンを刻み始める。

今度のイメージは岩。何者にも砕かれぬ、硬い、硬い岩。

ひとつ書き込むごとにイメージを投影し、魔力を込めていく。

できた。

しかし

ペラッ

失敗だ。見事までに。

「はあ」

火のルーンは何とかなったが硬化がどうにもうまくいかない。

イメージが悪いのか、魔力の量が足りてないのか。

アドバイスをもらおうにも橙子さんは病気だし、鮮花さんは今日は来ないようだしどうしたものか。

「よし」

とりあえず、頬を叩き気合を入れなおす。

とにかく、数をこなせば見えてくるものがあるかもしれない。

再び、意識中へ埋没していく。

さあ、続きだ。

s i d e o u t

「????????」

「用は済んだのかね？」

「ええ、でもまだよあ。まだ戻れないわあ」

「ふむ、例の男かね」

「その通りい。大分成長してきたようだし、少し見届けようかと思
っているのあ」

「ほう、それ程かね。ではあるいは……………」

「かもしれないわねえ。ああ、楽しみだわあ、本当に本当に待ち遠
しい」

「そうかね、私も見てみたいものだね。”狂喜”」

「いずれ会えるわ。楽しみにしてなさいなあ”傲慢”」

空の境界編 第七話 螺旋（後書き）

どうも、big bearです

今回から、矛盾螺旋です。

中途半端な終わり方で申し訳ないです。

加筆できたら今週中に加筆します。

拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください

七月二十四日 加筆

空の境界編 第八話 礼装（前書き）

「かもしれないわねえ。ああ、楽しみだわあ、本当に本当に待ち遠しい」

「そうかね、私も見てみたいものだね。”狂喜”」

「いずれ会えるわ。楽しみにしてなさいなあ”傲慢”」

空の境界編 第八話 礼装

十一月八日 昼 伽藍の堂 ・ 事務所

S i d e 復讐者

紙が燃える臭いが鼻につく。

「……勘弁してくれ。それ、種も仕掛けもないのか」

鮮花さんがルーンを使い、紙を燃やしたようだ。

「もちろんあります。知らない人にはそう見えるだけで……」

鮮花さんの説明が続いていくが、目の前の魔導書に意識を集中する。英語で書かれているが知識のおかげで大分理解できてきている。

「魔術基盤」

魔術系統によつて「世界に刻み付けられた」大魔術式であり既に世界に定められたルール。人々の信仰がカタチとなったもの。

門派ごとに違いはあるものの、基本的には「術者の体内、もしくは外界に満ちた魔力」を、魔術という技に変換するシステムである。

魔力が電気で基盤が機械つてことか。

硬化のルーンが上手く行かなかったのは基盤への接続が甘かったからだろう。

これで、原因は分かった。ようやく上手く行くかも知れない。

マナ：魔力の呼び名の一つ。大魔力。自然界に満ちている星の息吹たる魔力

オド：魔力の呼び名の一つ。小魔力。生命（人間）が自らの体内で生成する魔力

なるほど、マナは多いが使い難く、オドは少ないが使い易いということか。

魔術刻印：魔術師の家系が持つ遺産。生涯を以って鍛え上げ、固定化（安定化）した神秘を刻印にし、子孫に遺したものの。

血統の歴史全てが刻まれているといっても過言ではなく、魔術刻印を継承した魔術師は一族の無念を背負って、次の後継者に刻印を譲り渡さねばならない。

つまり、魔術師の大家であればあるほど刻印は多くなる。俺にはこれがない。だがそれは問題じゃない。俺には根源の渦に到達する気はない。しかし、瞬時に術を発動できるのはとてもいい。

戦いにおいて大きなアドバンテージになる。何かで代わりをできる
といいのだが……

不意に、ボタンとドアの閉まる音が聞こえた。

橙子さんが帰ってきたのだ。

橙子さんは肩から長い木箱を背負い、手には何か包みを持っている。病み上がりだということを感ぜさせない確りとした足取りだ

「ほら、刀崎。しっかり受け止めるよ」

そういうと、橙子さんは手に持った包みの片方を俺に投げ渡す。

「あ、おっと」

包みは軽そうな見た目に反して結構な重量があり取りそこないかける。

「空けてみる。私からのプレゼントだ」

橙子からのプレゼント！？まさか、あの橙子さんが俺に………
なんだか言い知れない感動が沸き起こる。

涙が出そうだ。

「おいおい、中身も見えないのに感動するんじゃない」

「すいません。なんかうれしくて」

紐の結び目を解き包みを開けてみる。

「これは………」

コートか？いや、ちがうな。知識によると外套というものらしい。

色は濃い紺色。肩と胸の部分には銀のプロテクターのような物があしらわれている。裏地には幾何学的な模様が刻まれている。腰の部分にはホルスターが付いていてとても実用的だ。生地は良くわからんがとても厚く多少の刃物や炎は通さないだろう。

「へえ、なんだいそれ。コートじゃないよね」

幹也さんが覗き込んでくる。

「はい、外套って奴だと思えます。ですよね、橙子さん」

「ああ、お前の礼装だ」

「礼装？もしかして、概念武装ですか？」

疑問に思ったのか鮮花さんが橙子さんに尋ねる。

「いや、そこまでの物ではないが。中々の拾い物だぞ、それは。衝撃、耐火、耐呪その他諸々全て完備の優れものだ。高かったんだぞ。それ」

「どれ位したんですか？ 橙子さん。まさか、今月の給料なしなんて言いませんよね？」

怪訝に思ったのか幹也さんが橙子さんに詰め寄る。

「あ、ああ大丈夫だよ黒桐。大体百万位だったが、金は妹の口座から引き出した」

妹？ 一気に百万円も口座から消えてたら驚く程度じゃすまないだろう。

橙子さんの妹さんはお金持ちなのだろうか？

「それと、これもだ」

橙子さんはもう一つの長い方の荷物も手渡してくる。木箱は見た目と違いズシリと重い。蓋を外すと金属の棒が現れた。色は黒で長さは約七十cm、幅は五、六センチ。中央あたりには突起があり、両端の部分はよく見ると筒状になっている。これは何だろうか？

「橙子さん。こっちは？」

「中央の突起を押ししてみる。それで分かる」

言われたとおり突起を押すと

ジャキ

「!？」

両端の部分から鉄の棒が飛び出す。さらに、飛び出した棒の先端が刃に変形する。先は槍のようになり、側面からは半月型の刃が飛び出す。これで長さは二メートル以上になるだろう。

「これは……」

「戟、それも方天戟って奴か。おもしろいな、それ」

興味が湧いたのか式さんが近づいて来る。

「そうだ。無銘で大して歴史があるわけでもないが持ち運びと使いやすさは中々のものだよ。お前、長柄の武器も試したいと言っているだろうか」

重さは片手で扱うのは無理があるが、両手ならちょうどいい。長さも長柄武器としては少し短いが扱いやすく取り回しも悪くない。

「ありがとうございます。何から何まで本当に……」

「下で振り回してくるといい」

「はい」

修練所に向かって足を向ける。

「式さんも一緒にどうですか？」

一人で馴らすより相手がいたほうが良いと思い式さんに声をかける。

「今日は遠慮しとく。用事がある」

「そう、ですか」

残念だが用事があるなら仕方がない。一人で馴らすしかないだろう。

伽藍の堂 ・ 修練所

外套を着てみる。サイズはピッタリで動きを一切阻害せず重みも丁度良く体に良くなじむ。

戟を展開し両手で構える。

突き、横薙ぎ、振り下ろし。

突き、横薙ぎ、振り下ろし。

突き、横薙ぎ、振り下ろし。

何度も何度も反復し動きを確認する。

「ふっ」

動きは確認できた。次は—————

イメージするのは式さん。

まずは、牽制の突き繰り出す。当然避けられるだろう。次も突き。突き、突き、突き繰り返し素早く退路を塞いでいく。横薙ぎで足払いをかける。

跳躍で避けられはずだ。そうして、また懐に入られる。

蛮刀に切り替え迎撃するが数手で受け流され体勢が崩れる。

体術で対応するが太刀打ちできず倒される。

「はあ」

イメージでも負けた。一体どうしたら式さんに勝つとは言わなくても一矢報いる事ができるのだろうか。

それにしても、戦闘経験が足りない、圧倒的に。

「このままじゃ、不味いな」

いくら鍛えても重要なのは経験だ。とにかく、経験を積まないといけない。

だが、どうやって？

俺には魔術関係の繋がりは一切ない。橙子さんに相談してみるか。

「よし」

考えても仕方がない。とにかく今はこの武器を使いこなせるようにならなきゃいけない。

再び、突きを繰り出す。

「あれ、橙子さん。出かけるんですか？」

修練所から登ってくる橙子さんは厚手のコートを着込んでいた。このコートは出かけるときしか着ないはずだ。

「ああ、黒桐と一緒に少し茅美浜の小川マンションまでな」

茅見浜の小川マンション？

橙子さんが直接出向くなんて何かあるのだろうか？

「橙子さん。俺も同行していいですか？」

経験を積む機会になるかもしれない。

「いいが、余り期待した通りには行かないと思うぞ」

「はい、よろしく願います」

茅見浜 ・ 小川マンション

「ここが……」

車で聞いた話では小川マンションは半月型の建物が向かい合って建てられたまわりくどい構造をした十階建てのマンションで橙子さんはその東側のロビーの設計を担当したらしい。

そして、この一、二ヶ月間で立て続けに奇妙な事件が起きた。

一つは、空き巣が入ったら家族全員が死んでいたという話だ。

この話がおかしいのは空き巣か警察を連れて戻って来てみると誰も死んでおらず家人が出て来たらしい。

もう一つは一昨日の夜の事だった。

二十代前半の会社員の女性が不運にも通り魔に会ったらしい。この辺りは人通りが少なく彼女は最寄のマンションであるこの小川マンションに逃げこんだ。しかし、時刻は十時ごろ人通りはない。

そこで、彼女は力の限り叫び続けた。しかも隣のマンションに聞こえる程の大声で。

しかし、それほどの大声だというのにマンションの住人は一切気付

かなかった。その結果、彼女は亡くなってしまったらしい。確かに、橙子さんが設計にかかわっている事を差し引いても妙な話だ。

もしかしたら、奴らが関わっているのかもしれない……

ならば――――

「おい。どうした？来ないのか？」

橙子さんの急かす声が聞こえてくる。自分で思っているより考え込んでしまっていたらしい。

「あ、ああ。はい今行きます」

考えていても仕方がない。中を見ればもっと何か分かるかもしれない。

なら、行動あるのみだ。

空の境界編 第八話 礼装（後書き）

どうも、big bearです

更新が遅れた上、中途半端で申し訳ない。

たぶん、加筆します。

拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください

空の境界編 第九話 異界（前書き）

考えていても仕方がない。中を見ればもっと何か分かるかもしれない。
い。
なら、行動あるのみだ。

空の境界編 第九話 異界

茅見浜 ・ 小川マンション玄関ロビー

side 復讐者

「うっ」

吐き気がする。

クリーム色で統一された壁はこの上なく清潔にされているのに、ここからすぐさまに逃げ出したくなるほどの吐き気と悪寒を感じる。外の刺すような寒さに比べこの建物の中の空気は余りにも生暖かった。

まるで、人の息のようだ。生温く、体中にまとわり付いて何故か………生き物の胎内にいる様な感じがする。

「黒桐、刀崎それは気のせいだ」

耳元に囁かれる橙子さんの声で悪寒と吐き気から回復した。横を見ると幹也さんも顔色が悪い。

やはり、このマンションはおかしい。何かが決定的にずれている。普通じゃない。

「橙子さん。ここって………」

「ああ、幽霊屋敷みたいだな。隠し切れずに、不吉なものが気配になつて漂つてる。こういう建物は割りと多いよ。人を狂わす建物とというのは簡単に作れるからな」

「いやな建物ですよ。ここ」

どうやら幹也さんも同意見らしい。幹也さんを引き連れた橙子さんはまずエレベーターに乗った。

「刀崎、お前は階段を使つてみる。おそらく、螺旋階段だろうが、目を瞑つたほうがいいぞ。合流場所は五階のロビーだ」

「はあ、分かりました。五階のロビーですね」

「じゃあ上で会おう。忠志君」
「じゃあ後で、幹也さん」

茅見浜 ・ 小川マンション階段―

クリーム色の壁は赤っぽい電灯に照らされ、さながら中世ヨーロッパの城の階段のようだった。

形は橙子さんの言うとおり螺旋階段。エレベーターの周りをとぐるを巻き上へ上へと伸びている。

明かりは暗く階段の隅まで照らしきれていない。一段登るごとに曲がりくねった階段の先に何か待ち受けているような錯覚を覚える。まったくもってこの建物は趣味が悪いことこの上ない。

よく目を凝らすと壁の下のほうや柱にはたくさんの擦り傷のようなものがたくさん付いている。まるで、強引に壁を動かしたような
・
・
・
・
・

四階を過ぎた辺りで前方に人影が見えた。あの後姿は――
――

「おーい、幹也さん！」

幹也さんはこちらを振り返り少し驚いたような顔をしてすぐ安心してような顔になった。

「何だ、忠志君か。びっくりした」

「はは、この雰囲気じゃあ仕方がないですよ」

「そうだね、この建物は少し気味が悪い」

「そうですね、本当に気味が悪い」

「でも、どうして幹也さんまで階段を使ってるんですか？」

ここにいないって事は橙子さんはエレベーターを使ってるはずだ。どうして、一緒に使わないのだろうか？

「所長命令だよ。階段を使ってみるってさ。あと、目を瞑った方がいいとか言ってたっけ」

「俺と同じ指示ですね。そういえば、例の家族、えーと」

橙子さんの意図は良く分からないが、あの人のことだから何か意味があるはずだ。そんなことより気になるのは例の死体だったって言う家族のことだ。

「藤条家のことなら、普通に生きてたよ。たぶん、空き巣が見た幻覚か何かだと僕は思うよ」

「何も無かったんだったらそれでいいんですけど」

思い過ごしたったのかもしれない。少し焦り過ぎていた。そう簡単にやつらが尻尾を出すなら何の苦勞もない。

茅見浜 ・ 小川マンション五階

5階まで登り切ると開けたロビーのような場所にたどり着いた。

「来たね。じゃあ降りよう」

ロビーでは橙子さんが待っていた。何も言わずエレベーターに乗り込む彼女について行く。エレベーターに乗ると階数のボタンも押さず、彼女はこう言った。

「黒桐、刀崎少し下をむいてる。ちょっとしたクイズだ」

「え、はあ、下を向いてればいいんですね」

何も言わず言われたとおりに下を向く。何か意味があるのだろうか？エレベーターの扉が締まる。そして聞こえてくる不自然なほど大きいエレベーターの起動音。

降りていく時間は三秒ほどだった。

「さて、ここは何階でしょう?」

「四階じゃないんですか。ここ?」

「あれ……五階のままだよ忠志君」

幹也さんの声に顔を上げ前方を見ると、ロビー壁に嵌められた5の数字のプラスチックが目に入る。

「じゃあ、さっきのは六階だったんですね」

「正解。お前たちは一階登ったつもりで二階登ってしまったんだな間違いやすい階段の設計だが……」

橙子さんの説明が続いていくが、俺の頭の中は一つの疑問が占めていて話はあまり頭に入っていない。

このマンション一体何の目的で作られたのだろうか。

こんなめんどくさい構造になっているのは何か意味があるはずだ。だとしたらそれは何だ。わからない。

茅見浜 ・ 小川マンション一階ロビー

一階に降りた俺たちは東側のロビーに来ていた。

東側のロビーはちょっととした広さの広場のような作りで映画とかで見るような洋館の大広間のようなようだ。

「しかけるなら、まあ、ここかな。万が一のための逃走経路ぐらいは作っておこう」

橙子さんは床に膝をついてしゃがみこみ、そのままぺたぺたと触っていた。

「……あの。何してるんですか、所長」

怪訝に思ったのか幹也さんが尋ねる。

「用心用心。ところでさ、階段使って気がつかなかった?動かした

跡があつただろ、あれ」

「？」

階段を、うごかした……！

出来るのかそんなこと。だけどあの不可解な傷。たしかにあれは階段を動かしたとすれば納得がいく。

「柱ではなく階段だけだ。壁の隅に擦り傷があつただろう」

「……でも階段を動かすなんて不可能です。あの柱を動かすってことは、このマンションを壊すってことでしょう？」

幹也さんの言うとおりだ。そんなことをすればこのマンションは崩壊するだろう。

「だから階段だけだといっただろう。要するにロケットペンシルなんだ」

「ろけつとぺんしるってなんですか？」

「知らないのか、ロケットペンシル。刀崎、まさかお前もか？」

「ええ、なんですか？ろけつとぺんしるって」

ピタリと橙子さんの手が止まる。

「お前たち、本当に知らないのか。私が学生の頃は流行ってたんだけどなあロケットペンシル。イメージ的にはところてん」

どうにも納得がいかないという表情で橙子さんは言う。

ロケットペンシルはよくわからないがトコロテンなら理解できる。

要するにしたから押し上げたのだろう階段を。最初から半階分余分に作ってあってその分をしたから巨大なピストンか何かで押し上げたのだろう。

橙子さんの説明は大体俺の考えと同じだった。

「さあ、帰ろう」

また歩きだした橙子さんに付いてマンションを出る。

全く、気味の悪い悪趣味な場所だった。

最後に落ちとして、路上駐車していた橙子さんの車には駐車違反の切符がきられていた。

それを見た時の橙子さんのレアな表情を見られたのが今回の唯一の収穫だったかもしれない。

十一月十日 伽藍の堂 ・ 事務所

いつも通りの事務所。違うのは幹也さんの表情だ。どこか、思い詰めて切羽詰ったような表情。だが、その仕事ぶりはいつもと同じだ。式さんと何かあったのだろうか？

「黒桐。昨日の話なんだが」

橙子さんの話を聞く限りでは件のマンションの入居者五十世帯の内二十世帯は存在せず、架空のでっち上げの入居者だったらしい。

「まずまず、不可解だ。一体何なんだあのマンション??」

「でっち上げられてたのは揃って西棟の住人だけだこれがどういう事が—————」

言いかけて橙子さんは眉をひそめる。まるで、虫に体中を這い回られたような不快な表情を浮かべている。

「侵入者だ」

そう呟くと机の中から何かを取り出し幹也さんに向かって放り投げる。

「それを持つて壁際に立て。指にははめるな。すぐに客が来るが徹底的に無視しろ。声も上げるな。刀崎、お前は私の後ろに立っている。回路は開かなくてもいいが武器は持って気を緩めるな」
思い切り不快な表情のまま橙子さんは言う。そこには質問は受け付けられないという緊迫感があった。

言われたとおり、待機状態の蛮刀を携え橙子さんの後ろに立つ。回路は開かないが体は緊張状態にしておく。何かあれば直ぐに切りかけられるように。

と、直ぐに足音が聞こえてくる。コンクリート床を誇張するような、甲高い靴の音。迷うことなくこの部屋に向かってくる。

事務所の入口に赤い人影が現れる。暗めの金髪と碧眼、彫りの深い美形の顔に貴族のような品のある立ち振る舞い。年の頃は二十代前半の赤いコートを着て山高帽のドイツ人。そういやなんかの映画でこんな工場長が居たな。まあそんな事はどうでもいい。

そいつは事務所に入るなり陽気に手を上げ、
「やあ、アオザキ！久しぶり。ご機嫌はいかがかな？」

などと言った。親しみに溢れた笑みを浮かべながら。

俺にはそれが限りなく胡散臭く邪悪に思えた。

空の境界編 第九話 異界（後書き）

どうも、big bearです。

今回はほぼ原作通りになってしまいました。自分の技量不足を痛感です。

拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください

空の境界編 第十話 抑止（前書き）

そいつは事務所に入るなり陽気に手を上げ、

「やあ、アオザキ！久しぶり。ご機嫌はいかがかな？」

などと言った。親しみに溢れた笑みを浮かべながら。

俺にはそれが限りなく胡散臭く邪悪に思えた。

空の境界編 第十話 抑止

十一月十日 伽藍の堂 ・ 事務所

side 復讐者

コルネリウス・アルバ。それが侵入者の名前だった。橙子さん曰く次期シユポンハイム修道院の院長。橙子さんが倫敦に居た頃の知り合いらしい。

先程からマシガンみたいにしやべりまくる侵入者を睨みながらようやく橙子さんは口を開いた。

「無駄話をしにきたのならお帰り願おう。人の工房に無断で入ったんだ殺されても文句は言えんぞ」

「なんだ、キミだって無断で私の世界に入ったじゃないか。連れが居たようなので挨拶するのはやめておいたが、本来ならばキミこそ無作法と罵られるべきだが。不作法といえば……」

そついうと男は俺の方へ視線を向ける。腰に巻きつけた壺刀の柄に手をかけ身構えておく。

「そう警戒せられていては落ちつかない。ここでは事を起こすつもりは無いから安心したまえ」

男の言葉には睨みつけることで答える。確かに自分に不利にしかないこの場所で事を起こすとは思えない。でも、その可能性が少

「しでもある限り警戒は解く気は無い。」

「やれやれ、アオザキ。君の弟子だろう彼は。キミからも言ってくれないか。これではゆっくり話ができない」

「アルバ。私はお前とゆっくり話をする気など毛頭ない。自慢話は腐るほど居る弟子にする事だ。用件だけ話してこいつに切りかかれる前にとっとと帰ることだ」

「フン。相変わらずだなキミは。解ったよ。積もる話は後にしよう。いずれ私の世界で話し合うことになるんだ。楽しい話はくつろげる場所するものだ」

男はそこでもつたいぶるように言葉を切る。そして、

「……………アオザキ。大極は預からせてもらった」

大極？聞いたことがあるような無いような。俺にとってはその程度の意味しかない単語だったが橙子さんには違ったらしくこの人には珍しく目を白黒させている。

「……………大極の中に大極を取り込んだのか。本気で根源に近づこうという心意気は認めるが、抑止力が動くぞ。世界か霊長、どちらが動くかは知らないが過去あれを退けた魔術師は一人としていない。自ら破滅するつもりか。アルバ」

抑止力

カウンターガードイアン。

集合無意識によって作られた、世界の安全装置。

人類の持つ破滅回避の祈りである「アラヤ」と、星自身が思う生命延長の祈りである「ガイア」の二つがありどちらも現在の世界を延長させることが目的であり、世界を滅ぼす要因が発生した瞬間に出現、その要因を抹消する。

全ての魔術師が目指している「根源」への到達は、抑止力が発現す

る対象だ。

どんな優れた魔術師でも抑止の前では無力だ。これがあるから魔術師たちは根源の渦へと至れない。

確かに橙子さんの言うとおり遠まわしな自殺行為といえるかもしれない。

だが、赤いコートの男はそれがどうしたと言わんばかりににやりと笑う。

「抑止力？あぁ、あの邪魔者は動かない。今回は自ら道を創るのではなく元からある道をたどるだけだからね。だが、それでもことは慎重に運ぶつもりだよ。リヨウギというサンプルは丁寧に扱わせてもらおうよ」

りょう、ぎだつて？こいつ、まさか式さんを！？

「式をどうしたっていうんだ、おまえ！」

瞬間、幹也さんの叫び声が響いた。全員が幹也さんのほうを振り向く。

この莫迦と、といった感じに顔をしかめる橙子さんと、呆然と幹也さんを見つめる男。

幹也さんを見つけると男は楽しくて仕方がないという風に笑う。

「昨日の少年だね。そうか弟子は一人だという話だったが、もう一人居たのか。嬉しいな。愉しみが一つ増えてしまったじゃないかアオザキ！」

くると橙子さんのほうへ振り返り男は言う。両手を振り上げオペラ歌手のように語るその男はとても正気に見えなかった。

「それは弟子でもなんでもないと。……といたところでは無駄か」

「用件はそれだけか。わざわざ報せを持ってきてくれたことには感謝するが、私が協会に知らせるとは思わなかったのか？」

「キミはそんな事はしないさ。仮にしたとしても、連中がくるまで六日、いやこの国の組織との交渉も含めて八日だな。どこぞの神様なら世界を創つても余裕があるじゃないか!」
そう言うとはははは、笑い出した。ひとしきり笑うと満足したのか踵を返す。

「それでは、また。君も準備があるだろうが、できるだけ早い再開を楽しみにしているよ」

最後まで陽気な口調のまま挨拶を残し赤いコートの侵入者は去って行った。

「橙子さん、今のはどういうことなんですか!?!」

侵入者が去った後、俺と幹也さんは橙子さんに詰め寄っていた。

「ああ、式が拉致監禁されたという話だな」

橙子さんは平然とした態度だ。

「監禁されたって、何処に?」

幹也さんが橙子さんに問う。おそらく監禁された場所は……
ならば相当に危険だ。

「小川マンション。おそらくは最上階。と、あそこは屋上は無かつたな。十階のどちらかの棟だな。

式は陰性だから東棟か」

橙子さんはあくまで冷静だった。タバコを取り出し一服する余裕さえある。

だが、幹也さんはそうは行かない。今にも駆け出し行きそうな様子だ。というか、もう走り出そうとしている。

「ま、待つてくださいい幹也さん。俺も一緒にー」

相手は魔術師だ。幹也さん一人ではむざむざ殺されに行くようなもの。俺一人ではたかが知れてるがそれでも居ないよりはましなはず。そう思い、幹也さんと共に行くこととするが……

「待て、せっかちな奴らだ。小川マンションには私が行く。半人前と一般人では玄関口でアヒルにでもされるのが落ちだ」

確かに、そうだ。それに橙子さんは俺なんかと違い当代最高とも言われる人形師。俺が行くより遙かに確実だ。

「ーなんです。主張はいつも通り我関せずって方針のはずじゃないんですか？」

むっとしたように幹也さんが言う。

確かに、いつもの橙子さんならそうするはずだ。だが今回は橙子さんの身内のこと。そして彼女曰く、魔術師は身内には親身なるものらしい。

「基本的にはな。だが今回は他人事ではない。どうやら私にも関係があるようだ。……もつとも、式と関ると決めるときからこうなることを予想していたけどね。まったくなんて因果だ。」

と、橙子さんは以前と同じ台詞をもらす。

「刀崎、私の部屋のクローゼットから鞆を持ってきてくれ。オレンジ色の方だ」

「解りました。すぐに取ってきます」

すぐに隣の橙子さん部屋に向かう。クローゼットを開ける。中には洋服の代わりに鞆が二つ。

一つはアタツシユケースを少し太めにしたようなオレンジ色の鞆。
もう一つは旅行用のものと思われる大きな鞆。

「えっとオレンジのやつだよな」

オレンジの鞆を手に取る。意外に重たい。センスを感じさせるしゃれた作りで外側にはステツカーのようなものが沢山貼られている。鞆を持って事務所に戻る。橙子さんはいつもの革製のロングコートを着てるところを見ると丁度話が終わったところらしい。

「取ってきました。これですよな」

「ああ、それだ。ありがとう」

鞆を橙子さんに手渡すと橙子さんは俺にいつも吸っているタバコを手渡してくる。

「橙子さん。これってー」

「預けておく。台湾のまずい煙草だね。もうそれしかない。作った会社は当然無く、どこぞの物好きな職人がダンボール箱一つ分だけ作ったという一品だ。そうだな。ここでは二番目に価値のある品物だよ」

「……もしかして一番目に価値のある備品って僕たちのことですか？」

もしそうなら嬉しいような、悲しいような……

「失礼な。いくら私でも人間を備品扱いはしないよ」

まるでめがねをつけてるときのように口を尖らせる橙子さん。そうした後いつもの冷淡な顔つきに戻り

橙子さんは続けた。

「黒桐。魔術師という輩はね、弟子や身内には親身になるんだ。自分の分身みたいなものだから必死に守ったりもする。……まあ、そんな訳だから、君は安心して待っている。今夜には式を連れて帰る」

かっかつと歩いていく橙子さんに着いて行く。

「俺も一緒に行きます」

「必要ない。私だけで充分だ」

「しかし」

「くどいぞ。お前には工房と黒桐を頼む。あいつは式の事となるとたかが外れるところがあるからな。」

お前がちやんと見張っておけ。あと煙草は吸うなよ」

「俺、未成年ですよ。吸いません。それにまずいんでしょ」

「確かにそうだな」

何がおかしいのか橙子さんはクスリと笑う。つられてこちらもクスリ。

「橙子さん、お気をつけて。必ず帰ってきてください」

「ああ、分かってるよ。こっちは頼んだぞ」

そうして俺は、自分の師の茶色いコート魔法使いの後姿を見送った。

十一月十一日 伽藍の堂・修練所

「これと、これとこれもだな」

武器を選別する。必要なものを余さず持っていかないと。

投適用ナイフは三振り。

それ以外にも二振り。

方天戟。

そして蛮刀。

外套に袖を通し、ホルスターにナイフをしまう。蛮刀は待機状態で腰に巻きつける。

「・・・・・・・・」

落ち着かない。

橙子さんは昨夜帰ってこなかった。つまりは・・・・・・・・

この程度の装具じゃ心許無い。相手はおそらく橙子さんを破った相手。しかも一人とは限らない。

勝てる気は一切しない。だがこちらの目的は勝つことではなく式さんを助けること。極論すれば戦闘をする必要は無く式さんを敵に見つからず助け出せばそれでいいのだ。だがおそらくそれは無理だろう。

あそこは敵の結界つまりは敵の体内の様なもの、気づかれずに行くのは不可能だ。なら、時間を稼ぎ相手の注意をひきつける・・・・・・・・

「囷がいるな。俺しか居ないか適役なのは。橙子さんを倒したやつを相手に十分間逃げ回るだけの簡単なお仕事ですってな」

軽口を叩いて自分を叱咤する。そうでもしないと足がすぐむからだ。イスに座りゆつくりと精神を集中していく。

知性が逃げ出せと叫んでいる。

お前の目的は何だと、ここで命かける意味はないはずと。

たしかに逃げ出してしまえば命は助かる。仇を追い続けることができる。

だが、今度は魂ココロが語りかけてくる。

それでいいのかと、お前は自分の恩人たちをみすみす見捨てて自分の眠る場所へ胸を張っていけるのかと。

そつだ。ここで逃げ出してしまつ方が良いなんてことは充分すぎるほど分かつてる。

だけど、俺は橙子さんや式さん、幹也さんへの恩を一切返してない。

たけどそれで良い訳が無い。俺のポリシーは義理堅いこと。

なら、受けた恩を返さないなんて許されない。

覚悟は決まつた。命でも魂でも何でも賭けて時間を稼いでやるぞ。

茅見浜 ・ 小川マンションー

準備を終え、幹也さんと合流し小川マンションに到着したのは夜遅くのことだつた。

これから、ここに侵入し式さんを助け出すわけなんだが……

幹也さんと俺が立てた計画は拍子抜けするほどに簡単だつた。

俺と幹也さんが困をやる。そして、式さんの知り合いで協力者のひとが式さんを助け出す。

最初この計画を聞いたとき俺は反対した。今だつて反対だ。

再三説得したが聞く耳持たないといつたところだ。橙子さんの言うとおりだつた。

幹也さんの覚悟は硬い。

「でもよ、俺だつて結局は気付かれるんじゃないのか？」

そしてこの目の前の青年の覚悟もだ。

「そのための困だ。アンタが式さんを助け出す時間は俺が稼ぐ」

敬語は嫌がられたのでやめる。どうやら同い年のようだし。

「僕もだよ。君には地下から侵入してもらおう。マンションから離れたマンホールから下水に入ってそこから地下駐車場に入れる。たぶんそこが彼らの工房ってことだと思う」

「ったく、簡単に言ってくれなせ」

文句を言いつつ彼は支度を整える。

「じゃあ時計を合ってるな。半になったらマンションに突入するから、あんたもそのときに合わせて駐車場に侵入してくれ」

「……俺は慣れてるけど。あんたたちはなぜここまでやるんだ。両儀のためか？」

彼の質問に俺と幹也さんは困った顔になる。

「おい死ぬかもしれないんだぜ。恐くないのか？」

「恐いな。だけど、ここで逃げて後で後悔するのはもっと恐い。恩を返せないのはそれより恐い。ただそれだけだ」

「うん、恐いのは当たり前だよ。本来僕はこういう役回りじゃない。自分でも驚いてるよ」

幹也さんはそこでいったん言葉を切り目を閉じる。まるで自分に言い聞かせてるようだ。

「前にすこし先のことを見てしまっ子と出会っただけだ。その子の話じゃあ式と関ってると命を懸ける出来事に遭っって言われたんだ」

そんな話は俺も初耳だ。未来視ってやつの事なのか？でも、当たってるかもしれない。

「ああ、そりゃ今だぜ。で、結果は」

「なんでも……死ぬことは無いらしい」

その予言が当たっているのならすこし希望が見えてくる。そしてその理由はとても幹也さんらしくなんだか嬉しくなる。

やっぱこの人はこうじゃないとな。

「礼は言っとくぜ。っとうさだ。まだ互いに名前を覚えてなかった

な。俺は臙条巴。あんたは？」

「黒桐幹也だよ」

「そっか。ほんとにどっかの詩人みたいな名字してんだな、あんたは。で、そっちのあんたは？」

「刀崎忠志だ」

この名乗りもたぶん無意味なのだろう。だが名乗らずには居られなかった。

「タダシか。どんな字を書くかは知らないがなんか、あんたらしいな」

それだけ言つと彼は何かを幹也さんに手渡す。

「これは？」

「いいからもってる。これからはあんたが守らなくちゃいけないからな」

そついうと彼は儂げに笑う。

そこまで来てようやく気付いた。彼は帰ってくるつもりが無いのだらうと。

「事が終わつたら俺たちは二度と会わない方がいい。探すのもしないだ」

これ以上言葉は無粋なだけだ。黙つて彼の言葉を聞き届ける。

「そついうこつた。俺はあんたらは知らない。あんたらも俺を知らない。それでいいのさ。どっちかの責任でどっちかが死んじまった、なんて寝覚めが悪くなる」

そして、彼、臙条巴は一步踏み出した。

言葉はかけない。それでいい。

「じゃあな！俺は全部終わつたら一からやり直すんだ。両儀の事は

愛してるけど、あいつには俺は必要ない。俺とか刀崎。そして両儀みたいな人間にはさ、あんたみたいなあきれるほど害のないやつのほうが良いのさ「――」

そんな言葉を残しかねは走り去っていった死地へ向かって。

その覚悟のこもった背中を見届け自身の死地へと向かい合う。

もはや、迷いなど微塵も無い。ただ己の成すべき事を成すだけだ。

「行きましょう。幹也さん」

「ああ、行くう」

師のため、恩のため、自分のため死地へと向かいただ遮二無二なつて突撃する。

空の境界編 第十話 抑止（後書き）

どうも、big bearです。

今回は今までで最長になっちゃいました。上手くまとめられない自分の文才の無さが憎いです。あと、今週はもう更新できそうにありません。

申し訳ない。

では、拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください。

空の境界編 第十一話 死線（前書き）

「行きましょう。幹也さん」

「ああ、行く」

師のため、恩のため、自分のため死地へと向かいただ遮り無くなつて突撃する。

空の境界編 第十一話 死線

ide 復讐者

マンションに踏み込んで感じたのは前とはまったく違う静けさだった。先日のような生暖かさは一切感じない。

だが、先日の何倍もこの場所は異界じみている。一步步くごとに自分はこの異界の中で殺されるのだという錯覚を覚える。それでも引き返す気など一切湧いてこない。覚悟はできている。

ここは魔術師の工房。もとより俺のような半端者では生還など望むべくも無い。

それでも行くと決めたのだ。迷いなど無い。

「とりあえず三階からにしよう」

横に居る幹也さんの意見に同意しエレベーターのボタンを押す。大きな駆動音と共にエレベーターが五階から降りてくる。音も無く扉が開き、その人物は現れた。その手には………

「……え」

その人物を認識した瞬間幹也さんをつかみ後ろへ向かい一気に後退する。

「確りしてください！！幹也さん！」

幹也さんは片手で口を押さえている。無理も無い。俺だって幹也さんがこうならなければ吐いていたかもしれない。だが今は………

「幹也さん！確りしてください！！式さんを助けるんじゃないんですか！！」

叱咤する。気持ちはいやというほど理解できる。それでも今はせめて逃げてもらわないと………

「あ、ああ分かってるよ。大丈夫だ」

「幹也さんとかく今は逃げてください。俺が時間を稼ぎますのでその間に幹也さんは上へ」

「分かった。でも……」

「俺のことなら大丈夫です。だから、行ってください」

幹也さんは先程より確りとした。足取りで駆けていく。

「おや、そっちの彼は逃げるのかい。でも、まあいいさ。すぐに見つけられる。で、君は師の仇討ちに来たんだろ。殊勝なことだ。アオザキが羨ましいよ」

赤いコートの男はその顔に歪な笑みを張り付かせたままエレベーターを出る。

その手に青崎橙子の生首を抱えたまま。

「見ての通り君の師は死んでしまった。でもー」

もはや男の言葉など聞こえない。怒りと殺意が全てを塗りつぶす。

筋肉と皮膚を強化／生首（生首）の目が潰され地面に血が滴り落ちる。

血管と臓器を強化／何かが砕けていく落ちていく音が聞こえる。

強化完了。普段より多く時間をかけゆつくりと体を強化した。

準備はできた。

「ほら、これで死んだ」

男の笑い声が聞こえてくる。

こいつがこうして笑っていることが許せない。

こいつが息をして喋っている事も許せない。

殺してやる。力量差なんて関係ない必ずこいつを殺す。それだけだ。

こいつは俺の師を殺し、あまつさえその亡骸さえ愚弄した。許され

るはずが無い。

怒りで沸騰していた頭を殺意が静めて行く。

「……それだけか？」

男の笑いが収まっていく。どうやらやっとこちらの殺意を認識したらしい。

「何だつて？何か言い残すことがあるのかな？」

脳裏に記憶がよぎる。余りにも短かくだが忘れること無いであろう記憶。

橙子さん。今までありがとうございました。もう恩は返せないけどせめて仇は俺の手でとります。

「言いたいことはそれだけかと言ったんだよ！今際の際の言葉はそれだけでいいかってな！！」

礼装全てに魔力を通し起動させる。準備は整っている。後はそれを成すだけだ。

「楽に殺してやるつもりだったが気が変わったよ。お前もアオザキ同様存分に痛めつけて私に無礼な口を叩いたことを後悔させながら殺してやる！！」

蛮刀を水平に構える。意識の全てを眼前の敵の絶殺に向け集約していく。

再び動き出したエレベーターの音を合図にして瞬間、殺意と共に駆ける。

s i d e o u t

茅見浜 ・ 小川マンション・東棟ロビー

両者の思惑に反して戦いは膠着状態に陥っていた。その原因は両者の戦闘スタイルの致命的なまでの違いである。

ただ純粹に魔術を使い圧倒的な火力で攻め立てるアルバ。身体強化による接近戦を主とする忠志。

もし、お互いの戦闘スタイルが同じだったなら決着は一瞬で付いていたはずだ。

だが、両者のこの決定的な違いは両者に焦りと苛立ちを与えていた。

「また、逃げ隠れかこの鼠め。出てきておとなしく私に殺される！ Repeat！」

呪文が紡がれたその刹那、劫火が引き起こされる。劫火はフロアの空気を焼き尽くして燃え上がる。

その何者をも焼き殺すその炎の地獄の中で動く者があった。

「は、！」

炎が消えた瞬間、影が飛び出す。刃が煌き斬撃が走った。

「ちっ」

斬撃は魔術師の頬を掠めるだけに留まる。影はその場には留まらず、再び柱の影に消えていく。

side 復讐者

「掠っただけか。このままじゃこっちが息切れするのが先だな」

柱の影で息をつく。こちらとあちらでは魔術師としての力量差は歴然。持久戦じゃ絶対になわれない。

「そこか！！ Repeat！」

劫火の熱が迫ってくる。堪らず柱の影から飛び出しつつナイフを投擲する。

無理な体勢で投げつけたせいでナイフは敵の頬を掠めるにとどまる。こんな攻撃では相手を怒らせたただけだ。

「きさまああああ!」

ほら、この通り。再び影へ向かって飛び込む。焦げた臭いがする。少し裾が焦げたらしい。

「畜生。当たるわけねえか。だが、どうしたもんかな」

このままじゃじり貧だ。攻撃はこっちの方が当てているが火力が違いすぎる。

しかもこっちは逃げ隠れしながら戦っている。隠れる場所はどんどん減ってきた。最終的には鼠のように追い詰められてバーベキューにされるのがオチだ。

「あれは……」

ふと天井を見上げるとスプリンクラーが目に入る。消火用のものだろう。面倒を避けるためだろうがこんな場所でも一応、建築基準法を守っているらしい。あれで火の勢いを弱められれば……いや、それは無理だ。焼け石に水にしかない。

「Repeat!」

再び劫火が迫ってくる。

「くそつたれ」

時間稼ぎには成功した。だが、逃げられない。ここから出口をつなぐ一本道の間には奴が立ってる。

逃げるには奴を倒さなきゃならない。

「どうしたらいい。どうすればいい。このままじゃ……」
覚悟を決めて突っ込むか? いや、だめだ。犬死だ。それでは――

――

頭をひねる。知識を探れ。何か手があるはずだ。

確か、この外套には耐火性があると橙子さんは言っていた。こいつに賭けてみるか。

「さてよ。あのスプリンクラー……」

「追い詰めたぞ！！殺してやる！Repeat！」

迫る劫火。後ろは壁。逃げ場はない。だが！！

「はあああああ」

手に持った戟をスプリンクラーに向けて投げつける。戟は装置を貫きその後ろの水道管さえも切り裂く。

水道管からは大量のみ水があふれ出し劫火に向かい流れ込む。水は蒸発し水蒸気となり視界を覆い尽くす。

「な、なんだこれは」

奴は状況について行けていない。今だ！！

蛮刀を展開。外套を強化。一気に駆ける。腕を上げ頭をかばい、炎に向かって突撃していく。

凄まじい熱を身近に感じる。恐怖をかみ殺す。一步立ち止まればこの地獄は俺の体など一瞬で焼き尽くすだろう。だから走る。ひたすら走る。この地獄の中を鋼の意思と殺意を持って死線を踏み越える。

一瞬の事だったのだろうが、俺には永遠にすら感じられた。

突然、視界が開ける。目の前には赤いコートの男。その顔は驚愕で染まっている。

「き、きさま！！Repeat」

再び劫火の呪文が唱えられる。だが……

「遅い！！」

そう遅い。奴の呪文よりこちら刃が遙かに早い。これで終わりだ。

袈裟懸けに振るわれた凶器は一瞬の後に寸分たがわず奴の命を刈り取る。

勝った！！

「、肅」

不意に短い韻が聞こえた。

気付いた時には前方に向かい転がり込んでいた。

すぐさま立ち上がり後ろを見ると先ほどまで俺の居た空間が歪んでいた。アルバも驚いているようだ。空間への干渉および操作は一流の魔術師でさえも大掛かりな準備が必要になる。俺と戦っている間にアルバが用意したとは到底思えない。やはり、もう一人敵がいる。しかも、アルバより強力な魔術師が。

「なるほど、確かに奇怪な中身している」

背後から声が聞こえた。重い、苦悩に満ちた声を。

「な、このお」

振り返りざまに蛮刀を振るう。手答えは無く振るった刃は宙を切るだけ。

「アルバを倒しかけるとはな。侮っていた。さすがは青崎橙子の弟子といったところか」

再び背後からの声。振り向くと階段の上にそいつは居た。

黒い人影。見るもの全てを威圧する黒い石柩。その顔からは底が知れないほどの苦悩が読み取れる。

間違いない。こいつが、この異界の、この結界の真の主だ。そして

「一応、確認する。橙子さんを殺したのはあんただな？」

「如何にも。青崎橙子の肉体を破壊したのは私だ」

「式さんを攫ったのもアンタだな？」

「如何にも」

「そうか。あんたが元凶か」

「アラヤー！私の邪魔をするな！」

後ろからアルバの叫び声が聞こえてくる。

「黙れ、アルバ。お前は既に敗北している。それに此のものの相手は決まっている」

静かだというのにその声には何ものをも屈服させる力があつた。気圧され黙り込むアルバ。だがこの際アルバはどうでもいい。目の前のこの男はアルバとは比べものにならないほどの強敵だ。

「で、次はあんたが相手か？」

それでも整然とした態度で立ち向かう。もともと敵が一人なんていうような甘い妄想など抱いちゃいない。

「否、貴様の敵は私ではない」

「は、じゃあ誰が……!?」

影からそれは現れた。

この異界の中にあつてなお異質。理解できない、理解したくない存在。まさしく怪物。

シルエットは人型なのに余りに異形。二メートル後半程の青白い巨体には所々焦げたような黒があり10メートル近く離れているというのに周囲の空気が歪んでいるのが見て取れる。四本生えた腕には指の一本一本に鋭利な爪。顔のような部分の口の当たりには恐竜のような牙が並んでいる。

「な、なんだ。コイツ!？」

「GURUZIIIIIGURUZIIIGU、GGG」

聴く者の魂を凍り付かせる、地の底から聞こえるような低い唸り声。俺にはなぜかそれが助けを求める悲痛な叫びに聞こえた。

「人形たちからの贈り物だ。受け取るがいい」

人形たち？人形たちだと!? 魔術師が言う人形たちが指すものはひとつだけ。

「く、ははははは。あははははは」

頬が釣りあがる。嬉しくて笑いがこみ上げる。見つけた。手掛かりだ！テガカリ!!!こんなに早くこんなところで見つかるなんて。

「何が可笑しい？気でも狂ったか」

「いや何。ただあんたをぶっ殺す前に聞くことができただけだ」

「叶うと思うか？魔術師」

「思ってるさ。魔術師」

だがその前に……前方の化け物に向き直る。恐怖はない。

今は喜びが勝る。超えてやる。どんな化け物でも絶対に。

「行くぜ！！化け物！！」

こちらに向き直る化け物。牙を剥き、爪を立て吠える。

「D A A A Z U U Z U Z U U G E E T E D E E」

刹那、化け物と人間が交差した。

空の境界編 第十一話 死線（後書き）

どうも、big bearです。

一週間も更新できずすいませんでした。そして、初の三人称での戦闘。

うまく書けてるといいのですが。

では、拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください。

8月15日 修正

空の境界編 第十二話 覚醒（前書き）

「行くぜ！！化け物！！」

こちらに向き直る化け物。牙を剥き、爪を立て吠える。

「D A A A A Z U U Z U Z U U G E E T E D E E」

刹那、化け物と人間が交差した。

空の境界編 第十二話 覚醒

刃が、牙が、拳が、爪が、殺意が吹き荒れる。互いを撃滅せんと人と化け物が激突する。

「はああああ!!」

繰り出された斬撃は化け物の肉を、臓腑を、骨を切り裂く。しかし

「AAAAAAAAAZUUUU」

「こいつ!? また再生してやがる!」

再生する。如何なる傷もこの化け物には意味を成さない。たとえ致命傷であつても一瞬で再生する。

その奇怪な容姿ではなくこの不死性こそがこの化け物を化け物たらしめている所以だ。

対して。

「AAAAAAAAAZUUUGEE」

「つ、ぐ!?」

化け物は確実に獲物を追い詰めていく。爪と牙は肉を抉り、流れ出る血の量だけ体力を失う。

「この! いい加減に、死ねえ!!」

「IDAAAII!」

再び、刃を振り下ろす。本当の不死身などの世界には存在しないと殺せないものなど無いと。

眼前の敵を殺すために。唯、刃を振るう。

だが、化け物は止まらない。止められない。

「AAAAAAAAAZUUIIIIII」

「チッ」

接近戦は不利と悟り、後ろに向かって距離をとる。自らの武器

ちから
のもとに。

「こいつで!!」

戟を構え、化け物を迎撃。対抗するように化け物は突撃を仕掛ける。
「はっ!!」

突き穿ち、凪ぐ。嵐のごとき連撃が化け物を押しとどめる。

「AAAAAA」

「ぬ、抜けない!てめえ」

再生中の体に巻き込まれるように戟が絡めとられる。再び戟を手放し切りかかる。

だが、刀崎忠志は知る事になる。化け物は知性があるから化け物なのだ。

「こ、こいつ!!」

振るった蛮刀を掴まれそのまま反対側へ投げつけられる。

「が、ぐっ痛」

吹き飛ばされ壁に激突。ゴキツという骨の折れる乾いた音が響く。

「ZUUUUUUUIIIIIII」

続いて追撃の突撃が迫る。直撃すれば死は間の逃れない。

「なめるな!!」

だが易々と死を受け入れる刀崎忠志ではない。二本のナイフを化け物の目に向かって最適最速のフォームで投擲。すでに加速体制になっている化け物にナイフを避ける術は無くナイフは寸分変わらず命中し怪物の視界を奪った。

「IDAAAAA!？」

突如、視界を奪われ化け物は壁に激突しながら倒れ込む。しかし、一瞬で視界を取り戻し忠志に向かってくるだろう。

だが、その一瞬を見逃すほど彼は、刀崎忠志は、甘くは無かった。駆ける。唯、只管に。チャンスは一度。これを逃せばこちらが獲られる。彼我の距離は五メートルほど充分に間に合う。目的は一つ。眼前の敵の絶殺。首を断ち一撃で勝負を決める。

「これで!!」
凶器が振りあがる。この死闘に決着を付ける為に。
「終わりだ!!」

決着は一瞬だった。振り下ろされた刃は寸分変わらず化け物の頸を刎ねる。

これで終わり。この不死身の化け物もここで死んだ。そう彼が考えたのは仕方のない事だった。

だが、そんな常識が通じないから化け物は化け物なのだ。

もし彼がもっと経験を積んでいたら、もしこの怪物の知識があったなら結果は変わっていただろう。

しかし、そうはならなかった。

「幹也さんは　えっ!?!」

彼がの脳裏に最後に過ぎったのは、自身の胸から飛び出した爪への疑問と自分の安否ではなく黒桐幹也の安否だった。

ここに、彼の常人としての命は終わりを告げる。そして

血が失われていく。体が冷たくなり脳が死んでいくのが分かる。痛みは感じない。意識が薄れていく。
死ぬのか?ここで。

ら困難だ。なんとか立ち上がるが、意識が薄れていく。蛮刀を杖がわりに体を支え前方を見据える。

「ハア、ハアハア。どう、した。化け物。俺はまだ死じゃいねえぞ。かかってこい！早く（ハリー）早く（ハリー）早く（ハリー）早く（ハリー）早く（ハリー）早く（ハリー）早く（ハリー）！！」

口の中で血の味広がる。それでも吼えかかる。化け物は三つに増えた首、六つの目で振り返る。

「AAAAAAAAAAAA？」

視界が少しずつ消えていく。それでも三首の化け物を見据える。

「よし、それでいい。力は貸してやる。あとは勝つのも負けるのもお前次第だ。せいぜい気張れ。ヘナチヨコ」

そんな言葉が聞こえた瞬間、体中に灼熱が荒れ狂う。視界が鮮明になり意識がハッキリする。

「――！！？」

胸に激痛。しかも、あの時とあの日と同じ痛み。だが、それと同時に力を、魔力を感じる。

自分のものではない。しかし魔術回路はそれをすんなりと受け入れ凄まじい勢いで体を治療していく。

そして、再び流れ込む怨嗟の嵐。

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

それがどうした。この程度なれたもんだ／破損欠損部分の修復、完了

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

今なら奴の言っていた褒美の意味もわかる／各部最大強化、完了

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

「DAAAAAAAAAZUUUGEE!!」

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

化け物が迫る。だが、もう恐ろしくない。笑いさえこみ上げてくる
／礼装への呪詛の付加、完了

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

蛮刀の刀身を黒炎が覆い尽くす。体を駆け巡る灼熱の悪意が妙に心地いい。

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね 痛い／死ね

悪意の向きを制御する。呪いを内側から外側へ。極大の呪いをもつて不死身の化け物を押しつぶす。

不条理（不死身）を不条理（悪意）で塗り替える。

はつきりとした視界で敵を見据える。自然と頬が吊り上がる。

今なら殺せる。幾度再生しようが関係ない。あの化け物は死ぬ。造作もなくここで

「DAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

化け物の爪が降り下ろされる。仕留めたはずの獲物を殺すために。驚異が迫る。静かに刃が振り下ろされる。

「!?!」

驚愕はどちらのものだったろうか。先程まで拮抗していた両者の武器の均衡は完全に崩れた。

「IDAAAAAAAAAAAA!?!」

黒炎を纏った刃は化け物の爪とその腕を引き裂き、腕の根元まで達していた。だが、相手は化け物。

今まで通りならこの程度の傷は意味をなさない。今まで通りならだが………

「AAAAA!?!」

傷口から燃え上がる黒い炎。再生中の肉を焼き付くし再生を許さない。呪いの炎は燃え広がり化け物の体にもその牙を剥く。

「は、痛そうだな、化け物。なら、このまま死ね」

再び悪意の刃が振るわれ、肉を引き裂く。今度は胴体に横一線。黒炎が燃え上がる。黒炎は凄まじい速度で侵食していく。

「AAAAAAAAAAZZUUUU!!!」

怒りからか、痛みから逃れるためか叫び声を上げながら襲いかかる

化け物。

「まだ、死なないのか。いいぜ、とことん付き合ってやる」
爪を切り裂き、刃が走る。

「まだまだ、行くぜ!!」

黒炎が走り、三つ首の一つが落ちる。そのまま蹴りつけられ化け物がよろめく。

「ZUUUUUUUIIIIIII!!」

二本の腕と頭を一つ、失ってなお化け物は止まらない。残りの腕を使い苛烈に攻める。

「はああああああ!!」

それよりもなお、壮絶に切りかかる。迫る牙を爪を撃ち落とす。そして

「DDDDDDAAAAAAZUUUU!!」

化け物が振りかぶる。大振りでくる気が。なら、こちらも。

「はああああああ!!」

正眼に構え直し化け物と向かい合う。カウンターで切り倒す。それで今度こそ終わりだ。

「はああああああ!!」

袈裟懸けに振るった蛮刀は縦一閃に切り裂いた。

そのまま、刃を振り抜いていく。返り血が跳ね顔につく。振るわれた肩を爪が掠り出血する。

切りつけた場所から黒炎が吹き上がる。

「IDAAAAAA!？」

不死身を誇った化け物が黒炎に抱かれ消えていく。呪いの炎は化け物さえも容赦なく焼き尽くす。

これで決着だ。もう再生できない。

「AAAAAAAaaaaaa」

唸り声は少しずつ消えていく。それはどことなく安堵したような声に聞こえた。

「ゴフウがつ。ハア、ハア、ハア」
血を吐き出す。無理な再生は体に相当以上の負荷だったらしく吐血が止まらない。手足も無理な強化のせいで動かす度に激痛が走る。せつかく取り戻した。意識も薄れていく。

「まだ、寝るには早いぞ。俺」

無理やりに意識を覚醒させ歩き出す。まだやることが残っている。

「幹也さんはどこだ？式さんは？」

とにかく、情報が足りない。戦いに必死になりすぎて移動しすぎた。ここがどこかも判らない。

歩く、歩く。痛みを堪え必死で歩く。しばらく歩くと開けた場所にてた。ロビーだろうか。

人影が見える。どこかで見たとことがある。俺の知っている人だ。痛む体を押して蛮刀を構え警戒しながら近づくと……

「え？」

目の前の人物を否定する。ありえない。ありえない。だって目の前で

「どうした？刀崎。幽霊でも見たような顔して」

そう言いながら口元に笑いを浮かべる人物は間違いなく死んだはずの我が師、蒼崎橙子だった。

空の境界編 第十二話 覚醒（後書き）

どうも、big bearです。

日付が変わってしまったああああ。すいません。

あと、アルカディアにも投稿始めました。あと、今回から文章力アップのためside表記をなくしています。分かりずらかったらすみません。

では、拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想ございましたらぜひぜひお送りください。

空の境界編 第十三話 再会（前書き）

「どうした？刀崎。幽霊でも見たような顔して」

そう言いながら口元に笑いを浮かべる人物は間違いなく死んだはずの我が師、蒼崎橙子だった。

「!？」

ありえない、幻覚でも見てるか俺は!？だとしたら、何時からだ？確かに橙子さんは死んだ。目の前で生首になっていて、其の上、其の首を潰されたんだ死んで無いと可笑的い。しかし、この目の前の蒼崎橙子は余りにも精巧^{リアル}だった。

「やれやれ、この程度で動揺してはヘナチヨコのままだぞ。それに、フラフラしてるぞ。大丈夫か？」

目の前の幻影は酷くリアルだ。口調や声色までもが何から何まで本物としか思えない。

だが、それは有り得ない。人が生き返るなんてそれこそ魔法だ。

「信じられんといった顔だな。とにかく助かった。女一人の力で黒桐を運ぶのは骨が折れると思っていた所だ」

黒桐だつて？幻影の足をよく見ると倒れている人影が目に入る。頭には包帯が巻かれている。

まさか

「幹也さんをどうした!この偽者!！」

「偽者つておまえ。私は真正正銘、蒼崎橙子だ。と言ってもオリジナルかどうかは知らんがな。それと黒桐は気絶しているだけだ。心配ない」

確かに幹也さんの胸の辺りを見ると上下している。だが、オリジナル?どういうことだ??訳が分からん。唯でさえ痛みと疲労で動かない頭がさらに混乱してきた。

「混乱してるな。しかし、此处で考え込まれるのも困る。話は後だ。今は」

途端、背筋にまるで心臓を鷲掴みにされたような悪寒を感じる。見られている。

”やはり、アルバは敗れたか。だが、人形の置き土産まで殺されるとはな”

姿は見えず声だけが響き渡る。この聞いてるだけで威圧されるような声は、この異界の主のものだ。

「何処だ！何処に居やがる！」

痛む体を押しして周囲を警戒する。どこから来るか予想できない。先程までならともかく、今の俺では一捻りされるだけだ。とにかく先の力、あれを出さないとどうしようもない。このままじゃ無残に殺されるだけだ。

「慌てるな。やつに私たちに構っている暇は無いはずだ」

橙子さんに制止される。状況から見て罠の可能性は低い。今の俺を始末するのに罠は必要無いからだ。

だが、本当に橙子さんだという確信が無い。

「どういうことですか？」

疑いつつ恐る恐る尋ねる。少しでもボコを出せば、今の俺でも抵抗くらいはできるはずだ。

「なんだ、信じる気になったのか。まあ、すこし話を聞いている」

”もう一つ蒼崎橙子がいたとはな。私が貫いた心臓は紛れなく本物だった。貴様は作り物か”

「アルバといいおまえといい、くだらない事にこだわるな。そんな事はどうでも良いだろう。初めに生まれたもの、その次に生まれたもの。ようはそれだけだ。一か二かの違いを何時までも問題にするな」

”なるほど。其の減らず口、確かにお前は本物か。ならば

もう一度この私と争うか”

状況に頭が付いていかない。たしかに橙子さんは殺された。他ならぬ殺した本人がそうだと知っている。

だが、其の本人が今、ここに居る橙子さんが本物だと認めている、おまけにあちらは完全にやる気だ。どういう状況だよ、これ。しかし、分かっている事が一つだけある。

橙子さんは味方で、奴は敵。それだけだが、俺には充分だ。

「やんない。このマンシヨンの中では私に勝ち目は無いからな」

そういうと彼女は視線を外し幹也さんの治療を進める。近くに移動して警戒する。せめて弾除けくらいにはならないと。

「よいのか。匣そこに潜む魔物なら、お前の弟子の体の中身なら、あるいは私を打倒しうるかも知れんぞ”

「お断りだ。こいつは底なしでね。下手に放てばマンシヨンそのものを消しかねない。私は協会に追われる様なマネはしないよ。それに、こいつ中身はもつとんでもない代物だ。制御できもしないのにそんなモノを迂闊に解き放てば本末転倒、それこそ抑止力が表れる。それに私は私が殺された時点ではこの件については敗北している」
橙子さんは答えはするものの視線は完全にはずれ、警戒はしていない。だが、俺の中の物は、薄々は気付いていたとはいえ、そこまでの物なのか。だが、とにかく俺はこいつに聞かねばならない事がある。

「おい、一つ聞かせろ。あんたは人形といった。それは”一つにして七つの人形たち”(ワンオブセブンドールズ)の事で間違いないな?」

”相違ない”

「居場所を知ってるか?」

やはり、そうだった。喜びで頬が釣り上がる。

”知らぬ。あの怪物もあれらが勝手に置いて行ったものだ。もとより私にはやつらの助勢など必要ない”

「本当に?」

本当に知らないのは分かっている、此処でやつに嘘をつく理由もメリットもない。落胆してないと言えは嘘になる。

沸騰していた頭が急速に冷えていく。そこでもう一つ疑問が沸いて

くる。

式さんはどうなった？

「荒耶。私からも一つ質問がある。このマンションの本来の目的は大極を取り込むための、大極の具現だったな」

” いかにも。両儀式を完全に外界から隔離するために、私はこの異界を作り上げた。ほかの様々な機能は付属に過ぎぬ”

魔術師の答えに、橙子さんは力なく笑う。何が可笑しいのだろうか？今の状況は限りなく不味い。式さんはそうとう嚴重に守られている筈だ。

なら、俺の囫も、この作戦、自体が最初から無駄だったって事になる。式さんを助け出せない。

あの、青年も、臙条巴も無事ではないだろう。

” 何か？”

橙子さんの笑い声に魔術師は声を荒げる。橙子さんはもう我慢出来ないとはかりに大笑いを始める。

「そうか、この建物は一つの魔法だったな！式を捕らえ、その後に協会にも私にも、そして世界にも気付かれないようにする為の閉じた世界、つまり檻だ。式をお前のような目的で殺そうとすれば当然抑止が動く。式を幽閉している事を隠すためにこの異界は作られた。だが皮肉だな。荒耶、お前は最後にとんでもない間違いを犯したぞ」

答えはない。橙子さんの真意を掴みかねているらしい。斯く言う俺もそうだ。橙子さんが何を言いたいかさっぱり理解できない。聞いた限りではやつの計画はかなり順調に進んでいる。抑止は動かず残る障害は、俺と橙子さんだけだ。内一人は体もろくに動かないポンコツだ。

俺には、橙子さんの言う奴の間違いが解らない。

” 間違いなど、ない”

断言する其の声には迷いがあった。橙子さんは笑いを噛み殺しながら

ら、その迷いに答える。

「ああ、お前に間違いはない。魔術師のおまえにとって最高の解答だ。だが、その前提自体が間違っているとしたら？空間遮断という魔法の域の結界。お前にしかできない神業だ。閉じられた輪×ピラミッド・リングという密閉空間に閉じ込められたものは、中からは決して出られない。物理的な手段では脱出不可能な檻だ。それに式を叩き込んだお前はそれで安心しきってしまった。確かにそれは完璧だ。

けど、そんなモノはあれには通用しない。我々魔術師は常識に対して脅威となるが
式は非常識に対する死神なのだ、お前は体験しているのにな！」

瞬間、姿なき魔術師に動揺が走った。

「式を閉じ込めるのならコンクリート詰めにもすれば良いんだ。荒耶宋連。お前は魔術師であるが故に、魔術を絶対のものとしてしまった。空間を閉じようが意味はない。そんな曖昧なものあればたやすく食い破ってくるぞ！」

顔を背けていた橙子さんが振り返る。其の瞬間、今まで感じていた奴の気配が消え去る。

「橙子さん。今のどういうことですか！？式さんは？」

何かあったらしいが、状況が理解できない。

「とりあえず、式が脱出した。ここでは巻き込まれるかもしれないから外に出るぞ」

「脱出って、どうやって？」

空間遮断なんて物から脱出する方法なんて俺には見当も付かない。

ましてや、幾ら強くても式さんは魔術師ではないのに、どうやって？

「そういえば、お前は知らないんだったな。直死の魔眼。式は、モ

「ノの死を視る事ができるんだ」

モノの、死？ ニュアンスは掴めるが意味はよく分からない。

「万物には全て綻びがある。完璧な物質などないからみんな壊されて一から作り直されたいという願望がある。式は靈的視力が強すぎてそれが見えてなおかつ理解できている。ゆえに空間遮断も式の前には意味をなさない。例え、お前の仇でも殺しきってしまふ筈だ」

直死の魔眼、どんな物でも殺せる魔眼。まるで神話の中の話みたいな能力だ。頭の中の知識にも該当するものはない。

そんなものが存在するのか……

「細かい説明は後でしてやる。ここでは落ち着かん。外に出よう」

「え、ああ、はい」

橙子さんの声に意識を引き戻される。考え込むのは後にしよう、今は橙子さんの言う通り外に出るべきだ。

ゴオオオオと轟音が鳴り響き、異界が崩れていく。其の音は既に外部に出ていた、刀崎忠志と蒼崎橙子の元にも響いていた。

「……これは!？」

驚愕の声を漏らすのは刀崎忠志だ。立つ事すらもままならないのか地面に膝を付いている。

「荒耶め、無茶をする。大方、式ごとマンションを押しつぶそうとでもしたのだろうよ」

蒼崎橙子はしゃがみ込み、地面に横たえられた黒桐幹也の容態を確

かめながら答える。

「じゃあ、式さんは!？」

「分かん。巻き込まれた可能性は薄いと

!？」

ドスンと落下音があたりに響いた。マンションが崩れ落ちる轟音ではなくゆっくりと人が落ちて着ような低い音。

「私が見てこよう」

「俺も一緒に　痛っ！」

無理に立ち上がろうとしたせいか激痛に顔を歪める。無理な強化はかなりの負担を強いてたらしく、もはや指一本を動かすだけで激痛が体に走る。

「じつとしている。其の体では足手まといにしかならん」

そう言い放つと、橙子は茂みのほうへ向かい歩き始める。明かりはなく、木々が月明かりさえも遮られているので酷く暗い。視界は殆どないというのに彼女は迷わず進んでいく。

彼女の姿が見えなくなった辺りで音が響いた。

パチパチという軽い音。この場には似つかわしくない拍手の音が響く。

「!？」

姿は見えず音だけが響き渡る。

そして　　吹き荒れる魔力の嵐。

それは、たった一人にだけ向けられたメッセージ。

再会を告げる、鐘の音。

何処かで歯車の噛み合う音が鳴り響いた。

走る。体の痛みなど関係ない。唯、走る。痛む全身を無理やり強化し痛覚を麻痺させる。

「何処だ！？何処に！」

魔力を辿り走る。あの魔力は、あの感覚は、あの時と同じ。

「此処にいる！この近くに！！」

あいつが、仇が、此処にいる。この先に！！

「ハア、ハアハアハア、く、そ」

息が上がる。足がもつれ上手く走れない。体にガタが来ている。骨が、筋肉が悲鳴を上げる。

「あと、少しだ。あと少しでいい、もってくれよ。此処にいるんだ」
急に、開けた場所に出る。その場所だけをスポットライトのような月光が照らしている。

まるで、主役の登場を待つ舞台の壇上。

その中央にそれは居た。

あの時と同じ、長く美しい黒髪。

あの時と同じ、物語の魔法使いのようなローブ。

あの時と同じ、其の顔。

あの時と同じ、美しく晴れやかな笑顔。

見つけた。見つけた、見つけた、ミツケタ、ミツケタ、ミツケタ、
ミツケタ、ミツケタ！！

「お久しぶりい。ご機嫌はいかがかしらあ、復讐者さん」

「見いいいつけたアアアアアアアア！！」

抑え切れない慟哭が、怒りが、憎しみが溢れ出す。

「殺してやる！！！」

「来なさい。ご褒美に遊んであげるわあ」

ここに、再び両者は合間みえた。

空の境界編 第十三話 再会（後書き）

どうも、big bearです。

遅くなって本当にすいません。おまけに今週は一回しか更新できません。

重ね重ねすいません。あげく話も進まない。ほんとうに情けないです。

では、こんなだめ作者と拙い文章ですがこれからもよろしくお願ひします。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひお送りください。

空の境界編 第十四話 敗北（前書き）

「殺してやる！！」

「来なさい。」「褒美に遊んであげるわぁ」

「……、再び両者は合間みえた。」

空の境界編 第十四話 敗北

振るわれた刃は、肉を抉り、血を撒き散らし、命を脅かす。人間が相手なら、幾度命を奪ったか知れない斬撃。

しかし、死徒の前では、人形たちの前では無意味だ。

「どうしたのかしらあ？それじゃあ私は殺せないわ。そんなモノで殺せるのはせいぜい人間だけよ。もしかして、ダンスがお望みかしらあ？」

何度切り裂いても、人形は笑い続ける。刃が心臓を抉り、腕を切り落とそうとも彼女の笑顔は崩れない。

「このお、死ねえ！！」

再び、殺意が振り下ろされる。刃は人形を肩から袈裟懸けに切り裂き血が溢れだす。

「あははははははは、楽しいわあ。本当に、本当に楽しい。さあ、もつと、もつと私と踊りましょう」

「死ね、死ね、死ね、死ねえ！！」

確かに、振るわれた刃は肉を切り裂き、命を脅かす。しかし、斬りつけ、致命傷を与えても傷は一瞬で復元されている。さらに、痛めつけられるほど彼女の狂喜は燃え上がる。

「ふふふ、なんて楽しいのかしら。でも、ダメよあ。まだダメ。まだダメ。そんなものじゃあ私は殺せない。もつと私を楽しませて頂戴」

吹き荒れる暴力の風に乗って人形は狂乱のステップを踏み続ける。その顔に狂った笑みを浮かべながら。

「でも、一人で踊っていても楽しめないわあ。やはり、ダンスには

パートナーが要るわ。ほら、あなたもステップを踏みなさい」

其の言葉の後に続き人形の足元の影が蠢き出す。影はその形を鋭利に変え黒い牙となって忠志に襲い掛かる。

「くっ!!」

距離をとる事で黒い牙を回避し、再び接近しようとする忠志。だが、それを阻む黒い嵐。

四方八方から迫り来る黒い牙は、密度を増し暴風雨となって襲い来る。

「ガッ!？」

防ぎ切れないほど高密度になった黒い牙は忠志の四肢の肉を削り取る。傷口は獣に噛まれた様に抉れ、血がとめどなく流れ出す。それでも進もうとする忠志。

執念が、憎悪が体をつき動かす。しかし、連戦により傷を負い、其の回復による体力の消費で既に体は限界を超えている。

「あらあら、一撃で倒れるなんて、つまらないわ。そんなんじゃないわ。一流にはほど遠いわよ。ほら、お立ちなさいなあ」

瞬間、影は再び其の形を変化させる。今度は刃ではなく手のような形に変化し忠志を抱え上げ無理やりに立ち上がらせた。そのまま、引きずるようにして自身のほうへ引き寄せていく。

手元に引き寄せた忠志の首に人形は指をかけ、恍惚とした表情のまま囁き始めた。

「ねえ、もう終わり?これで終わりなの?この程度で?.....あら」

ソブリと言う音と胸の辺りに違和感を感じ彼女は自分の胸の辺りを見詰める。滴り落ちる血と柄の近くまで突き刺さった蛮刀を見つけ、彼女はその狂笑をさらに深くした。

「ふふ、あはははは、良いわあ。その調子、その調子。さあ、次は何をしてくれるのかしらあ?」

「.....」

失血と痛みで既に気を失っている忠志からの返事は一切ない。

「あれえ、気絶したのかしら？じゃあダンスは終わりい。そうね、少しお話でもしましょう」

途端に影は針のような形に変形し忠志の全身に突き刺さる。

「ぐああああああああああああああああああ」

針の先端から高密度の魔力が流れ込む。流し込まれた魔力は回路を通じて全身を駆け巡り、激痛を与え忠志の意識を強制的に覚醒させる。

「そうね、まずは名前を聞かせて頂戴。何事もそれからよ」

「ころ・・・して・・・や・・・る」

忠志は視線は定まらず、痛みによって意識は混濁しうわ言の様に殺す、殺すと繰り返し返すだけでまともな会話など望むべくもない。

「このままじゃあ会話にならないわね。まあいいわ、あなたの記憶に聞くから」

そう言うのと人形は再び忠志の顔に指を添え顔を上げさせ、その目を覗き込みそのまま顔を近づける。

そして、唇を合せキスをした。

落ちていく。

記憶の海を下から上に落ちていく。

流出すると同時に凄まじいスピードで記憶が再生される。

幼稚園の卒園式と小学校入学式。

家族や友人たちとの思い出。

妹や弟が生まれた日のこと。

だれかの葬式や誕生日。

以前、橙子さんに記憶を見せた時とは違い無差別に流れ出す記憶の奔流。

記憶の奔流は少しずつ現在へと近づいていく。

高校での日々、勉強や部活動。

そこまで、昔の思い出というわけではないのにとっても懐かしく感じられた。

あの日から思い出さないようにしていたせいかもしれない。

「忠志、今度の祝日に例の雑貨ビルに行って見ましよう」
ああ、そうだ、この日が全ての分かれ目だった。この時、止めておけばあんな事には……………

炎が見える。轟々と燃える黒い炎が。

もう、この日なのか。

未だ記憶の中で決して薄れる事ないもの。今だ俺の体中で燃え続ける黒い炎。

そして、

「ねえ、貴方の名前はなあに？」

「
！！」

憎悪をトリガーに、魔術回路を再起動させる。

こんなところで感傷に浸っている場合じゃない。限界？傷？それがどうしたって言うんだ。

その程度で止まるほど俺の決意は、覚悟は軽かったのか？お前の憎しみはその程度なのか？

違う。断じて違う。

そうだ。こいつを殺せるならその先のことなど、どうでもいい。

腕が千切れようが、足が千切れようが、二度と魔術を使えなくなっても、たとえ死んでもかまわない。

力が要る。あの化け物を殺したときと、いや、もつと大きな力があるじゃあないか、力なら。少し抑えを外すだけでいい。それだけで力なら沸いて来る。

だが、それでは制御しきれず自滅するだけだ。だが、それでもかわない。

自分の奥にあるものに働きかける。

少しずつ抑えを外していく。その瞬間、炎と共に悪意の渦が溢れた。

「
内側から体を焼かれる感覚に声にならない悲鳴上げる。
それを制御していく。侵入してきた奴の魔力を焼き払い、あの時と同じく中からと外へと向きを変える。」

イメージは焰の鎧。全身に炎を纏わり付かせていく。焼き尽くすのは自身ではなく眼前の仇。

「へえ、もうそこまで使いこなすなんてねえ。予想外だわあ。でも、まだまだ足りないわあ」

「!?!」

炎が消える。消して消える事などないと思われた黒い炎が突然、消え失せた。

「誰がこれをあなたに与えたと思っているのかしらあ？ 契約の主導権は私にあるのよお。完全に制御できてない今のあなたじゃあ私を焼き尽くす事はできない。それに」

外側に向けていたはずの悪意の炎の奔流が逆流してくる。仇を焼くはずだった黒炎はその猛威を俺へと変えて燃え上がる。

「こんな事もできるのよお」

「ぐあああああああああああああ！」

奥の手も通用しない。あれの解放は俺にとっての最高の切り札だ。
これが通用しない言う事は今の俺じゃあこいつは殺せない。思いつ

ジョーカー

がっていたわけではないがあの力を使えば少しくらいは対抗できると考えていたのに使う事さえできない。此処のままじゃ殺される。一矢報いる事もできずに死ぬのか
くそつたれ。何か手はないか？何か手は……

「あら、これでお終いかしら。そうね、持ち帰ってお人形にして遊ぶのもいいかしら。それとも、生かしておいてもっと踊ってもらうのも良いわねえ。ふふふ、どっちにしても楽しめそうね」

もはや指一本すらも動かない。このままじゃされるがまま、生かすのも殺すのも相手の意のまま。

どうにかして逃れないといけないのに体はびくともしない。

「無駄、無駄。無駄なのよ。もう、動けないのよ、あなたは。私の作った私の使い魔おとこを殺した程度じゃあだめなのよ。所詮、あれは死体から作った即席の張りぼてなのだから」

あれが即席の張りぼて！？あの再生能力で？

すると奴はその顔に浮かべていた狂笑をさらに深くした。

「意外そうね。その分だと、何を材料にあれを作ったのかも気付いてないみたいね。なら、いい事を教えてあげましょう。あれはね、あなたと始めて合ったあの場所の死体を私がつなぎ合わせた物。

もしかしたら、あなたの大事な、大事な家族もあれの中に居たかもしれないわねえ」

は？どういうことだ？こいつは何をイッテルンダ？訳が分からない。「いい顔ね。その信じられないって顔、ぞくぞくしちゃうわ。でも本当よ。その証拠に叫んでたでしょ。『あついでー、助けてー、痛いよー』って」

叫び？そうだ、俺は確かにあの化け物の叫び声を悲鳴のようだと感じたし、あの化け物の黒く焦げような部分。

そうだ、確かにあれは

「そうよ。その通り。どう？自分の家族を、自分の手でしかも、同

じ殺し方で殺した気分は」

あの化け物がみんな！？俺が自分でみんなを殺した！？そんな、嘘だ。嘘に決まっている。

でも、否定できない。嘘だと断定できない。俺は自分の手で、自分のを。

「はははははははは、その顔よ、その顔。その憎悪と悲痛さに歪んだ顔が見たかったのよ。次はどうしようかしら。そうだ！あなたの師匠の人形師さん。彼女を殺したらもつとあなたのそんな顔が見える筈ねえ」

人形師？橙子さんのことか！！こいつ。まさか、橙子さんを。

「ためえ、橙子さんに手を出すつもりか！そんな事俺がさせるとでも。痛ッ！！」

体が動かない。出血が多すぎて意識が薄れていく。頭が回らない。

こいつを止められない、こいつを殺せない。また、奪われる。

「そんな体で何ができるのかしら。見物だわあ。そうね、一人だけじゃあつまらないし、どうせなら皆殺しにしたほうが楽し

」

今まで狂笑だけを浮かべていた奴の顔が驚愕に染まる。横合いから、半透明の手のようなものが俺を掴んでいる奴の腕と影を掴み、そのまま無造作に引き千切ったのだ。腕の伸びてきた方から咀嚼音が聞こえてくる。

「！？」

突然、体の支えを失い地面に倒れこむ俺。

「へえ、中々楽しめそうねえ」

さらに、迫る半透明の腕を奴は足元の影を持って迎撃する。引き千切れた腕は既に復元されており奴の顔には再び狂笑が浮かんでいる。

「余り人の弟子にちよつかいをかけてもらっては困るな。人形」

こゝの声は！？声のしたほうへ視線を向けるとやはり、そこには橙子さんが居た。手には大きな革系の旅行鞆を持ち、口元にはタバコをくわえている。鞆は遠めに見ても禍々しいほどの魔力を放ってい

る。さっきのはあの鞆からの攻撃なのだろうか。

「橙、子さん？」

「もうこれ以上喋るな。死ぬぞ。後は私が何とかするから、少し寝ている」

「あはははははははは、はははははははははは、自ら出てきて探す手間を省いてくれるなんて、ありがとう。人形師さん。これで望みが一気に実現できるわ。今日はなんて良い日なんでしょう」

気分は最高だとばかりに大笑いを始め、わざとらしく礼をする狂った人形。

「そのにやけ面をきれいに吹き飛ばしてやりたいが、それ所ではないのでね。生憎、何処かの誰かさんのせいでバカ弟子が死に掛けていているからな。ここは逃げさせてもらう」

人形を前にしてもタバコを吹かし余裕の表情の橙子さん。でも、逃げるって言ったってどうやって？

「あらあら、逃げ切れるつもりかしら。なんて哀れなの、恐怖の余り錯乱したのかしら？」

「錯乱してなど居ないさ。貴様は陰湿だからな。この場では殺さず、家畜のように肥え肥らせて、希望を持たせた後、後一步と言うところで殺すのが貴様らのやり口だ。違うと言うならこいつをお前にけしかけてその隙に逃げさせてもらうさ」

そういうと橙子さんは足元に置いた鞆をとんとんと指差す。奴は橙子さんの言葉に大げさに驚いた様な顔をすると途端に笑い出す。

「ふふ、その通りい。でも、ばれてしまうなんてあなた、私のことを良く知ってるみたいねえ。どこかでお会いたした事が有ったかしら？」

じゃあ、こいつは始めから俺を挑発するだけのために？こいつ、何処まで人を馬鹿にしてやがる！？

「まあ、いいわ。ばれたなら仕方がないわあ。今回はここまで。お開きとしましょう」

「ま、て」

自然と事がこぼれた。今の俺には何もできないそれでもここでもみず逃がす事はできない。

「ダメよ。ダメ。今のあなたを殺しても面白くないわあ。羽虫を殺して楽しむ狩り人なんて居ない。狩りをするならあなたがもっと強くなってからね。だから、次に遭うときまでにはせいぜい気張って強くなって私を楽しませて頂戴」

足元の影が盛り上がり、奴の体を覆いつくす。放たれる魔力は凄まじく何らかの大魔術の使用を感じさせる。

「さようなら。また会うときを楽しみにしてるわあ。刀崎忠志」

突然、魔力の波動が収り、やつは跡形もなく消え去っていた。

「擬似的な空間転移とはな。さすがは死徒二十七祖の一角と言ったところか」

負けた。完膚なきまでに、言い訳できないほどに。相手にすらされていないかった。遊ばれていただけ。その意図も分からない。

「橙子さん。奴は一体、何を・・・」

吐き気がこみ上げてくる。口の中では血の味が広がり全身は悲鳴を上げ、体のいたるところから出血している。

「おい、確りしろ！今治療してやるから動くな。まったく一体何を

橙子さんの声が遠くなっていく。既に目は見えず、意識を黒点が染めてゆく。

「痛い、熱い、助けて」

落ちていく意識の中で悲鳴が何度も反響していた。

空の境界編 第十四話 敗北（後書き）

どうも、big bearです。

先週更新できなかつた上遅くなつて本当にすいません。

おまけにだらだら長いだけで話が進まない。重ね重ねすいません。

こんなため作者と拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひひ

お送りください。

空の境界編 第十五話 再動（前書き）

「おい、確りしろ！今治療してやるから動くな。まったく一体何を

」

橙子さんの声が遠くなっていく。既に目は見えず、意識を黒点が染めてゆく。

「痛い、熱い、助けて」

落ちていく意識の中で悲鳴が何度も反響していた

空の境界編 第十五話 再動

何かが焼ける臭いが酷く鼻に付く。瓦礫の崩れる音が聞こえる。

ああ、また此処か。あの日か。

瓦礫と炎を書き分けながら迫る影。

叫び声が遠くから聞こえる。

正面から迫る化け物を正面から切り伏せ、横合いから来た化け物を蹴り飛ばす。

何度、同じ姿の物を殺したかも分からない。

「助けて、タスケテ」

そう叫ぶ化け物を壺刀で切り裂き仕留める。 / が崩れ落ちていく。

「熱い、熱い、アツイイ」

呻き声を上げる化け物を戟で突き殺す。 / が潰れていく。

「痛い、痛い、イタイヨオ」

ナイフを突き刺し首を落とす。 / の首が地面に転がる。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、イヤダ、イヤダ。

殺したくない。もう嫌だ、自分の手で を殺すのは。

一つ切り殺すたびに、一筋心に罅が入る。耐えられない。壊れていく。

「助けてよお、熱いよお、痛いよお」

正面から再び接敵。泣き声を上げる心に反して脳と体は冷静に行動を起こす。

慈悲も容赦も無くただ機械的に振り下ろされる刃は寸分の違いなく

標的に死を叩きつける。

途端、足元が崩れた。足元の地面を失い何も無い闇の中へ落ちていく。

ここまで来てようやく夢だと理解する。あの化け物はこれだけで死にはしない。俺はこれほど強くない。

何かもおかしく、歪んだこの世界の中で一つだけが、悲鳴だけがとてもリアルだった。

突然、目が覚めた。

目を開けて最初に飛び込んできたのは、見慣れた無機質な天井だった。

首を横にすると使い慣れてきた衣装棚が見える。おそらく、伽藍の堂の俺の部屋だろう。

「痛ッ」

身体を起こそうとするが全身に激痛が走り半身を起こすことさえできない。首を起こし身体を見ると隙間無く包帯が何重にもきつく巻いてある。

何とか身体を動かそうと一人で奮闘しているとキィと木製のドアがゆっくりと開く音がした。

「何だ、起きたのか。後二日は目覚めないと思っていたんだが。まあ、いいさ」

橙子さんは髪を下ろし何時ものスーツ姿ではなくセーターを着ている。何時もの姿も様になっているがこういう姿の橙子さんもとても様になっている。

「橙子さん、あの後、俺は？それにどの位俺は寝てたんですか？」
奴が消えてからの記憶が無い。たぶん、気絶でもしたのだろうが確認しないといけない。

「あの後、直ぐにお前は気絶。私一人ではお前たちを運びきれなかったからお前と式を応急手当した後、

黒桐を叩き起こしてお前と式を此処まで運んだのが四日前。お前はまるまる四日ほど寝ていたわけだ」

式さんも重傷なのか！？

「式さんは大丈夫なんですか？」

「ぴんぴんしているよ。怪我の具合で言うならお前のほうが重傷だ。内臓は傷つけないようにに痛めつけられていたが、出血と疲労、魔術回路の磨耗が酷過ぎた。最前は尽くしたが後遺症が残る可能性もある・・・こればかりは後になって見らんと分からんからな。どうだ、動けるか？」

後遺症か。あれだけ無茶すれば文句なしの健康体って訳には行かないはずだ。

とりあえず、痛覚含め感覚は無事のように。試しに指を動かしてみると痛い動く。足も動くし、体に問題はないみたいだ。だが・・・

「・・・体は多分、問題ないと思います。魔術回路は動かしてみないと分かりませんが」

「それは体力が回復してからだな。今はやめておいたほうがいい。それにしても、いずれは接触してくるとは踏んでいたがここまで早いとはな。さすがに予想外だった」

言われればそうだ。あの時は考えもしなかったが、あの場面での人形の登場は唐突と言えば唐突だ。

何か目的が有ったはず。だとしたらそれは何だ？俺には見当もつかない。

「橙子さん、奴は一体何が目的だったんですか？」

「ふむ、憶測だが奴の口ぶりからして・・・お前が目的だろ

うな」

は？俺が、目的？

「映画監督にでもなったつもりなんだろうよ。さしずめ、お前が主役で自分が敵役。結末はバットエンドと言ったところだろうな」

そんな、理由で！？

「奴にとってそれが楽しいならどんなことでもやる。奴にはそれしかないからな。それ以外はしないし、できない。理屈などない。お前をいたぶるのも、力を与えたのも奴にとってはそれが愉快だからだろ。わなら、私は主人公の師匠役だな。こういう役は途中退場が定番だ。全く持って笑えない」

橙子さんはそう言つとやれやれと言いながらため息をつく。言われみればその通りだ。笑えない。

「じゃあ、俺を狙つてまた襲撃してくる可能性もあるってことですよね？」

「正確には、俺たちだ。私を殺せばいい演出になると思つてるはずだからな」

確かに奴は橙子さんを殺すと言つていた。それに奴は皆殺しだといつていた。式さんや幹也さん、俺に閉つた人間を殺して回る気だろう。なら

「橙子さん。身体が治つたら俺

「出て行くとも言つつもりだろう。弟子の事くらい分かる。それは許さん」

「でも」

「狙われるのはどちらにしても変わらない。それに半端者の弟子を死ぬと分かつてるのに放り出すのは

私のプライドが許さん」

「だけど、俺が居なくなれば襲われる可能性は低くなる筈です」

「どちらにしても同じだ。どうしても出て行くと言つならなら条件を出すぞ」

「条件ですか？」

「そつだ、お前が魔術師として一人前と認められるまでは、お前は私の弟子だぞ。れまでは勝手な事は許さんぞ」

「ですが」

「ですがも、へったくれも無い。これでこの話は終わりだ。とにかく今はゆっくり眠って身体を治せ」

「……はい」

橙子さんの言葉には有無を言わせぬ迫力があつた。それに橙子さんの言つとおり身体を直すのが先決だ。

その前に、

「もう少し寝ている、いいな？」

「橙子さん」

「何だ？」

「人間を、死体を使って化け物を作るのは可能ですか？」

これだけは知つておかなければならない。答えは知つている。誰よりも俺が理解している事だろう。それでも聞かすにはいられなかつた。

「可能だ。ネクロマンシー死霊術は古来から存在する。キョンシーやブードゥー教のゾンビのようにな。複数の死体を使って不死身の怪物を作るのは不可能ではないだろう」

「そつ……ですか」

この感情はなんだろう？ 落胆？ 悲しみ？ 怒り？ 自分でもよく理解できない。自分の事すらもよく分からない。

仇に乗せられ自分の　を切り刻んだ。

なんて無様な。なんて情けない。

「事情はよく分からんが何が有つたかはおおよそ理解できた。そううじうじするな。自分を責めるはわかるがな。お前はそんな化け物にされたとしてもまだ、生き残りたいのか？ ましてや、自分の肉親を殺してだ」

確かに、俺もそうなるくらいなら死を選ぶ。だが、それはあくまでも「それに、お前の家族だと決まつたわけでもなければそつしなけれ

ばいけなくしたのは奴らだ。うじうじ悩む暇があるなら鍛錬のひとつでもしろ。私ならそうする」

橙子さんは俺を励ましてくれているのだろう。でも、橙子さんの言うとおりだ。

後悔は後で幾らでもできる。涙なんてとうに流した。お前は何を誓った？

復讐だろう。

なら、立ち止まっではいけない。

こんな簡単な事も人から言われなければ気付かない、なんて俺は何処までマヌケなんだ。

「橙子さん。ありがとうございます。おかげで目が覚めました」

この人が居なかったら俺は今頃どこかでのたれ死んでる。本当に返しきれない恩だ。

「これ以上、うじうじ悩むなら此処から放り出していたところだ」

「これからよろしくお願いします。橙子さん」

「ああ、よろしく」

―伽藍の堂・事務所―

「空間転移の対策？」

「はい、せつかく追い詰めてもあれで逃げられたらどうしようもないですから何か対策が無いかと思って」

あれから二、三日休んでとりあえず動ける程度までは回復した俺は、橙子さんにあのときに起きた事の詳細を話して、質問と意見交換をかねた時間と言ったところだろうか。当然、俺にたいした意見なんて出せるはずも無く橙子さんの質問に答え逆に俺から質問すると言う形になっている。

「少し勘違いしている部分があるな。例え死徒二十七祖でもおいそれとできる物ではないぞ。矢すら恥じ真の特性を生かして空間転移を行っている」

奴らの特性？たしか、奴らは元々一人の魔術師で研究の結果自分の魂を七つに分けてそれを人形に保存していった結果が奴ら、”一つにして七つの人形たち（ワンオブセブンドールズ）”だ。と言う話だ。

「そうだ。奴らは七つに細分化されて入るが魂としての名前は元となった魔術師の物だ。仮にやつらを一体倒したとしてもほかの六体が生きていれば元の魔術師が死んでいるのに生きているという矛盾が生まれてしまう。世界は矛盾を許さない。当然それを修正しようとする力が働く。それを利用する事荷によって奴らは体を復元している。だから、通常の死徒の復元呪詛よりも強力かつ高速の復元能力を持つ。それが奴らの死徒としての強みだ」

世界の修正を利用した復元能力……
これで俺が見た奴の驚異的な速度での再生、いや復元についても納得がいった。でも、

「でも、それが空間転移と関係があるんですか？」

「原因そのものといってもいい。奴らは常に修正を受けているからな。同じ存在が七ヶ所同時に存在するというのは世界にとっては受け入れられない矛盾だ。七つに分かれた物が一つに戻るうとする力を利用して奴らは限定的な空間転移を可能としている」

限定的？七ヶ所？つまりどうということだ？

「まだわからんのか？奴らが転移できるのは七ヶ所、つまりほかの自分が存在している場所にしか転移できない。それでも充分脅威だがね」

何だよそれ？反則だろ。それじゃあ殺す方法なんて
まてよ、なら

「じゃあ別々にではなく纏めて殺せば殺せる可能性があるって事で
すよね？」

「理論上は可能だが、それがどれだけ不可能に近いかは実際戦った
お前が一番理解しているはずだと思うが」

「確かにそうですね……」

でも、不可能ではないのだ。それだけ分かっただけで充分だ。例え、
その可能性が不思議の彼方でも

一片でもそこに可能性があるならそれだけで俺には充分すぎる。

だが、一つ気になることがある。

「でも、橙子さん。そんな情報何処で知ったんですか？」

「倫敦だよ。留学していたところに、書庫にある手記を見つけてね。
それが奴らの元になった魔術師の物だったと言うわけさ。肝心の研
究内容は暗号化されていたがそれでも得るものは多かつたよ」

倫敦。そこに奴らの手掛かりがあるかもしれない。当分の目的は決
まった。

「橙子さん。俺、」

「倫敦に行きたいというつもりだろうが今のお前では無理だ。時計
塔に入るにはある程度魔術としての実力が無ければならないからな
とにかく、お前がすべき事は鍛錬あるのみと言う事だ」

「はい」

まずは実力を付けない事にはどうしようもない。

この前みたいにされるがままなんてのは二度とごめんだ。

痛みが走る。

回路の起動と同時に全身に鈍い痛みが走る。
回路がきしみ、身体が悲鳴を上げる。

まだ治りきっていない身体に魔力という異物は予想以上に害だったらしい。

「顔色が悪いな。まだ、無理だったか」
とにかく、回路を動かせないとどうにもならない。多少の無茶は承知の上。

「いえ、まだやれます。やらせてください」
神経を集中し魔力を制御していく。より正確に、より柔軟に回路を束ねる。

少しずつ少しずつ鎮静化させて定着させ、痛みと魔力を鎮める。

「はあ、はあ、はあ」
息が上がる。魔術回路を起動したこのざまか。先が思いやられるぜ。全く

「ふむ、回路に異常は見られないが、身体が治りきっていないのが原因のようだな。今日はまだ無理そうだな」

「大丈夫です。一度はできたんだから制御するくらい何とかかなります」

橙子さんは止めているがこいつを使いこなせない事にはこの先どうにもならない。

一か八か覚悟を決めて……

「
」
開け放つ扉の範囲は狭く、あくまでもこちらが主導権を握り制御する。

肝心なのはこちらの精神力。流れで来る悪意の奔流の中で自我を保ちきれぬかが問題だ。

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

瞬間、溢れる悪意。魂を焼かれるような感覚と激痛に背筋が凍りつく。

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

歯を食いしばり耐え、少しずつ悪意を内側から外側へと向けていく。

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

あのをきを思い出せ。あの時できて今できないなんてどおりはない。集中しろ。こんな物、雑音に過ぎない。俺が主導権を握っていれば

俺には害は無い。

準備はできた。あとは呪文^キを唱えるだけ。
それも既に決まっている。

「^{リバース}
反転」

その刹那、黒炎が誕生した。

空の境界編 第十六話 黒炎（前書き）

準備はできた。あとは呪文^キを唱えるだけ。
それも既に決まっている。

「^{リバース}反転」

その刹那、黒炎が誕生した。

空の境界編 第十六話 黒炎

黒炎は周囲の空気を、空間を焦がし燃え上がる。

燃え上がる炎は地のそこから鳴り響くような怨嗟の声を伴い、少しずつ空間を侵食してゆく。

言わんこつちやない、と蒼崎橙子は顔をしかめた。この怨嗟の炎は完全に制御を失っている。

このまま、放っておけば修練所を覆っている結界を焼き尽くし、やがてこの伽藍の堂さえもその怨嗟で飲み込む。いや、その程度の被害で済めば上々と言える。あの炎は周囲を巻き込み、巻き込めば巻き込むほどその力を増していき、術者が耐え切れずにこと切れるまでその猛威は衰えはしない。あれはそういう類の存在だ。

当然、もたらされる被害は甚大なものとなるだろう。

しかし、黙ってそれを静観する蒼崎橙子ではない。

素早く意識を切り替え、黒炎を消滅させるための最適の方程式を導き出す。

思いの外、答えは簡単に導き出された。

核となる術者の破壊。つまりは刀崎忠志の殺害。それこそがこの事態を収集する最適かつ最高の手段である。ほかの手段では確実性に欠ける上時間が掛かってしまう。それでは確実に手遅れだ。

その結論に達した彼女は冷静に準備を始めた。いくら、蒼崎橙子といえこれほど呪いの壁を越えて術者を破壊するのは容易なことではない。

「まずいな」

もはや、準備を進める時間の余裕すらない。荒れ狂う炎は既に天井までとの牙を向こうとしている。

彼女が魔術回路を起動させたその瞬間、黒炎が一箇所に向かって収束を始めた。

渦巻き、一点に集まりその密度を高めていく。高密度に圧縮された

黒炎はやがて人型をかたどり始めていた。

「嗚呼アアアアアア！」

ゴウツという炎の燃える音に負けぬ大きさに絶叫が響き渡る。

既に黒炎は人型を完成させている。少しづつ炎は統制され、その猛威を失っていた。

「制御できてきているようだな。まったく余計な心配だったらしいな」

その、様子を見てすぐに何が起きているのかを理解した彼女は魔術回路を閉じて警戒を解く。

やがて、炎は収まりその場所から人影が現れる。

「すいません。少し意識が飛んでました。大丈夫ですか？」

身体の周りに少量の黒炎をまとっているが、炎は忠志に牙をむくことは無く、逆に彼の身体を守る鎧のような形になっている。

「天井が少し焦げたぞ。あとで掃除しておけ。それに、お前の方こそ大丈夫なのか？一瞬、冷や汗を掻いたぞ」

「一瞬吞まれかけかけましたが、量を制御したら何とかになりました。すこし体力的にキツイですけど身体は調子が良いくらいですよ。あと

と

そう言うと肩を回して体の動きを確かめ始める。どうやら本当に身体自体にはダメージは無いらしい。

「隙あらば飲み込もうとしますけど、この程度の量なら何とか制御しきれます」

確かに黒炎は見る限り完全に制御されている。多少顔色が悪いのが目に付くがそれ外に異常は感じられない。

「本当にそれだけですめばいいんだがね。とにかく、それを解除してこれるならこっちに來い。何時までもそんなモノを出されていたら建物自体がもたない」

「わかりました。少し待ってください」

忠志は集中するために目を閉じると、深く息を吐き魔術回路を素早く的確に閉じていく。

「フリーズ
停止」

黒炎が消えうせていくその様子は、その鮮烈な出現に対して驚くほどのあつけなさだった。

「!?!」

黒炎が消えうせたその直後、忠志は足元から崩れ落ちた。

「なんだ、これ？」

身体を動かさそうとしても痺れたようになっていて動かない。予想外の事態に脳の処理が付いていけないのか自身の状態すらも理解できていないのか、忠志の表情は驚愕というよりは呆然と言つほうが正しいだろう。

「やはりか。身体が動かないだろう？ 幾ら適応しているとはいえそれは極大の呪いだ。当然、身体にも、精神にも、魂にすらかなりの負担をかけている。むしろ、それ位で済むお前が異常なだけだ」

そう言いながら、橙子はタバコを吹かしながら忠志に向かって歩いていく。

「何度無茶するなといえれば理解できるのかな、お前は？」

「あ、えつとその、すみません」

忠志は顔だけ上げて返事を返すが未だに混乱の境地の中にいるらしい。

橙子は忠志の傍まで来るとぺたぺたと身体を触り始める。

「え、ちょ、橙子さん!?!」

唐突に感じた自分の身体につめない他人の指が触れる感覚に忠志は思わず身をよじろうとするが体が痺れて上手く行かない。

「触診だ、暴れるな。……ふむ、神経系の麻痺のようだな。それ以外には身体自体に異常は特に見当たらない無いな。だとするとやはり……」

しばらく身体を触っていた橙子だったが、背中 of 辺りに目当ての何かを見つけたらしくそこを押す……

「痛っ!?!」

その直後、忠志は悲鳴を上げる。突然身体を走った痛みに呻き声を

上げ悶える。

「どうだ、これで身体は動くはずだが？」

身体を動かしてみると確かに良いまでは全く反応を示さなかった手足が動く事に気付いき、忠志は再び驚きを表す。

「橙子さん、これも魔術なんですか？ 魔力を使った感じはしませんでしたけど……」

疑問に思ったのか忠志が尋ねる。忠志から見れば一切魔術を使用せずあの麻痺を治したというのは少しばかり信じがたい事だった。

「いや、魔術は使ってないよ」

「じゃあどうやって？」

「そりゃ、私は人形師だ。自慢じゃないが人体構造についての知識はそこいら医者よりは詳しいと自負している。何処のつぼを突けば身体の異常が直るなんて事は熟知しているさ」

「へえ、中国の漢方かなんかですか」

「そんな所だと言っておこつ。そろそろ感覚が全て戻ってくるころだ。立てるか？」

忠志は何とかよろめきながらも立ち上がる。

「動けるなら次だと言いたいけど……」

「大丈夫です。まだ、やれます」

忠志はそう答えるがいまだに足元はおぼつかない。無理をしているのは明白だった。

橙子は呆れたようにはあ、とため息を吐くところ答えた。

「やれやれ、何を言っても聞きそうにないな。焦っても何も得られない物はないぞ。急がば回れのと申うだろうに。まあいい、とにかくさっきのあれは私の許可なしには絶対に使えない」

「はい」

言われるまでもないと素早く頷く。もし制御できなければそれがどんな結果をもたらすかというのはほかならぬ彼が一番理解できている事だ。

「よろしい。まずは」

「

十二月二十五日、

伽藍の堂 ・ 事務所

「じゃあもう結界も使えるようになったんですか？」

「いや、やっと人払いの結界がはれただけだよ。基本は一通り終わったけど、投影なんて酷いもんさ。鮮花さんも見たらどう？あれ。」

橙子さん曰く俺に何かを作るのは致命的に向いていないらしいけどここまで酷いなんて自分でも落ち込むよ」

そう自嘲しながら俺の製作しようとした使い魔、いやあれを使い魔と呼ぶには些か以上に無理があるものを思い出す。というか、ほかに存在するであろう使い間に失礼だ。

なんてつたつて名前は「名状し難き物 version ミニ」 by 橙子さんだ。途中までは上手く行ってたのに最終的にあんなクトウルウ的なものが出来上がるなんて自分でも何がなんだか分からなかった。

「確かにあれは酷かったですけど……でも、まだ魔術を習い始めて半年くらいだったですよ。それだけの間でここまで魔術を修めるなんてすごいと思いますよ」

「そんな事はないさ。毎回くたばりかけてるような物の俺なんて半人前以下だよ」

実際、反則みたいな物だ。あの未だに正体不明の知識の流入が無ければ未だに強化だってまともに来たかもわからない。

「全く持ってその通りだ。鮮花、頼むからこいつみたいにはなってくれるなよ。私だって講義のたびに毎回、伽藍の堂炎上の危機にな

んで直面したくは無いからな」

先程まで書類に目を通していた橙子さんが会話に参加してくる。

「ふふ、気を付けますよ。橙子師」

ひどい。そこまで言わなくても、と言いたいけど、まったくその通りなのでグウの音もでない。

実際、俺は今だ黒炎の完全制御をなせていない。毎回の修練の最後に橙子さん立会いのもと強化した結界の中で黒炎の制御を行っているのだが、必ず黒炎を開放したその瞬間一時的に意識を失ってしまい、結果として修練所の天井を焦がしている。自分で言っていて悲しくなるような情けなさだ。

「なんか、すいません」

「そう思うなら早く制御しきる事だ。このままだと何時までたっても見習いのままだぞ。倫敦に行くなんて夢のまた夢ということだな。鮮花の方が早く卒業するかも知れんな」

不意にガラツと言う音と共に事務所の扉が開け放たれた。

「すいません、少し遅れました」

十二月の刺すような冷気と一緒にこの伽藍の堂の職員、黒桐幹也さんが入室してくる。コートを着て手には小包を抱えている。

橙子さんは一瞬、驚きの表情を浮かべたがすぐに消えた。鮮花さんとは言うのと驚いた後、少し嬉しそうな表情を作ったが慌ててそれを隠してしまった。

俺が気付いていないだけで何か驚くような事があったのか？確かに少し遅刻気味の時刻だがそんなに驚く事だろうか。

「あー寒い。本当に寒い」

この寒空の中歩いてきたのか幹也さんは小包を中央の机の上に置く。と事務所の端のほうに申し訳程度に置いてあるストーブで暖を取り始める。

「何だ、黒桐。今日はてつきり式と一緒に過ごすものだと思っただけだ。たのだが……」

「僕もそう思ってたんですけど、式が家のほうで用事があるらしく

て、ほかに行き場も無いですし仕方なくですね。それに、来年までに今年の分の仕事を片付けておきたかったので」

此処まで聞いてやっと答えに行き着いた。そうか、今日は十二月二十五日、世間はクリスマスだ。

それが分かるとやっと納得がいった。

「そういえば鮮花」

「何ですか？兄さん」

幹也さんはそこで一呼吸置くところ言い放った。

「何で此処にいるんだ？」

その瞬間、明らかに鮮花さんの機嫌は悪くなった、と俺は思った。

思った、というのも鮮花さんはわかりやすい変化は無いが明らかに身にまとう空気が不機嫌だと主張していたからだ。確信は無いが。

「逆に聞きますけど兄さん。ここにいてはいけない理由でもあるんですか？」

「それはないけど……そうだ。お前、学校はどうしたんだ？」

「今は冬休み中です。二日ほど前に連絡を入れたはずですが」

鮮花さんはそうむすつとして答えるとそっぽを向いてしまった。そっぽを向かれた幹也さんは途方にくれている。橙子さんなその様子を面白そうに眺めている。

小川マンションでの一件から一ヶ月ほどたったこの日の伽藍の堂は平和といえは平和だった。

俺が幹也さんの持ってきた小包の中身を聞くそのときまでは。

「そういえば幹也さん、これなんですか？」

「ああ、これの事か。昨日あった人に伽藍こゑんの堂に持って行ってほし
いって頼まれたんだ。所長と忠志君の知り合いみたいな口ぶりだったけど……」

俺と橙子さんの共通の知り合い！？

その条件に該当する人物は余りにも少ない。いや、一人とっても良いかもしれない。

「黒桐、それを渡した人物はの容姿は見たか？」

橙子さんも俺と同じ結論に達したのか、その表情は先程に比べてかなり険しい。

「えっと、あんまり顔は見えなかったですけど髪が長かったのは分かりました。ああ、あとはすごく嬉しいそうでした」

長い髪、愉しそだった！？間違いな奴らだ！！

「え、なにことですか！？」

咄嗟に机から飛び退いた俺とは逆に鮮花さんは突然の急変についていけていないようだった。

何が起こつても対応できるように魔術回路を隆起させて、蛮刀を掴んでおく。

「黒桐、それを渡したやつは他に何か言っていたか？」

「いや、それだけですけど。あれ、でも僕はなんであの人の頼みを聞いたんだろう？おかしいな、さっきまで絶対に持ってこないといけないと思つてたのに」

「黒桐、お前は暗示をかけられたんだ。しかも一瞬での無意識下の刷り込みだ。並みの魔術師に出来ることではない」

高度な魔術。幹也さんにこの荷物を渡したのは奴らで間違いない。だが、意味が分からない。何かの攻撃にはあまりに回りくどすぎる。新心理作戦か！？

「刀崎、奴らの考えなんて探るだけ無駄だといっただろう。真面目に取り合うのは時間の無駄だ」

そう言つと橙子さんは立ち上がり例の荷物に近づいていく。無防備すぎる。

「橙子さん、危険です。下がって！」

「問題ない。攻性の術式が組み込まれていれば結界が反応する。それに殺すつもりなら黒桐に暗示など使わずにここの場所を拷問でもして聞き出すはずだ。それもしていないということとは」

橙子さんはなんの気無しに荷物をひょいと持ち上げて袋から始める。そして、中から現れたのは

空の境界編 第十六話 黒炎（後書き）

どうも、big bearです。

またまたお待たせして本当にすいません。

おまけに話も進まない。二十話までには空の境界編は終了します。

次の更新もできるだけ早くするつもりなのでお許しください。

では、こんなだめ作者と拙い文章ですがこれからもよろしくお願ひ
します。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひひ
お送りください。

目をこすり目の前の状況を否定する。これは夢だ。でなければ幻覚だ。そうだ。それ以外にありえないだろう、こんなの。

小包の中身はきれいに包装されたプレゼントだったなんて。

大きさは段ボール箱より少し小さい程度のサイズだ。自分の目と正気を疑いたくなる。さて、落ち着けK O O Lになれ。いや、C O O Lになれ。冷静になるんだ俺。

状況を整理すれば見えてくる物があるはずだ。まず、今橙子さんが手に持っている幹也さんが持ってきた

荷物の中身は奴が幹也さんに渡したものでその中身はきれいに包装されたプレゼント。

は？訳が分からん。

橙子さんの表情も引きつっている。幹也さんは暗示か解けて混乱中。鮮花さんも状況についていけない。

「橙子さん。それ、何ですか？」

頼む、お願いだからプレゼントとは言わないでください。だが、そんな希望も橙子さんの返答に見事に打ち砕かれた。

「私もあまり信じたくないが、プレゼントだな。ご丁寧にメッセージカードまで付いているぞ」

そう言うと橙子さんはカードに目を通す。カード自体の見た目は普通の紙ではない事が分かるがそれ以外には何の変哲のない物だった。魔力も一切感じられない。

「やはり、お前宛だな。読んでみる。破くなよ」

「はあ」

そう言うと橙子さんはカードを手渡してくる。たしかに。これを読む事でこのわけが分からないプレゼントについても理解できるかもしれない。

内容はこの通りだった。

『親愛なる刀崎忠志殿へ』

まずはお元気ですか？私のつけた傷も癒え、私たちへの憎しみをますます募らせている様子をちかくで眺められないのは心底残念ですが、それはいつかの再開までとっておくことにします。

今回はあなたへ親愛と心の底からの激励を込めてこのプレゼントを贈らせていただきます。

私からあなたへのクリスマスの贈り物です。

何を送ろうかと悩みましたがこれならあなたも満足できるはず。

ぜひこの子を使って更なる飛躍を成して、できるだけ、いえ一刻も早く私たちのもとへと辿り着いてください。退屈は私にとっては一番許しがたいことなのだから。

それにあなたには私たちも期待しているのですよ。

では、できるだけ早くのそして、劇的な再会をお待ちしています。良いクリスマス。

『あなたの愛しい狂喜より』

なんだ、これ。ふざけてるのか！俺をおちよくって楽しいでいるのか！？丁寧書いてあるのがさらに腹立たしい。怒りを通り越して殺意が沸いてくる。衝動に任せてカードを破り捨ててしまいたいが、それじゃあ奴らを喜ばせるだけだと思いきや腹のそこへ閉じ込めておく。それにこの子？あれの中身は生き物か？

「ちょっとそれ見せてくれますか？」

いつのまにか鮮花さんが横に移動してきていた。これ以上もつていたら破き捨ててしまいそうなので鮮花さんに渡して橙子さんの方へ移動する。

「えっと、この狂喜って忠志さんの話に出てきた……」

「ああ、黒桐の話の特徴といい間違いないはずだ。そのカードに書かれていることが本当なら本気でプレゼントのつもりで黒桐に運ばせたのだろうよ」

「そんな 兄さんは大丈夫なんですか!？」

「暗示自体には害は無い。すぐに正気に戻るさ。それよりも問題はこれだな」

とりあえず、幹也さんは無事という事が分かり鮮花さんはすこし安心したようだ。だが、まだ一番の問題は未だに残っている。

「中身はおそらく何かの生物だ。それも普通の生物のはずがあるまい。鬼が出るか蛇が出るか。開けてみてのお楽しみというわけだな」

「え、開けるつもりですか?これを。こんなもの捨てるか焼くかしてしましましょうよ」

どうせ出てくるのは手足が四本以上とか触手がうねうねしているこれ以上ないといえるような悪趣味な化け物だ。そんなモノは世にでる前に始末してしまうのが世のため人のために、そして俺のためにも一番の上策のはず。君子危うきに近づかずだ。

「捨てるといつても何処にだ?こんな得体の知れん物を街に解き放つのは余り感心できないな。それに償却したとして中身の物が殺せるかはわからん。下手に刺激して暴れ出せれるわけにもいかんしな」
橙子さんの言うことにも一理あるが、それでも危険すぎる。

「中身を透視する事はできないんですか?」

鮮花さんが尋ねる。それは思いつかなかった。もし透視できるなら空けずに中身の危険性を確認できる。

しかし、橙子さんはそれを否定した。

「もう試した。透視を阻害する術式が組み込まれている。私でも解呪は難しい」

「じゃあ、放っておきましょう。地面にでも埋めてしまえばそれで終わりのはずです」

「いや、その時間は無いようだ」

時間が無い！？よく見るとプレゼントはがたがたと動き出している。中身が外へ出ようと暴れ始めているらしい。早く処理しないと中身が此処で暴れだしかねない。

「修練所に行くぞ。此処よりまだましのはずだ。刀崎、鮮花。準備をしておけ。黒桐呆けてないで、おまえは私の部屋から靴を持ってきてくれ」

―伽藍の堂・修練所―

準備を整えて修練所に集合した俺たちはすでに中身が暴れて包装の破れかけたプレゼントと向かい合っていた。

鮮花さんは既に火蜥蜴の手袋をはめている。橙子さんはあの時と同じ怪物の入った靴を

持ってきている。俺も回路を隆起させ蛮刀を構えて臨戦態勢をとっている。現在の伽藍の堂の最高戦力である。

「開くぞ。油断するな」

きれいに包装されていたプレゼントは見る影すらない。中身は何の変哲のないただの木箱。いや、微弱な魔力を感じる。

「！？」

一際、大きく箱が動いたかと思うと箱の蓋が吹き飛ぶ。

そして、箱の中のものがニャアと鳴いた。

「幼生の魔獣だな。猫ではなく虎、しかも剣牙虎か。サーベルタイガー此処に来るまでの間は仮死状態にしていたようだ。お前が近づいたら蘇生されるように術式がセットされている。なんとまあ手の込んだことを・・・まあ、なにはともあれ、使い魔とするならかなりの上物だな。よかつたじゃないか刀崎」

「・・・・・・・・」
目の前の頭痛の種に目を向ける。見た目だけ取れば子猫だ。これが箱の中から出てきたときには拍子抜けしてしまった。しかし、白い毛皮に走る黒縞と上顎か突き出た牙はこの生物が常識の範疇に無い事を主張している。

「でも、かわいいですよ。この子」
鮮花さんはそう言って目の前で一人遊びをしている剣牙虎を指差す。確かに遠目で見ている分にはかわいい。

「まだ幼生だからな。おそらく生まれただけだろう。生後二、三ヶ月といったところか。成体になるまで二年程度か？天然物ではないと思うが、さすがに魔物については私も専門外だな」

専門外という割には詳しい橙子さん。だが、実際に目にするのは初めてのようにだ。

「でも、どうしてこんな」
理解できない。俺に使い魔なんて送りつけてどうしようというのだろうか。

「あのカードの文面通りだろうよ。さしずめ大きく強く育ててから殺そうという魂胆だろうよ」

「」
今の俺は敵にすら値しないというわけか。腹立たしさに歯をかみ締める。

狂笑を浮かべる奴らの顔が過ぎる。いいだろう、人を散々おちよくつた分はかならず返してやる。

だが、それはまだ先の話だ。まずは目先の問題への対処が先だ。

「これからどうしますか、あれ？」

「どうするもこうするもお前が観念して使い魔として使うか、殺すかだ。自分の意志で決めろ」

困った事にあの剣牙虎と俺の間には因果線があるらしい。つまりはあれは俺の使い魔ということになるのだ。あちらにもこちらにもその自覚が無いのだが。俺の知らないところでの契約だ。破棄してしまいたいところだが、橙子さん曰く俺の契約の主導権はあの黒炎と同じく奴らの下にあるらしく変更も破棄もできないとのこと。なら、使い魔の破壊しか方法は無い。だが俺にはそれを決心できなかった。「ニヤア」

甘いだけなのかもしれない。決心と覚悟が足りないだけかもしれない。ても、ゴロゴロと喉を鳴らすこの無邪気で小さな生き物を殺してしまえば何かが変わってしまう気がしてならない。だから、俺はこいつを……

「橙子さん、本当に問題ないんですよね？」

「ああ、契約自体は正常な物だ。多少変則的ではあるがな。あれは完全にお前の使い魔だ」

拳動を眺めていると剣牙虎がこちらを突然に振り返る。目が会うとこちらに向かつて駆け寄ってくる。

近くでよく大きさをみると小型犬ほどの大きさはあるだろうか。

足元までやってきた剣牙虎を抱え上げる。ずしりと重く、伝わってくる力強い心臓の鼓動が生命力を感じさせる。

「……………」

目線の位置まで掲げよく観察してみる。どうやらオスみたいだ。

「名前でも付けてやったらどうだ？長い付き合いになるかもしれないんだからな」

「そうですね、どうせならいい名前を付けてあげてください」

「名前ですか？」

名前か。確かにこれからこいつとは長い付き合いになるかもしれないし何か名前をつけてやったほうがいい。だが、咄嗟にいい名前なんて思いつくはずもなく。

「トラ？」

「却下だ」

「却下です」

「ですよね」

わかってるさ。さすがに酷いとは思ってたさ、自分でも。だけど、できるだけシンプルな名前のほうが親しみやすいかもしれないかも知れないという俺なりの考えがあったのだが。

「じゃあ……松風？」

「それは馬だろう」

「まあそうですけど。まあ名馬ですしやっぱり相棒ならそんな感じがいいかなと」

「だがな」

「そうですね、他には　　っておい。顔を舐めるな」

「でも、この子は気に入っているみたいですよ」

本当にそうなのだろうか？目線の位置に抱きかかえ、もう少し観察してみる。琥珀色に輝く瞳からは無邪気さと動物特有の純粹さしか感じられない。

「　　好きにしる。私は黒桐の様子を見てくる」

そう言うと橙子さんは上へと続く階段を上り始める。

「私も行きますね」

鮮花さんも行ってしまった。

ということは俺とこいつで二人きりってことかよ。地面に下ろして再び向かい合う。

「ニヤア？」

なんだか気が抜けてきた。こいつを見ているとあれこれ難しく考えられている自分がバカらしくなってくる。

考えれば考えるほど泥沼にはまりそうだ。

とりあえず、今日の鍛錬を始めよう。

―伽藍の堂・事務所― 一月三十日

「痛つ。噛むなって言ってるだろう。後で遊んでやるからあつちに行ってる。ほら行け」

無邪気にこちらにじゃれ付く毛むくじゃらを修練所のほうへ追いやり、再びイスに座りなおす。

あれから、一ヶ月ほどしかたっていないのに松風の大きさは中型犬ほどある。当然、じゃれ付かれるこちらは無傷とは行かない。あちらは遊んでいるつもりなのだろうが両腕とも傷だらけである。

それに普通の犬猫よりもかなり頭が良い。ドアノブだろうがすぐに開けて部屋に侵入してくるしこちら言葉をある程度理解しているふしがある。問う子さん曰く、魔獣といいのはそういうものなのだろうだが……

「さてと」

余計な考えを隅に追いやり目の前のテキストに集中する。一問一問を間違わないように慎重に解いていく。

何日この本に向かい合っただろうか。目の前に存在するこの本こそがこれまでの敵の中で一番の難敵かもしれない。その本の名を「よく分かる英会話 これ一冊で日常会話からジョークまでバツチリ」という。

約五百ページで習得というなんとなく胡散臭い内容だがまあ、それは仕方がない。俺の卒業条件の一つが英語をマスターする事だから

だ。

魔術や武技とは違い英語の使い方なんて物は頭の中に流れ込んでこなかった。そのため現在猛勉強中なのだ。

「今朝、新たな犠牲者が」

テレビの音声が聞こえてくる。どうやら最近、連続殺人事件が発生しているという話らしい。なんでも三年前にあった事件と酷似しているとのことで警察はいまだに犯人の輪郭すらつかめていないとの事。四年前の事件なら隣町にいた俺の記憶にすら残っている。

確かあの時は戒厳令まで出たはずだ。

「物騒な話ですね。報道も煽ってるみたいですし」

「浅上藤乃や巫条霧絵の件に立って続けに発生しているからな。物珍しいんだろっ」

確かに、この一年の間この街では俺の知っているだけでもおかしな事件が多発しすぎている。

手足の擦れた死体や連続飛び降り。そして表沙汰にはなっていないが小川マンションでの一件、そして一月の礼園学園での封印指定の魔術師玄霧皇月の行動。これらは全て式さんを狙う魔術師、荒耶宗蓮によって仕組まれた物だった。とすると、今回の一件も関係があるのかもしれない。

「橙子さん。まさか、これも……」

「無関係では無いとだけ言っておこう。おそらく、荒耶の置き土産といったところだろうな」

「じゃあ」

「今の所は大丈夫だろう。式も黒桐も無事だ。黒桐はともかく式が心配ないのはお前もよく分かっているだろう」

そこら辺の通り魔なんぞが式さんをどうこうできるとはとても思えない。心配しすぎなのだろうか。

だが、嫌な感じがするのもまた事実だ。杞憂に終わってくれればそれが一番良いのだが。

「まずは自分のことに集中しろ。人のことを心配している余裕があ

るのか？お前に」

そう言われるとこちらに反論の余地は無い。と、言ってもこのテキ
スト既に終えてしまっているのだが。

その旨を橙子さんに伝えるとこんな答えが返ってきた。

「そうか。なら次だ。何？もうここにあるのは全てやり終わったの
か。それは重畳。では次を買って来い。その間にこの間のルーンも
採点しておいてやる」

市内・町外れ

そう言われて買い物に出て三時間。買い物自体はすぐに済んだのだ
が、俺は思わぬ足止めを食っていた。

主に足元ではしゃぐ毛むくじらのせいであるのだが。

「ほら、離れるな」

始めてみる外界に興味津々で動き回ろうとする松風。一応リードに
はつないであるのだが、犬の散歩のようにはいかず思念を送ってなん
とか制御している。だが、傍目には犬の散歩しているようにしか見
えないはずだ。

「本当に大丈夫なのか？」

しかし、不安を思わず口に出してしまう。でも仕方がないだろう。

俺には首輪が本当に効果を発揮しているのか確認する術がないのだ
から。出かける前に「ついでに散歩にでも連れて行ったらどうだ」

と橙子さんにいわれて、渡された首輪。効果は認識阻害。魔術師で
はない人間には松風は柴犬にしか見えないという話なのだが・・・

・

俺にはそのまま姿でしか見えない。それでも、周りの人間が特別何
か反応を示していないのだから術は問題なく機能しているはずだ。
それでも、人通りが少ないというのはありがたかった。時刻は午後

九時を過ぎたあたり本来なら車や人の往来も激しいこのあたりも最近の通り魔事件のせいか人通りはめつきり少ない。それでも、外に出ている人間はいるものだが

「じゃあ」

目の前ではしゃぐ松風はとても楽しそうに見える。人に噛み付きはしないかと心配だったがこっちの言いつけはよく守っている。やはりかなり頭がいい。

「グルルルル」

途端、松風の様子が一変した。先ほどまでとは打って変わって何かに警戒するような低いうなり声を上げ姿勢を落として身構える。視線の先には薄暗い裏路地。

「何かあるのか？」

目を凝らしてよく見るが何かおかしいものはない。ねずみでも見たのかと立ち去ろうとしたとき微かな血の臭いが鼻についた。

「」

警戒しながら路地裏に踏み込んでいくにつれ少しずつ血のにおいは強くなっていく。

「ニヤア？」

横を歩く松風が心配するような声を上げる。

「大丈夫さ。何事が確認するだけだ」

出かける前に聞いた通り魔事件が脳裏に浮かぶ。可能性は高い。そして、こちらにまともな武器はない。

「これは……」

足元に転がっていた角材を手取る。大きさは問題ないがひどく握りにくい。こんなものでも強化すれば使いものになるはずだ。

「！？」

足元にめめりとした感覚。湿った字目に足を取られる。よく目を凝らすと、飛び込んでくる血。

「くっ」

やはりそうか。もはや死体ともいえない肉塊が転がっている。断面

は切られたというよりは大きな獣に食いちぎられたように見える。
とにかく、警察なり何なりに連絡を

「ガアウー!!」

松風から伝わってくる警告の思念にしたがってすばやく姿勢を下げ
る。先ほどまで俺の首があった場所を刃が通り過ぎる。

「こ、のー!」

振り向きざまに角材を振るが簡単に避けられる。そこまでは織り込
み済みだ。

「ガルルルル」

リードを放され自由になつた松風が俺と襲撃者の間で身構える。俺
を守っているつもりらしい。

「確認する。これをやったのはあんただな」

確認するまでもないことだろうが、生き残りが俺を犯人だと思つて
いる可能性もすずめ涙ほど位にはある。

「さあ、どうだかな。どこで誰をやつたかなんて、いちいちに覚え
ちやいない。それにお前、俺がまともに見えんのか? 狂人が自分の
行為を覚えてるわけないだろう?」

決まりだ。こいつが一連の通り魔事件の犯人と見て間違いないだろ
う。なら

「へえ、やる気なのかお前」

角材(エモ)を構えて敵を見据える。心もとないがないよりはました。そ
れにこつちだつて昔とは違つう。

戦うための力がある。

「起動(wake up)」

魔術回路を限界まで隆起させ全身を強化する。強化された視力は
夜の暗闇をも見通す。

「なっ!?!」

驚愕と接触はまったく同時だった。

空の境界編 第十七話 魔獣（後書き）

どうも、big bearです。

時間かかかり過ぎて本当にすいません。周一と言っておきながら二週間に一度になってしまってます。しかも、これからもそうなると思います。テストが終わってしまえば更新できるのでお許しください。

そして、悩んだ末の結果が松風・・・ネーミングセンスなすぎでごめんなさい。焼き土下（ry
では、こんなため作者と拙い文章ですがこれからもよろしくお願ひします。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひお送りください。

空の境界編 第十八話 試験（前書き）

「起動（wake up）」

魔術回路を限界まで隆起させ全身を強化する。強化された視力は夜の暗闇をも見通す。

「なっ!？」

驚愕と接触はまったく同時だった。

空の境界編 第十八話 試験

迫り来る凶刃を逸らし受け止め、返す刃で敵を捉える。最初こそ、その姿に惑わされたものの、

今は

「そこか！」

「なっ！？」

予想外の反撃を受け受け敵は困惑を浮かべる。やはり、戦える。俺はこの敵と戦える。たしかに速い。その速度たるや、人のものではなくもはや獲物を刈る肉食獣のそれだ。しかし、その拳動は獣であるがゆえにひどく直線的だ。夜の暗闇も目を強化してしまえば意味を成さない、それにこう何度も打ち合っていれば自然と動きは読めてくる。

「ガッルルルル」

「分かつてる！」

送られてくる警告を含んだ思念。こちらもそれは予想済みだ。

「はっ！」

「ぐっあ」

カウンター気味に角材を振り下ろす。手にかえって来る殴りつけた確かな感触。もう、何撃も決めているがいまだに決めきれない。この通り魔、タフさも獣なみらしい。角材とはいえ強化により強度は鉄にも匹敵する。そんな物で何度も打ち据えているというのに全く堪えていない。

これでは埒が明かない。逃げるにしても速度ではこちらに勝ち目は一切ない。

なら、相手を戦闘不能にするしかない。頭部への一撃で意識を奪う。

または、内部へのダメージで動きを止める。

「くそつ。お前いったい何なんだよ。ほかすか人を殴りやがって。でも……おもしれえ、両儀とやるまえの予行練習だ。精精抵抗してくれよ！」

両儀か。やはりそうか。それならばこいつの格好も納得がいく。着物姿に赤の革ジャンを羽織るその姿。式さんを真似たとしか思えない悪趣味な服装。しかし、この暗闇の中でも判別できるたてがみの様な金髪は式さんとの明らかな違いだ。

そして、人間離れたこの動き。荒耶宋蓮が用意した駒のひとつに違いない。つまりは常識の外側の存在。

なら気絶させて警察に突き出すのではなく、魔術師の、俺の手で仕留める。

式さんや幹也さんたちには手は出させない。

ダツという軽快な音と共に獣は飛び上がった。人間には反応できないう速度で視界の外へと飛翔する。

敵はこちらを視認できてない。勝利の予感に頬がつりあがる。やはり今までの攻撃は偶然だったのだ。多少武術をかじっていることは分かっていたが、所詮は人間。百獣の王たる自身には勝てる道理はないのだ。

しかし、獣は理解しきれていなかった。怪異は怪異を呼び寄せる。自身と対峙する、獲物となるだけだった存在は自身と同じ常識の外

の存在だということ。

「!?!」

獣は必殺を逃したその瞬間、驚愕を通り越し呆然となった。

(こいつ……俺の攻撃を……!?!?)

臓腑を抉り命を刈り取るはずだったその一撃はむなしく服と薄皮一枚を抉っただけにとどまる。

彼、忠志はほぼ、完璧なタイミング、極最小の動きで獣の攻撃を回避したのだ。

「捕まえたぞ!」

直後、忠志は獣が再び飛び去る前にその胸倉を左手で掴む。

咄嗟の事で身動きをとれず、無防備な鳩尾に角材による突きがめり込む。ポツキという乾いた音とともに獣のあばら骨は砕けた。さらに、その砲弾のような衝撃に獣はボールのように吹き飛ぶ。

(よし)

手応えありと忠志は内心、ほくそ笑む。実際には紙一重。相手はこちらを侮っていないけば物言わぬ死体になっているところだったが、今倒れているのは獣だ。

勝利の予感を感じながら、忠志は止めを刺すべく少しづつ獣へと近づいていく。

しかし、彼は気付かされることになる。彼もまた敵を侮っていたということ。

「ガールルル」

再びの警告。それに対応した後方への回避。それが間に合わなければ形勢は簡単に逆転していただろう。

「くっ!?!」

突然の奇襲。ばねの様に飛び上がった獣はその勢いのまま、忠志に向かって突撃を仕掛けたのだ。

忠志の首の皮一枚の場所をナイフが通り過ぎる。直前の回避がなければ間違いなく致命傷だった。

「こ、の！」

無理な体勢から振るわれる反撃は虚しく宙をきる。そうして、両者の間に距離が開いた。

その時になってようやく彼らは互いの力を正しく理解した。

仕留められなかった。万全のタイミングと威力ではなかったはずの一撃でもたいしたダメージにはなっていない。ますます、武器が有り合わせなのが悔やまれる。それにしても、あの頑丈さ。魔力は一切は感じられないというのに身体能力は人間を遥かに凌駕している。それにあの動きはいつぞや戦ったあの怪物に近い。まるで猛獣を相手にしているような気分だ。一体何なんだ、あれは？

「グルルル」

足元で松風が敵への警戒とこちらへの心配が入り混じったような声を発する。恐怖は一切感じられない。

頼もしいを通り越して呆れてくる。

「

彼我の距離は十メートルほど。こちらから攻めるには距離がある。カウンターを狙うにしてもあちらもそれは予測済みのはず、だからだろうか予想を伺うばかりで迂闊に仕掛けてこようとはしない。

手がいる。この状況を動かす一手が。

覚悟を決めるしかない。人払いの結果を張っていないこの状況では目立ちすぎるし、魔術回路への負担も大きい。だが、背に腹は変えられない。

「反て　　！？」

「え、なにこれ。血？それに、キヤアアアア！！」

背後から聞こえてくる甲高い悲鳴。戦いに気をとられすぎて警戒

を怠っていたせいでここまで気づかなかっただけ。そして、それに気をとられた瞬間。

「て、おい待て!!」

瞬間、通り魔は脱兎のごとく駆け出す。そうして、曲芸のように壁を駆け上がり驚異的な速度で消えていく。クソ、逃げられる。追わないと

「おい何事だ!？」

「悲鳴が聞こえたぞ」

「通報したほうが……」

「そこに、誰がいるのか？」

ギャラリーが集まってきたらしい。通報されたりしたらかなり面倒なことになりそうだ。幸いこの暗さでは俺の姿ははっきり見えていないはず。とにかく、ここから去らないと。

「ニヤツ!？」

素早く松風を小脇に抱え上げ一気に駆け出す。目の前は壁。だが何とかなる。足場を探って壁を駆け上がりつつ夜の闇にまぎれて消えて行く。我ながら、なかなかの引き際だった。

「どこだ。どっちに行った？」

駆け上がったさきは建物の屋上。眼下には町が広がっている。やつこの気配は感じられない。潜んでいるにしても松風が気づくはず。逃げられた。

「畜生。最初から全力で戦っていれば……」

サイレンの音が聞こえてきた。どうやら、警察もお出ましらしい。面倒なことになる前にここを離れて奴を探さないで。

二月一日

「帰りが遅いと思ったら、お前はまた余計なことに首を突っ込んでいたのか」

俺はあれから三時間ほど奴を探し回って日付が変わってから伽藍の堂に戻った俺は橙子さんに何が起こったかを報告していた。

「すいません。でも、これではつきりしました。例の通り魔もやっぱり狙いは式さんでした」

「やれやれ、荒耶もまた面倒な置き土産してくれたものだ。魔力を使っていないのに人間以上の身体能力と頑丈さか」

「橙子さんでもわかりませんか？」

「ああ、情報がこれだけでは皆目見当がつかん。ほかに何か気づいたことはないのか？」

ほかに、気づいたこと……一つしかない。

「え、と。なんといいたらいいのか、その動物みたいな感じでした」「動物？」

「それも、猛獣みたいなイメージを戦っていて受けました。人間離れしていたからそう思ったのかもしれないけど」

奴の動きを思い出しながら橙子さんに説明していく。

「猛獣のような……なるほど、刀崎。お前はそいつが人を殺しているところを直接見たか？」

「いいえ、俺が見つけたときにはすでに……」

待てよ、あのとときの死体。食いちぎられていた、つてことは

「殺人鬼と呼ぶのも正しくはないかもしれない。殺した端から食い散らかしているんだ、食人鬼とも呼ぶしかあるまい」

人を、食う……信じたくはないが、納得が行く。何より自分の目で見たことだ。

「とすると、中身も肉食獣のものって事ですか。タフなわけだ」

「警察の手にはおえんだらうな。だからといって干渉する気もないが」

「そう、ですか……」

橙子さんの基本方針としては依頼がない限りは厄介ごとには関わらないことだ。小川マンションの一件は特例中の特例だ。直接、身内に被害が及ばなければ動くことはないはずだ。だが、どうにもそれじゃあ手遅れになるような気がする。今までに敵はまだ、目的があった。思惑と目的があつて行動していた分何をするかはある程度、予想ができた。しかし、今回の敵はそれが読めない。式さんを狙っているのは分かっているがそれ以外に何の情報もなくその行動に意味があるのか、それともないのかも分からない。

なら、何かを企むまえに叩き潰す。手早く殲滅してしまえばそれで終わりだ。

「橙子さん。俺が」

「駄目だ。今回の一軒に関してはこれ以上深入りするな」

「な、どうしてですか？今なら俺一人で事態を収拾できるかもしれないのに」

「思い上がるな。お前は確かに強くなった。だが、魔術師としての腕は自体は見習いに毛が生えた程度だ。今まで、警察の捜査を掻い潜ってきた奴をどうやって捕捉するつもりだ？」

「ぐ、それ、は……」

「それに、武器のないお前で対抗できたんだ、式ならまったく問題ないだらうよ」

たしかに、それはそうだが……

「お前のすべきことは何だ？かねてから用意していたお前のため術式の用意ができた。早速下に行って用意している」

俺の、ための術式？いったい何のことだらうか？俺に皆目見当がつかない。

「卒業試験のようなものだ」

卒業試験？え、？

「どうということですか？」

「そのとおりの意味さ。少し前に倫敦の知り合いに連絡がついた。そいつが協会にコネをもっていてな、お前の運と実力によっては即執行者としての採用もあるかもしれないとの事だ。どうだ、なかなかいい条件だろう？」

封印指定執行者。魔術師を狩る魔術師。協会の誇る荒事を専門とする者たちのことだ。

その戦闘力は聖堂教会で異端討伐の任を負う代行者たちにも匹敵するという。

たしかに魔術協会の本部である時計塔、しかも執行者ともなれば当然集まってくる情報の量も違う。とうぜん、その中には奴らのものもあるはず。それに俺に足りない実戦経験を補うという点ではこれ以上の場所はないだろう。

「たしかに、魅力的ですけど……そんな好条件どうやって取り付けたんですか？」

「何だ、知りたいのか？実はな、その知り合いというのが、私の学生時代の後輩でな。何度か助けてやったこともある。それを使って懇切丁寧に頼み込んだ、という訳だ」

懇切丁寧……詳しくは聞かないほうがいい気がする。

「とにかく、分かりました。修練所したに行っていればいいんですね」

―伽藍の堂・修練所―

「これは……」

修練所の中心には半径二メートルほどの魔法陣が刻まれていた。

二重三重に効果の違う術式が複雑に編みこまれている。おそらく精神干涉の術式を基本にしているのだろうか、俺程度の知識では理解しきれないほどに複雑だ。こめられた魔力も相当なものだ。

「用意はできたか？なら、早速はじめるぞ」

そついいいながら橙子さんが階段を下りてくる。手にはカップが握られている。

「それを飲むんですね？」

「ああ」

「どのくらいですか？」

さすがに、あのときのよういきなり一気飲みするほど馬鹿じゃない。

「なんだ、今度は聞くのか。全部だ。その魔方陣の上に立ってそれを飲め」

カップを受け取り、言われたとおりに魔方陣の上に立ち、カップの中身を確かめる。

「!？」

予想と違い、無色無臭でそれが逆に警戒心をあおる。

「……」

「どうした？早くしろ」

迷っていても仕方がないので、覚悟を決めて一気に口の中に押し込む。

味はない。まるで水を飲んでいるような……

「!？」

途端、意識が霧散していく。何が起きているんだ？

音が遠くなっていく、目の前の景色が消えていく。思わず膝を突く。足元から光があふれて来る。何のひかりだろうか？力が入らない。

体の感覚も鈍くなってきた。思考ができない。

「
」
声？が聞こえる。誰の声だろうか？しっぺているきがする。

だれだ？

ここはどこ？

おれはなにを？

どうでもいい。

今はこの眠りに落ちてしまいたい。

それ以外はどうでもいい。

いまはこの眠りに落ちていっつ。

空の境界編 第十八話 試験（後書き）

どうも、big bearです。

約一ヶ月ぶりの更新……

すいませんでしたあああ。焼き土下座でも足りません。本当にすいませんでした。

ところで、話は変わりますがアニメ、Fate/zeroすばらしいですね。作者はバーサーカーの動きに大興奮です。毎週土曜は私の一週間最大の楽しみです。

私の作品も誰かを楽しませているのならいいのですが……

では、こんなため作者と拙い文章ですがこれからもよろしくお願ひします。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひひお送りください。

空の境界編 第十九話 幻想

???

目がさめて最初に目に入ってきたのは何年も見てきたいつものくすんだ色の天井だった。

だというのに、だというのに、どうしてもこんなに違和感を感じるのだろうか。

「う、ううん」

長く、苦しい悪夢を見ていたような気がする。背中にもべとりとする寝汗のあと。

思い出そうとするとひどく頭が痛む。よほどひどい悪夢だったらしい。

体を起こしベットから立ち上がるとさらに頭は割れるように痛む。

目の前の自分の部屋に気分が悪くなるほどの違和感を感じる。

「
」

声がでない。ただただ呆然と立ち尽くす。どうしてもただ自分の部屋にいただけだというのに。

こんなにも、どうしようもなく、いい表すことのできないほどたくさんの感情が湧き出てくるのだろうか。

不意に、トントンというノックの音に続いてドアが開かれる。そこから現れたのは

自宅・リビング

「彰文、早く食べないと遅れるわよ。今日、部活でしょう」

そう急かす母さんの声をバツクに怠惰に朝食を運ぶ。頭の痛みは
いまだに治まる気配はない。

「いいよなあ、兄貴も姉貴も休みでさ。て、おいおい兄貴。大丈夫
かよ？」

横から彰文の声変わりしたばかりの声が聞こえてくる。もうすで
に制服に着替えている。

「俺がどうしたんだ？見ての通り元気だぞ」

そういつて空元気を作ってみせる。どうせすぐ痛みも治まる。あ
まり無用な心配を家族かけたくない。

「彰文の言つとおりよ。死にそんな顔してるわよ。本当に大丈夫な
の、兄さん？」

さらに優菜からも心配するような声もする。

「風邪か？気をつけるよ」

おまけに親父まで心配してくるとは傍目から見ても俺はよほど重
症らしい。

「今日は休む？あなた、本当に具合が悪そうよ」

母さんまで心配し始める。たしかに頭が痛いがそこまで具合が悪
そうに見えるのか。

「いや、大丈夫だと思うけど」

頭痛は治まる気配はないが、それよりも大きな問題はこの違和感
だ。まるでとても大事なことを失念しているような、まるで自分が
いるはずのない場所にいるような……

いや、そんなことはどうでもいい。どうせすぐにこの違和感も消える。
今はこの平穏が何よりも

「兄貴、何で泣いてるんだ？」

「え、泣いてないぞ」

「泣いてるよ、へんな兄さん。私が起こしに言ったときもボウってしてたし、本当に大丈夫なの？」

たしかに頬に熱いものを感じる。いつの間にか本当に泣いていたらしい。止めようと思っても俺の意思に関係なく止め処なくあふれ出す。一体なんだろうか？なぜだろうか？

見慣れているはずのみんなの仕草、聞きなれた声が、こんなにも懐かしく感じられて、それを見ることが、聞くことができるのがこんなにもうれしい。

でも、どうしてだろう。それと同じくらい、いやそれ以上に悲しくなるのは。

「どうした、何かあったのか？」

親父が声をかけてくる。その珍しいことに声色には心配の色が混じっている。

「本当に大丈夫なの？どうせ休みなんだからあなたはゆっくり休んでいなさいな」

たしかに俺の状態は普通じゃあない。それは確かだ。お言葉に甘えて眠るのが一番いいはずだ。

部屋に戻ってゆっくり眠ろう。

今度は悪夢なんて見ないようにゆっくりと深く。

夢を見ている／夢じゃない

黒々と燃える炎。そんな非現実的な光景だというのに肌で感じる炎の熱と脂の焼ける不快な臭いは妙に現実的だった。

夢を見ている／夢じゃない

次に感じたのは痛みと悪意の熱。

唯ひたすらにこの世のすべに対する憎悪。お前たちが憎いと、お前たちが嫉ましいと。

ひたすらに叫び続ける。もう喉などないというのにそれでも叫び続ける。

そんな魂さえも溶解する悪意の嵐の中でも自分を保つのは比較的簡単だった。そうまるでそれが日常の一部であったのかのように悪意の渦を受け入れた。

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

もはや、いかほどにも感じることはない。

初めてだというのに／もう慣れた

しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね
しねしねしねしねしねしねしねしねしねしね

悪意の嵐をくぐりぬけると知らない／知っている景色にたどり着いた。

瓦礫が積み重なっている。

此処は知らない／此処は知っている

炎が黒々燃える。

黒焦げになった人形かぞくが地面にたくさん転がっている。

ここは地獄だろうか。俺は何か大きな罪でも犯して此処に落とされたのだろうか。

そうでなければこれいったい何なのだろうか。

こんなものは見たくない。こんなものは知らない。理解したくない。

こんなものは唯の悪夢。目覚めてしまえばそれで終わりだ。

そうして夢から覚めようとした俺の目の前にそれは現れた。

夜の闇より黒い長髪

物語の魔法使いのようなローブ

万人がそろって美しいと評価する彫刻のような端正な顔立ち

そしてナニよりも印象的なこの地獄に最も似つかわしくない美しく
晴れやかな笑顔

忘れるはずがない

忘れられるはずがない

そくだ、こいつだけは例え地獄に落ちても忘れない。

こいつが、この化け物こそが俺の　だ。

俺の生きる意味だ。

俺の存在価値だ

だから

「っ?!」

ガバリとベットから起き上がる。全身が汗でじっとり湿っている。どのくらい寝ていたのかは知らないが長くひどい悪夢を見ていたようだ。

「痛っ」

頭が割れるような痛み。どうやら頭痛は治まるどころかより悪化したらしい。

違和感はさらに強まり吐き気さえしてきた。こっして呼吸をしていることさえ可笑しなことのような気がする。

「っおっと」

ふらつく足を叱咤しながらゆっくりと立ち上がる。とにかく頭が痛い。かといって原因が分からないのだからどうしようもない。

こっというときは何かで気を紛らわすのが得策だ。

部屋の中を見渡してみる。できるだけ頭を使わなくていいものがない。

ゲーム、却下。作りかけのプラモデル、却下。読みかけの本、これも却下。

このくらいだろうか……

「ほかには 痛」

頭痛のせいか考えがまとまらない。

おきていても仕方がないので無理やりにも寝ようとベット着こうとしたとき、勉強机に無造作に置かれたアルバムが目についた。俺が置いたのではないので誰かがおいたのだろう。

アルバムを手に取り、ページをめくり始める。一年ごとに年代順に並んでいるらしい。

写真を見ることで昔の色あせてしまった思い出も鮮やかによみがえる。

妹や弟が生まれたときや、入学式や卒業式。親戚の結婚式等さまざまな記憶。思い出せないものもあるがアルバムを見ることで思い出すことができる。

とうとう今年のページに差し掛かる。彰文の卒業式、入学式。そのぐらいのはずだった。

次のページにも何かが挟まっている。

めくろうと手をかける／見るな

見てはいけないと、知る必要は無いと。

そう叫ぶように頭痛が酷くなる。それでもページをめくる。そうしないといけない気がする。

そうすることでこの痛みから解放されると、本能が理解している。

ページをめくると赤が目映った。

炎、炎、炎、炎、炎、炎、真つ赤な炎が見えた。

続いて黒い人形。

視界が歪む。ノイズが見える。

黒い人形が に変換される。

直ぐに人形は消えていく。

意識が八つ裂きにされていく。

写真が入れ替わり始める。

何処にでもあるような辺鄙な廃ビル。

剣を構える自分。

厳しい表情をしたオレンジ色のコートを着た女性。

猫というには大きいちさな虎。

着物の上に真っ赤な革ジャンを着た女性。

黒い服を着たためがねをかけた男性。

幽霊のようにやせ細り病室で眠る女性。

見るもの全てを威圧する黒い石柩のような男。

あまりにも異質で、恐ろしいバケモノ。

そのどれもが初めて見るものだというのにそのすべてにを感じるという矛盾した感想を抱かせた。

そして そのどれよりも鮮烈に現れる、地獄にたたずむ満

面の笑顔をたたえた狂った人形。

その瞬間、俺はすべてを思い出した。

手早く着替え、財布をポケット押し込む。速ければ夜には目的の場所に着くはずだ。

「ちよつと!?!どこ行くの? 具合は大丈夫なの?」

「ああ、大丈夫。もう治ったよ。少し出かけてくる。夕飯までには戻るさ」

「本当に大丈夫？」

「ああ。大丈夫、もう思い出した」

「思い出す？」

困惑する母に微笑みかけ、迷いを振り切るようにかけだす。帰ってくるなんせ嘘について。

もし、あそこにたどり着いてしまえばこの夢は覚めてしまう。

この樂園は微塵も残さず砕け散る。その確信がある。

つまりは、俺の手でまた家族をあの地獄に叩き落とすということだ。

「とまりそうになる足を意思でねじ伏せ押し進む。後悔と羨望が足を引っ張り続ける。」

覚める必要などない。現実の自分の末路は決まっているようなものだ。

復讐の果てに待つのはおそらくは無残な死。

いや、果たすことなく死ぬ確立が大いに勝るだろう。

だが、それでもあの慟哭が、あの痛みが無駄にすることだけはしたくない。

それに夢の中に逃げこんでやられっぱなしというのは性に合わない。

電車を乗り継いでいってもまだ距離はある。バスも近くまでしか通っているが目的地にたどり着くには走るしかない。

「は、は、は、はあはあ」

息が上がる。体は完全に鍛える前のものだ。そんなところまでリアルらしい。

「あれは……」

ようやく見えてきた。あの辺鄙な廃ビル。周りのビルに埋もれているように見えて妙に存在感がある。

息を整えながら階段を上っていく。目指すは三階だ。

一段一段がとても重い。この後に及んで後悔なんて、自分の情けなさに反吐が出る。

もう決めたのだ立ち止まらないと、

「

事務所へ続く扉を前にして思わず言葉につまる。それはようやく辿りついた達成感からか、それともここまで来てしまったという後悔からか。

ドアノブに手をかける。

「よし」

覚悟を決めて扉をゆっくりと開く。

「ようやく来たな。師を待たせるとはとんでもない弟子がいたものだ」

思ったとおりの人物が思ったとおりのセリフで俺を向い入れた。

「と言っても、もう少しゆっくりしていても構わなかったんだがな。それこそあと何週でも」

「これは夢ですか？」

煙草を噴かしながらそう呟く橙子さんに単刀直入に尋ねる。

「その通りだ。これは私がお前の記憶をもとに作ったお前の観たい夢さ。お前にとっての理想郷といったところか。繰り返すにしても一日でいいとは随分と無欲だな」

「でも所詮は夢は夢。いつかは覚めるものだ。そうでしょ？」

「そうだな。現にお前はここに来た」

「それで、俺はどれくらい寝ていたんだでしょうか？」

俺の体感時間では一日でもさっきの橙子さんの言い方では俺はなんどもこの夢を見ているらしい。

「都合八日程度だな。八週目にしてようやくゴールというわけだな。

まあ

「そこで橙子さんは言葉を切る。そで一呼吸ついてこう告げた。

「起きるかどうかはお前が選ぶんだが」

「選べるんですか」

「ああ」

「だけどそんなものは今更だ。俺の答えは決まっている。だからここに来たのだ。」

「どうすれば覚めるんですか？」

橙子さんは少し微笑むとこういった。

「それでいい。ここまで来て今更寝ていたいなんて言ったら魔物の餌にしていたところだ。実力も精神面も思っていたよりも成長していたらしいな馬鹿弟子。両方確かめるにはこれが一番いいと思ってな。成功だといいいのだが……まあ、これで大抵のことでは動じることもあるまい」

「たしかに俺にとっては一番受かりにくい試験だ。魔物を倒せとか、術式を組めとかよりよっぽど難しい。最難関と言ってもいい。」

「それは解りましたが、脱出方法は
「それは自分で考える」

ですよね。そうじゃないと実力を確かめられない。

「……ふむ」

頭の中にたまった知識に検索をかける。

要は今の俺は幻術の中にいるわけだ。体内に侵入して幻覚を見せている魔力をすべて排除してしまえばいいのだ。

幻術を破る過程で一番難しのは自分が幻術の中にいると気づくことだ。それに気づけばあとは簡単。術式に割り込みをかけて壊してしまえば幻術は解除される。

やり方は覚えている。いや、忘れはすがない。自転車の運転より簡単だ。

やり方さえ覚えれば体の一機能を使うのになんの苦労もない。

「起動（WAKE UP）」

全身を魔力という異物が駆け回る。

そのあとに続くこうとする悪意の波を意思をもって押さえつける。

こいつは今はいらない。

術式一つを侵すのにそこまでの力はいらない。

「走査開始」

空間に感覚を広げていく。ここは俺の幻覚ゆめの中、俺の力を及ぼすのは簡単だ。

「見つけた」

思ったよりも簡単に見つけた。

術式を目の前に発現させる。遠隔操作でできないわけではないが万全を期すなら目の前で操作したほうがいい。

「侵食開始」

魔力を注ぎ込み術式を侵食していく。手馴れたものだ。壊すの変わるのには本当に得意だ。

「見つけたか。あちらの私によるしく」

あちら？ああ、なるほど。

「橙子さんも登場人物ってわけですか」

「パリンと言う音とともに世界が崩れ始める。それも当然か。脳裏をよぎって行くのは数多の思い出。」

どれも美しく大切な思い出だ。そう、覚悟なんて決まっちゃいなかった。たった一日でもこんなに胸がいっぱいなんだ。こんなに未練タラタラだ。

それでも、それでも決めたのだ。必ず復讐を果たすと。なら、後悔も未練も贅沢だ。

だから、先に進もう。

―伽藍の堂・修練所―

閉じた瞼の奥に音が反響している。なんの音かは解らないが大きな音だ。まるで爆発音のような。

「爆発？」

ベルトから飛び起きると音は大きくなった。上から響いてくる。

寝ぼけた頭でも尋常な事態ではないことはわかる。

「何事だ！？」

蛮刀を巻きつけ、外套を着籠み、投げナイフをベルトに挟み込み、戟を持って階段を中段まで駆け上がる。

中段からあとは息を潜めてゆっくりと……

「糞、なんだ！？」

再びの衝撃音。さっきより大きい。

階段を上りきり、扉の前に立つ。明かりが漏れている。電気によ

る明かりではない。雲の間から漏れる月明かりが照らしている。それにかすかに雨の音。ガレキが散乱している。おそらく天井が壊されているのだらう。

「扉の隙間から中を覗き見る。橙子さんは 居た。」

とりあえず怪我はしていない。だが、戦闘態勢だ。足元にはいつか見た鞆が二つ置かれている。

敵がいる。ここに。

威厳ある荘厳な男の声が響いてくる。

「これで解ってもらえたかね。抵抗しても時間の無駄だと。早く彼を差し出したまえ」

「やれやれ、そちらこそいつになったら理解してくれるのかな？私の弟子をお前たちに引き渡す気はないと」

月明かりの向きが変わり、男の顔が照らし出される。

「愚かな。そこまでの技量を持っていても所詮は人間か」

若く端正な顔には全てを見下すような嘲笑を浮かべてられ、全身を闇に溶けるような黒いローブが覆っている。

その声は隠し切れない傲慢さを含み、その嘲るような眼差しと傲慢さを感じさせる口調。

まるで傲慢さ以外の感情が感じられない。

そして、それに見合うほどの高密度の魔力を全身に帯びている。人のなせる業ではない。

「そちらこそ、見下すだけで人間のことを理解できていないな。所詮は人形か。ええ、傲慢？」

人形、傲慢！？

そうか、奴らか。

ここに来た理由などどうでもいい。

あいつが二体目だ。

「ほざいたな。人間風情が」

奴の足元の影が盛り上がり分化していく。一つ一つが槍のように

研ぎ澄まされている。

「殺しはせん。次の貴様にスイッチなどさせん。手足を切り落とす慰みものにしてくれる」

人形は冷酷に死刑を宣言した。

飛び出そうとする体を押さえつける。

機を待て。機を。

橙子さんの使い魔なら奴の一撃を防ぎきれぬ。

だから、待つ。敵の戦闘能力を一撃で奪える機を。無防備になる一瞬。奴が攻撃をする瞬間を。

殺すことはできない。それでも奴に撤退を決心させるほどダメーシを与えなければ。

「行け」

影が走る。それに合わせて駆ける。

強化は一瞬。

扉を蹴破り、真っ直ぐに駆ける。

間合いまで残り二歩。

驚愕に染まる傲慢やっくらが目に入る。

残り一步。

「リバース反転」

黒炎を体に纏う。速度がさらに上がる。

「!?」

言葉を、呪文を発する暇など与えはしない。

そのまま、怨敵の首に向かって渾身の一撃を叩き込んだ。

空の境界編 第十九話 幻想（後書き）

どうも、big bearです。

まずは、お詫びを。

本当にすいませんでした。また一ヶ月間が空いてしまつて。

楽しみにしていただいた方に申し訳ないです。

年末には安定して更新できるはずだと思つたのでよろしくお願ひします。

では、こんなため作者と拙い文章ですがこれからもよろしくお願ひします。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひお送りください。

鮮血が飛び散り、主を失った体が膝からゆっくりと崩れ落ちる。

「っ!?!」

すかさず影が迫り来る。一つ一つがこちらの命を奪い取るには充分過ぎる凶器だ。

「くっ、このお」

影を刃で迎撃しながら後退する。この影はこちらに攻撃するときだけは二次元から三次元に具現化する。

故に、その時ならばこちらからも干渉することができる。

影を叩き落としてつつ倒された机の上を飛び越えて、橙子さんの隣まで撤退する。

反転を解除し橙子さんを見ると怪我はしていない。難なく防いだらしく汗一つかいてない様子は俺に妙な安心感を抱かせた。

「ニヤア!?!」

物陰に隠れていたらしく松風が俺の姿を見つけると駆け寄ってくる。パスが生きることからも生きてるのは分かっていたが、よかった。こちららも怪我はないらしい。

「やっと起きたか。起きて早々悪いがあれを此処から追い出すの手伝ってもらっぞ」

「了解。俺に用があるみたいですね。此処を壊した借りをきっちり菓子折りつけて返してやりますよ」

見ると、奴はもうすでに再生を終えている。蛮刀への炎の付加が間に合っていれば結

果も違つたかもしれないが……

「やつてくれたな。今のは驚いたぞ。しかし、探す手間が省けた。師弟ともども楽に死ぬるなどと思うなよ。私たち（わたし）に血を流させた大罪、貴様らの断末魔の叫びを持って償ってもらおう」

端正な顔を憤怒に歪ませながら、人形はそう宣言した

「ざまあ見ろだ。」

怒らせただけとはいえ一矢報いてやった。

歪んだ達成感に頬がつりあがる。

だが、喜んでいる暇はない。

もう同じ手は通じない。それに此処では一方的に髑り殺しにされるだけだ。

「橙子さん、退きましよう。ここじゃ戦いにもならない」

この狭い事務所では逃げ場がない。あの影の攻撃範囲はこの部屋全体を覆いつくして余りあるはずだ。

「判っているよ。それに私に策がある。耳を貸せ」

橙子さんに耳打ちされた策は俺にとって多大な説得力を持った。

確かに、殺しきれないとはいえその手なら動きをとめることができるはずだ。

「わかりました。任せてください。俺が囷になるのでその隙に下へ」
あの影を見るのは二回目だ。それでわかったことが二つある。

一つは攻撃の際の実体化。そして、あの速度の影なら俺でも十分に迎撃が可能だということだ。

「俺が突っ込むのと同時に攻撃を。その後で注意を引き付けているうちに下へ降りてください」

「任せたぞ」

「はい！」

橙子さんは俺に背中任せるといつてくれたのだ、答えなければ男じやない。

「最後の談笑は終わりかね。末期の祈りはすんだかな。いや、この国ならこう言うのかね。念仏は唱えたか？ さあ、死ぬがいい」

「やるぞ！」

開かれた匣から黒い何か飛び出す。

その瞬間、全速力で駆ける。

影の反応速度を越えてこちらの間合いにやつの懐へともぐりこむ。
「馬鹿が、そんな手が通用すると思っっているのか！」

目の前を影が覆いつくす。避ける隙間のないほどに影の刃が密集し嵐となって迫り来る。

避けられない。いや、避けるつもりもない。

音もなく駆けてきた姿なき味方が影の刃を噛み砕く。

心強いことこの上ない。

「くらえ！」

再び間合いへと踏み込む。

横なぎに振るわれた刃は再び人形を引き裂くはずだった。

「愚かな」

黒い影が刃を弾き返す。当然の結果だ。実体化ができるなら当然それを防御に使うことができるなんてことは予想済みだ。

後ろで足音が聞こえる。橙子さんはもう下へ向かったらしい。後は俺も下に向かうだけだ。

だが、もつと後のことのためにもやつを挑発して冷静さを奪っておかなければならない。

「はああああ！」

さらに一撃。戟をそのまま展開して突き入れる。

すると影はその性質を変える。硬質から軟質へと。まるで粘土のようになつた影に切つ先をからめとられる。

影が腕を掴む前に戟を手放し、その場から素早く飛びのく。

「おのれ。ちょこまかと！」

先ほどまで俺のいた場所に影の槍が突き出す。

「はっ！」

さらにナイフを投擲しそのまま階段に向かって走り出す。

「逃がすか！」

背後から影が迫る。

逃げ切らなければ串刺しにされる。

「、^{リバース}反転」

すべての魔力を足に注ぎ込み、床を踏み砕くつもりで踏み込み加速する。

急激な加速に体が悲鳴を上げる。

そのまま階段に飛び込み、段飛ばしに駆け下りた。

しかし、影は階段を砕きながらさらに追いつがる。

影から逃れるために修練所の中央あたりに逃げる。

「橙子さん！無事ですか？」

先に下りてきているはずの橙子さんを探す。舞い上がった瓦礫の粉塵で視界が利かない。

「ニヤア！」

足元の擦り寄ってくる毛むくじやらの気配とともに師の無事を確信した。

「来るぞ。気を抜くなよ」

いつの間に傍らに来ていた橙子さんに叱咤される。

此処からが本番だ。

さっきまで戦いともいえない戦いは此処で敵を罠にはめるため。

此処での失敗はつまり、俺たち全員の死を意味する。^{ゲームオーバー}

「お前は下がってる。邪魔に　　！？」

そう松風に伝えようとしたその瞬間、轟音ともに天井が崩れ落ちてくる。

敵は階段よりも床をぶち抜いて降りてくることにしたらしい。

松風が踵を返し、物陰に走り出す。利口な奴だ。今は自分が役に立てないことを分かっているらしい。

「　　ふん。もう逃げないのかね。それとも私たちに勝てるつもりでいるのか？愚かな。貴様らの死は揺らぐことはない。そして我らの悲願の成就もまた、確定した事実だ」

「言ってる、くそつたれの人形どもめ。お前らこそ、直ぐに叩き壊

してやるよ。まあ、尻尾を巻いて逃げ出すなら今は見逃してやるぞ」
眼前の敵に向かってあくまで心の中は冷静に、やつらに向かって
嘲りと挑発を繰り返す。

こちらとあちらの戦力差は明らかだ。

橙子さんの策とあちら側の慢心。これらの要素をもってして、よ
うやくこちらの防戦が可能となる。

だが、足りない。もっと奴から思考力を奪わなければ、策は成ら
ない。

「そういうことだ。とつととお引取り願おうか。私はお前らのよう
なものを客として招いた覚えはない。ああ、それと修理費は忘れず
においていってくれよ」

橙子さんも一緒になって挑発を繰り返す。

奴らの感情はもともと分けられた一部の魂の性質にひきづられて
いる。つまり、今この目の前にいる「傲慢」はそれが一番強い本質
だ。奴は自分以外のすべてを見下している。自分より下の存在と見下
している人間に傷をつけられるのも侮辱されるのも絶対に許せない。
それは、俺の反転を解除できるはずなのにそれを行わないことか
らも伺い知れる。おそらくそんな小細工などしなくても俺を叩き潰
せるとたかをくぐつてあるだろう。

だから、子供じみた挑発でも奴には効果がある。俺が一撃入れた
後ならばなおさらだ。

「.....」

もはや言葉を交わす気すらないらしい。挑発が効いているのか？
「っ!？」

途端、足元からの奇襲。

すんでのところでも身をかわし、そのまま反撃としてナイフを投擲
する。

こんなものが効くとは思ってはいないが。

橙子さんとアイコンタクトを交わし、そのままやつに向かって突
撃を敢行する。

「死にに來たか。削れ。」

影がカウンターのようになり来る。あの時と同じ切るのではなく、ヤスリのように肉を削り取る黒い削岩機。

それを

「くっ、はああああ!!」

潜り抜ける。

左へ、右へ。速く、遅く。

動きに緩急をつけ、左右に駆ける。

体が悲鳴を上げる。

悪意の侵食による精神の過負荷。そして、限界を超えての筋力、瞬発力の強化による体への過負荷。

だが、此処で悲鳴を上げる訳にはいかない。

これまでの訓練が無駄ではなかったことの証明のために。奴に勝つために。

「どうした？人間一人仕留められないのか？そんななら、まだどこぞの殺人鬼の方がましだぞ」

挑発し、注意をひきつける。命を掛けるおのれに時間を稼ぐ。

「死ね」

それは当然の結果だ。

人と死徒では能力が違いすぎる

壁際に追い詰められ、影に八方を囲まれる。

逃げ場などない。

逃れられない死。

終わりが迫る。

奴の顔が必殺の予感に歪む。このまま俺を髑髏にする気だろう。
「リバーズ、エンチャント
反転、付加」

掛かった!

刃が黒炎を纏う。呪いの炎が悪意と憎悪を糧に燃え上がる。

蛮刀を振り下ろす。

影を切り裂き、黒炎が轟々と燃え上がる。

今まで弾かれるだけでしかなかった影を破壊され、奴の顔が今度は驚愕に歪む。

「き、貴様！そこまで　　！？」

影を引き裂き、押し進む。

太ももを影が掠める。頭の直ぐ横を影が通る。

背筋に死の予感を感じる。生存本能が逃げると叫ぶ。

それでも、止まらない。止まらない。

止まれば負けだ。

あと、三步。

前方の黒い壁を焼き払う。

あと、二歩。

左から迫る迎撃。

防御は間に合わない。

脳内で光景がスローモーションになる。

押しせる脅威を左手で掴み取る。

「　　ぐ、あああああああ！！！」

左手の肉をこそぎとられながら、影を引っ掴む。

左手から影へと、呪いが伝染していく。

そのまま、踏み込む。

あと一歩！

蛮刀を片手で突き出す。

「おのれ！猪口才なあ！！！」

尚も影は形を変える。さすがは、死徒。こちらの最高速に易々と対応される。

影の壁はこれまでより強固に、より柔軟に変質する。

だが

「はあああああああ！！！」

黒い刃が影を砕く。

呪いの劫火は影すら残さず万象を焼き尽くす。

影が晴れ、敵を視界に再び捉える。

「くっ貴様!？」

下から突き出した影に、右手の蛮刀を弾き飛ばされる。拾っている暇はない。

こぶしを握りこみ、おもっいきり踏み込む。

瞬間、右腕に全魔力を注ぎ込む。

右腕の筋肉が弓の弦のように引き絞られる。

そのまま、勢いに任せて、奴の胸元に拳を振りぬく!!

「くっがあ!？」

辿り着いた。

骨の碎ける音がする。砕けたのは奴の肋骨か、俺の拳か。おそろくはその両方だろう。

奴が派手に吹き飛ば。ざまあみろ。余裕こいてるからそうなるんだ。

だが、こんな結果には何の意味もない。

次の瞬間にはやつのは言え、満身創痍の俺は鬨り殺しにされる。そう、俺一人ならば。

「なっこれは!？」

後方から見えざる魔手が、『傲慢』の体に巻きつく。

「私を忘れて、二人で盛り上がってもらっては困るな」

奴を引き込む、魔物の後ろで橙子さんがニヤリと笑う。

「じゃあ、締めは頼みますよ。橙子さん」

「任された。ご苦労さん。そこで休んでろ、直ぐに終わる」

「これは!？私たち(わたし)を喰らう気か!！」

影が不定形の魔物に向けて殺到する。はずだった。

「なっ何だと!」

炎が影を余さず焼き尽くす。俺が触った場所、切りつけた場所から炎が侵食している。

「こいつは無意味にお前に対して突撃したわけではないということさ。お前の影を無効化するため。そして、お前の思考を鈍らせるため。冷静だったならこの程度の策を見抜くのは簡単だったはずだ。

修理費を請求できないのは残念だが、反省会はそいつの胃袋の中でやってくれ」

俺たちが建てた作戦は俺が時間を稼ぎ、チャンスを作り、橙子さんの使い魔で止めを刺すという至極簡単な、粗末といえるようなものだった。

だが、奴の特性とは最高にかみ合った作戦だった。

「貴様ら！この私にいい！！」

抵抗むなく奴の下半身はすでに食い尽くされている。最早手遅れだ。

体が再生する端から食い尽くされるのは途方もない苦痛だろう。

「許さん！必ず、貴様らを」

ピシヤリという音ともに、言葉が途絶える。

続いて、グシヤリという生理的嫌悪感を催す咀嚼音。

「なんとか片付きましたね」

反転を解除し、全身の軽傷と左手の止血を開始する。

「これで時間を稼げるはずだ。とにかく、とっとと逃げるぞ」

いくら奴でもあそこから抜け出す方法はあの転移魔術しかない。そしてここに他のやつ等はいない。となると此処に戻ってくるには時間が掛かる。今のうちに此処から逃げるのが上策だ。

「はい、逃げましょ　　！？」

ドカンという腹のそこに響くような衝撃音。

そして、背筋が縮み上がるような禍々しい魔力。

「これは……」

橙子さんの驚嘆とともに鞆の蓋がはじけるように開く。途端、影の巨碗が噴出する。続いて天井に届くほどの影の巨人の上半身が現れる。

「！！」

地響きのような叫び声と共に影の巨人が立ちがる。

そして、巨人の中から『傲慢』が降り立つ。

その総身には一切の傷はない。その顔には再び嘲笑が浮かべられている。

「くそ！！」

どうしてこんなことに！？

どうすればいい。どうすればいい……

「見誤っていたのはこちらも同じだったらしいな」
などと橙子さんは余裕の体だ。

逃げようにも絶対に同じ手は通じない。

他の手はないか。他の手は

「すばらしい策だった。只の死徒なら確実に消滅していた。見縊っていたのは認めよう。確かに貴様らは一流魔術師だ。今をもってわれが敵として認めよう。残念だよ。その小僧の適応能力と蒼崎に連なる当代最高の人形師。これほどの才を潰さねばならないのは同じ魔術師として、とても、とても残念だ。しかし、我らが悲願の成就のため。そして、わが身を辱めた非礼を償わせるためにも、敵は叩き潰さねばならないからなあ！！」
ゆっくりと巨人の腕が、死をもたらず極大の大鉞が振り上げられる。

今度こそ逃げ場がない。

避けられない。

防げない。

潰される。

ここで殺され

「！？」

驚愕は一人のものではなかった。

突如、前方に現れた巨大な魔力の渦。

この魔力は感じたことがある。

そうあの時、小川マンションで見たやつらの転移と同じだ。

影の巨人が内部から破裂する。

完全に術式を把握していなければここまで干渉はできないだろう。

「あらあら、ずいぶんとつまらない事をしてくれるわねえ。ねえ」
わたし』？」

そうして、運命のめぐり合わせにより俺たちにとって最もありえないはずの、そしてもっと忌むべき援軍が現れた。

空の境界編 第二十話 運命 前編（後書き）

どうも、big bearです

また遅くなつてすいません。おまけに前後編・・・・・・・・。まためる力なさすぎですね、わたし。

今年中には空の境界編は終わるはずです・・・・・・・・たぶん。

いや、絶対後半は年内に出します。正月の間に次章の一章くらいまでいけるかもしれません。

では、こんなため作者と拙い文章ですがどうかこれからも暖かい目でよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひぜひお送りください。

「こんばんわ、忠志。わたしのプレゼントは気に入ってくれたよね」

相も変わらずその端正な顔には満面の笑みが浮かべられている。

「何をしにきた！わたしの邪魔をするつもりか！『狂喜』」

「どうして、お前が」

「いい驚きっぷりね。タイミングを見計らっていた甲斐があったわあ。と、言っても彼女はそうでもないようだけど」

そう言っただけで人形は橙子さんに笑いかける。

「ということは、橙子さんは『狂喜』が此処に来ると予想できていたということか。」

だが、どうして？

「この襲撃がその『傲慢』の独断であることは予想がついたからな。でなければ貴様のシナリオにしてはあまりにも雑だ。ここで忠志が殺されてバットエンドでは安易過ぎる」

橙子さんは煙草を吹かしながら、さも詰まらなそうにそう答える。

「ええ、そうよ。その通り。此処で彼が死ぬなんて あまりもつまらない。それじゃあ只の駄作よ。それを」

そう呟き、ゆっくりと狂喜は傲慢に向かって笑いかける。笑顔が浮かべているというのに全身からあふれ出す気配と魔力は背筋が凍えるほどの怒りと殺意を湛えている。

「随分と詰まらない事をしてくれたわね。しかも、わたしの留守の間に」

「ふん、何をほざくかと思えば、そんなくだらない理由でわたしの

邪魔をしたのか。奴の成長が早すぎる。判っているのか？このまま放置すれば、こやつ等はわたしたちの計画の障害になりうる。不安定要素はすべて取り除くという点では貴様も同意したはずだぞ。それを覆すというのか？しかも・・・そんな理由で」

相対する『傲慢』も然る者。自身に向けられる殺意もどこ吹く風に自身も憤懣やるかたないといった様子だ。

一触即発。次の瞬間には自身に攻撃をしかけそうなほどの緊迫感。次に動くとなればそれは紛れもなくそれは殺意のこもった一撃だろう。

「橙子さん。今のうちに逃げましょう。よくわかりませんが、同士討ちしてくれるなら万々歳です」

今がチャンスだ。此处を逃せば逃げられない。

だというのに橙子さんは動こうとしない。

「橙子さん！」

「まあ、まで。もう少し様子を見てからでも遅くは

まだ来るのか」

「！？」

「あらあら」

「、何？」

再び渦巻く魔力。先程と同じ転移の魔力。つまりは、もう一体ここに人形が来る。

「気分はどう？『情熱』わたし」

そうして影の中から新たに一体、災厄を司る人形が現れた。

「どうしたのかしらあ？その腕は。どうやら復元できていないように見えるけれど、それにお腹に何か刺さってるわよ」

「黙れ！誰のせいであたしがこんなことになったと思っているのよ

！！」

新たに現れた情熱と呼ばれる人形の容姿は、火のように真っ赤な赤毛の長髪、体つきは女性というより少女に近い。顔立ちはほかの人形たちと同じく端正だが受ける印象は美しいというよりは可憐さだ。服装もほかの人形たちのように魔術師然とした物ではなく、そこらへんの女子高生が着ているようなミニスカートにブラウス。顔の印象も相俟って充分、美少女といえるだろう。

だが、今の状態ではそれもかすんで見えるだろう。

満身創痍。

そう表すのが最も適格だろう。右腕は欠損し、全身には大小の切り傷。さらに腹部には歪な形の剣が三本突き刺さっている。塚の部分が異様に短く、見ようによっては十字架に見えるだろう。投擲用の剣だろうか。

「わたしのせい？それはどうしてかしらあ？」

「あんたはあの時あたしたちの前で器自体はたいした能力を持たない只の人間だって言ったはずよね」

「ええ。確かにそうだったわ」

「嘘を吐きやがって！あれのどこが只の人間の能力よ！！捕獲は容易！？ふざけんじやないわよ！

それにあの代行者、あたしたちが日本にすることを事前に知っていたような口ぶりだったわ。どういうことでしょうね。

説明はしてもらえないでしょうね、『狂喜』！」

怒気を撒き散らし、まくし立てるように叫びだす。剣が引き抜かれた腹の傷と、全身の切り傷はもうすでに癒えている。

だというのに、欠けた右腕は修復の兆しすら見えない。いや、出血すらしていない。まるで、その部位だけ壊死したように。

まさか、あの右腕を切り落としたのは

「嘘を吐いたとは心外ね、それはわたしの役割ではないわあ。聞かれなかったから答えたかっただけよあ。それに代行者についてはわたしは何も知らないわあ」

「なつ、そんな屁理屈を」

水掛け論は続いていく。あちらは自分たちのことで忙しいらしい。

奴らの内輪もめ何ぞどうでもいい。それよりも……

「橙子さん。奴ら、まさか……」

「式を捕まえようとして返り討ちにあつたところだろうな。

あんな真似をできるのは式くらいだろう。奴ら荒耶と同じ手を使う気か？それよりも問題は代行者だな。まったくどれだけ面倒が増えるんだ。次は守護者でも現れるのか」

確かに状況は混沌の極みだ。冷静でいられるのが奇跡のようなものだ。

でも、此処から逃げないことには式さんの安否も俺たちの安全も確保できない。

「そうそう。わたしがここにきた理由はあなたたち（わたしたち）を止める事だけではないのだったわあ。

薔薇の予言が詠まれた。当然、わたしたちに向けてよ」

「はあ！？」

「なんだと！それは虚言ではあるまいな？」

「ええ。こんなことで嘘は吐かないわ。十年以内で尽きるらしいわよ、私達の寿命。しかもこの国で」

薔薇の予言？十年以内？寿命？一体どういうことだ？

「クツハハハハハハハハハハハハ」

「そうか！そうか！十年か！そして日本か！素晴らしい。本当に素晴らしい！！」

いきなり傲慢が笑い出す。先程までの怒気は消えうせ、狂ったように、勝ち誇ったように笑い続ける。

「つまり、計画は順調に動いているということが。真に重畳だ。だが、そうなる」と

「ええ。だからあなたのやっтерことは無駄よ。殊更に予定を変更する必要はないというのだから。」

彼が此処で死ねば大幅な計画の修正が必用となるわあ。十年以内と確定した以上は間に合わなくなる可能性が高い。それでも一時の怒りのために彼をころすう？それこそ不確定要素よねえ。器の事だつてそうよ、まだ手出すには速いわあ。それに聖堂教会とやりあうつもりはこつちにはないわけだし」

俺を殺すことが奴らにとって障害になる？計画？

訳がわからない。

そんなことより、斬りかかりたい。

殺してやりたい。

三体もそろつているんだ全員まとめて八つ裂きにしてやりたい。

だが、憎悪に任せて切りかかっても事態を悪化させるだけ。

歯を食いしばり自分を抑える。

耐える。

あと少しで良い。

「業腹だが貴様の言い分が今回は正しい予言が読まれ結末が確定した以上、もはや筋書きに干渉する必要はない。 □

惜しいが、退くぞ、『情熱』」

影の魔力が渦巻き、扉を形作っていく。

とりあえず、退いてくれるらしい。

「んな事納得できるわけないじゃない！あんたらは無傷かもしれないけどね、あたしはこんな目にあつて泣き寝入りしろつて言うわけ！？」

そういつて情熱は一人激昂する。確かにほかの二人に比べてその様子は痛々しい。

「そうよ。たかが人間にここまでやられて我慢できるわけないじゃない。せめてあの代行者とそこの魔術師くらいなら、殺しても

ヒッ！

情熱が悲鳴を上げる。

首元には白く長い指が掛けられている。その指は、首の柔らかい肉をしつかりと締め付けている。

「話を聞いていなかったのかしらあ？これ以上の干渉は不要よお。只でさえ余計なことをしてただだからあ。これ以上わたしを怒らせないでねえ。あのときみたいになりたくはないでしょうう」

警告するように指先から影が伸びる。そこには明確な殺意がこめられているのが見て取れる。

「アツガ、ゲエ。ぐつつ分か、ったから、はなし、て。あん、たの言うと、おりにするから」

「それでいいのよお」

首絞めを解かれ、ゲホゲホと咳き込みながら情熱は恨めしげに狂喜を一瞥すると悪態を吐いた。

「畜生。こんな屈辱、許せるもんか。必ずあいつらが無茶苦茶に引き裂いてやる」

明確な殺意を持ってきつと情熱がこちらをにらみつけてくる。それを何事もないようにこちらは笑みを返す。やれるものなら、やってみると嘲るような、見下すような笑みを。

「落ち着け。今は貴様治療が専決だ。このままでは我々にもダメージが伝染しかねん。何、機会は与えてやる。雪辱は晴らせねばならんからな」

「あんたがそう言うなら……」

そう呟きながら、納得し切れていない様子で、情熱は影の中に消え去っていく。

「次の邂逅が貴様らの最後だ。それまで貴様らの命がわたしの匙加減一つでどうにでもなることを努努忘れるな」

続いて、傲慢がそう捨て台詞を残して影のベールの向こうへと消えていく。

「じゃあ、さようなら。もう少しお話ししたいのは山々だけど……」

「……またの機会にさせてもらうわあ。それまでお元気で」
今度はそう言い残し、影の中へと足を進める。好き放題、やるだけやってこのまま消えるつもりか。

「待て！」

そんな事、納得できるか。

「なにかしらあ？」

狂喜はさもうれしそうに、満面の笑みで振り返る。

「必ずだ！必ず今よりもっと強くなってお前らをぶっ壊してやる！
！それまで全員首を洗って待っている！！」

吠え掛かる。こんなもの只の負け惜しみに過ぎない。それでも叫ばずにはいられない。

やられっぱなしは性に合わない。

「くっは、あはははははははははは。そうよ、それでこそよ！
そうでなければ詰まらない。ええ、楽しみにしているわ。私を殺して
見せなさい！！」

そんな笑い声だけを残して、狂喜は影の中に去っていく。

「はっはあ」

おわっ、たのか？

拍子抜けと疲労感でしゃがみこむ。無理な強化の反動がいまさら
戻ってきたらしい。

幕切れは余りにもあっさりとしている。

「うん？」

手元にざらりとした感覚。松風も事態の消息を理解したらしくも
の影から出てきたらしい。

ひと撫でしてあたりを見回す。随分とひどい有様だ。まるで爆心
地だ。

「しまった。完全に忘れてた」

「なにをですか！？怪我でも」

「いや、なに、修理費を請求するのを忘れていた」

「あれ挑発してたんじゃなかったんですか？まさか本気で」

「半分挑発、半分本気だ。派手に壊してくれたからな修理費が嵩み
そうだ」

「は、はは」

図太いというべきなのか、豪胆というべきなのか。

「とにかく、片付けは後だな。刀崎、お前は
足に気合を入れて立ち上がる。へたりこんでいる場合じゃあない。
「よし、式さんを探しに行きましょう。命は無事みたいですけど、
代行者のこともありますし、怪我をしてるかもしれないですし、ね
え橙子さん？」

橙子さんは呆れたような顔を見ると、一つ大きなため息をして俺
が同行するのを許可してくれた。

空の境界編 第二十話 運命 中編（後書き）

どうも、big bearです

気付いたら、前後編でなく中編までできてました。

催眠術とかそんなちやちなものじゃねえ。もっとおそろ（ry
では、こんなため作者と拙い文章ですが、どうかこれからも暖かい
目でよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひぜひ
お書き込みください。

空の境界編 第二十話 運命 後編

―港・倉庫街―

車を降りると冷えた海風が頬を掠めた。体にしみこむような冷たい雨。応急手当でしただけの傷がじくじくと熱を発する。

「ここですか」

「ああ、間違いない。あそこに見える一番でかい倉庫だ。もうケリがついてるはずだが。例の代行者の件がある。気を抜くな」

「はい」

倉庫に向かって歩き出す。事前の打ち合わせ通りに先鋒として俺が危険を探り、橙子さんが後ろから援護する。

倉庫にむかひながら車で聞いた俺が寝てる間の出来事について思い返す。

俺が眠った後、式さんは行方不明になったらしい。あの通り魔、いや殺人鬼を追って。しかもそいつは式さんと幹也さんの知り合いだった。そして今日、その居場所を掴み式さんがこの倉庫に突入。それを追って幹也さんも此処に向かい、橙子さんがそれを見送った次の瞬間、事務所に襲撃があった。

「ここだな」

そうこうしているうちに、目的地にたどり着く。

さびた鉄の扉がわずかに開いている。

その隙間から中に入り込み、目に飛び込んできた景色に言葉を失う。

「何だ、これ」

まるで湿地帯のアマゾンを思わせるような風景。

五メートルを超える草が乱立し、床には土が敷き詰められている。

その間に僅かにコンクリートで舗装された道のようなものが見える。草を掻き分けつつ、先へと進む。

突然、殺気を感じ身を翻す。頬を何かがかすめて、そのまま背後の壁に突き刺さる。途端、ドカンという轟音が木霊する。

「なっ!?!」

突き刺さったというのは語弊が有った。正確には投擲された剣は壁にめり込んだのだ。

続いて、さらに数本、同じ形の剣が飛来する。

弾くことはできない。あの威力では触れることすらご法度だ。

「シッ、!くつこのお!!」

殺気の方に反撃とばかりに、ナイフを投擲。簡単に避けられる。だが、居場所は読めた。

なけなしの魔力で体を強化して駆ける。

「はあああ!!」

右腕で蛮刀を振るう。

「む、ふん!!」

先程の剣で弾かれる。だが、敵の武装はあれだけの筈。つまりは接近戦ならこつちが有利だ。

「ハッ、!!」

攻め手を休めない。一気呵成に切りかかる。

「ほう、おもしろい」

だというのに相手は視線に敵意はなく、感心したような声まで聞け得るほど余裕の構えだ。暗がりと草で敵の姿がはつきりと視認できない。声と動きから恐らく男だ。そして相当な使い手であることはわかる。

「くつこのお!!」

右腕が使えないのが悔やまれる。攻めきれない。

「しまっ!?!」

焦りから大振りになった一撃を簡単に受け流される。

そのまま、こちらの懐に敵が踏み込んでくる。だが、あの剣の間

合いではない、一体なにを？

そのまま流れるように拳が迫る。それが届く、その直前、横合いから疾走してきた影に体をつき飛ばされる。

「痛、て何だ!？」

無様に地面を転がり、息を吐く。目の前に俺を守るように影絵の猫が降り立つ。

「橙子さん!」

素早く起き上がり、一気に距離を離す。さっきの動きは恐らく、中国拳法の八極拳。

「助かりました、橙子さん。それにしても、神父の癖に中国拳法かよ」

腹立ち紛れにそう言い捨てる。見事に不意を突かれた。予想すらしていなかった。

「無事のような」

遅れて倉庫の中に入ってきた橙子さんの横に駆け寄る。

窓からの光で敵の姿が映し出される。

鍛えられた瘦身はこちらに不可思議な威圧感を与える。身に纏っ

た僧衣は、これ以上なくその人物にはまっている。

「なるほど。人間の魔術師だったか」

構えを崩して、戦闘体制を解除しているというのにその動きや呼吸には歴戦の戦士としての実力を感じさせる。

そして、突拍子もないことだが、俺はこの人物に対して初対面だというのに自身を見てるような親近感を感じた。

「そういうことさ。私たちは身内を引き取りに来ただけだ。代行者、貴様の目的は人形たちのはず。無闇に殺し合いをする必要あるまい」

「確かにそうだな。私が教会から命じられた任は、この事態の調査。それにもともと管轄外のこの地の出来事に深く関わるつもりはない。確かに戦う必要がない。では、問おう、魔術師。貴様らの身内というのはこの先にいる少女と青年のことかね？」

「てめえ、二人になにかしたなら……」

「だとしたら、どうするね？」

刃を構えることで無言の返答を示す。

「ふ、青いな。安心したまえ。これでも聖職者なのでね。特異な目を持つているようだったが、怪我人を放置しておくわけにはいかなのでね、治療はしておいた。じき、目を覚ますであろう」

「治療のことは礼を言おう、代行者。しかし、こちらは魔術師、こちらは代行者。所詮は相容れないものだ。悪いが此処から消えてもらおうか」

橙子さんは悪魔で強気だ。確かに、本当に治療したかどうかもわからないし、背中を向けて後ろから刺されたらたまったもんじゃない。

「随分な言い草だな、魔術師。まあいい、そちらの要求を呑み、此処は退くでしょう。だが、一つ聞かせてもらおう」

「何だ？」

「君にはないよ、魔術師。そちらの少年にだ。少年、それをどこで手に入れた？」

それ？

一体なんのことをいつているんだ？

俺の無言に神父はにやりと笑う。悩む俺がおかしくて仕方がないらしい。

「では、質問を変えよう。聖杯戦争という言葉に聞き覚えはないかね？」

「知らない、そんなものは」

そうか、と、隠し切れない笑いをもらしながら、神父は出口に向かって歩き出す。

「待てよ。いったい何だつてんだ。意味がわからんぞ」

「いや、興味が湧いただけさ。いずれ君と私は再び見えることになるだろうさ」

そう意味深な言葉を残して、聖堂教会の神父は去って行った。

「去ったか。目的を忘れるな、いくぞ、刀崎」

「あっ、はい」

だが、どうにも俺は最後の言葉が頭の隅に引っかかっていた。

それから進むと、一際広い場所に出た。

まず、目に入るのは大量の血とばらばらになった死体。あの鬘の様な金髪は件の殺人鬼だ。

そして、抉れた壁や砕けたガラス。おそらくここで奴らの襲撃を受けたのだろう。

「あれは!?!」

居た、見つけた。

二人は中央あたりに倒れていた。

すぐさま駆け寄り、脈を図る。

「よかった」

息もある。脈拍にも異常はない。だが、二人とも服に付いた血の後が痛々しい。さらに式さんは左手の親指がなく、幹也さんの左目の傷も深くもう見えないだろう。恐らく奴らのせいだ。式さんにこんな傷をつけられるのは奴らくらいだろう。

俺のせいだと、自分を罵りたい気持ちに駆られるが、そんな贅沢は後にとって置こう。

しかし、出血は止まっている。あの神父、本当に治療してくれていたらしい。

「橙子さん！見つけました！早く!!!」

別の場所を探していた橙子さんと呼ぶ。俺では細かい異常は判ら

ない上に、一人では二人を運べない。

とりあえず、俺は幹也さんのほうを担当、そう思い背負おうとしたそのとき、幹也さんは目を覚ました。

「う、ううん、あれ忠志、君か？どうして、ここに？」

「どうやら意識が覚醒しきっていないらしく、目は虚ろだ。」

「助けに来ました、遅くなってすいません。もう安心して寝ててください」

「式は？」

「大丈夫です。直に橙子さんも来ます」

「そうか、式は無事か。それなら」

また、気絶してしまった。式さんが無事だと知って安心したのかもしれない。

「ここか。しかし、また派手に暴れたな。まったく、奴らは面倒事を増やしてくれるな」

「橙子さん、式さんをお願いします。俺は幹也さんを」

「ああ、承知した」

二人を背負い、歩き出す。ここにはもう用はない。

一カ月後 焼肉・大帝都

事務所の襲撃と殺人鬼の一件から一ヶ月が経過した。

だが、この一ヶ月間、何もなかったかというところでもない。一週間掛からず回復した式さんがいまだ入院している幹也さんの見舞いをしようとして、それを止めようとする鮮花さんの口論に仲裁に入ろうとした俺が両者の攻撃によりノックダウンとか、事務所の修理中に、綻んだ結界から飛び出した悪霊を退治したり、どこからか

俺が倫敦に行くことを知った式さんに卒業試験と称したストレス発散につき合わされて死に掛けたりしていた。さらに、毎日魔術の鍛錬と英語の勉強。正直休んでなんかいられなかった。

そして、今日、ようやく幹也さんが退院して、鮮花さんの提案でその退院祝いと俺の卒業祝いを兼ねてここ焼肉・大帝都来ている。

「みんな、今日は奢りだから好きに頼んでいいわよ」

眼鏡をかけ、性格をスイッチした橙子さんがそう宣言する。

「どうして、俺まで」

「いいじゃないか式。偶にはさ。それにこれは式の退院祝いも兼ねてるんだから」

幹也さんが連れてきたのだろう、珍しいことに仏頂面ながら式さんも居る。

「兄さん！式なんて放って置けばいいんですよ！！式もどうでもい
いなら帰ったらどうですか？」

早速、鮮花さんが噛み付く。

「気が変わった。すいません、これください」
式さんが返す。

「大体あなたは」

間に挟まれて困り顔の幹也さんには悪いが、やはりこの二人のやり取りは見ていて飽きない。

この人たちにはいつまでもこうあってほしい。そう願う。

物事は変わっていくものだ。しかし、目の前のきれいな、大事な風景おもいでに変わってほしくないと願うのは罪ではないはずだ。

「た、忠志君。きみは何か頼まないのかい？」

困り果てた幹也さんが俺に話題を振ってくる。そろそろ可愛そうだし、助けてあげよう。

「そうですね、俺は」

「忠志君。君はこっち」

橙子さんが俺を呼ぶ。席が空いていなかったため隣同士に四人席と二人席を取っているが、橙子さんは二人席の方に座っていた。

「何ですか？」

幹也さんには悪いが呼ばれた以上、行かねばならない。

「少し手伝ってほしいことがあるのよ。いいかしら？」

橙子さんが俺に何かを頼むなんて珍しい。

そして、師の頼み。断るわけには行かない。

「任せてください。たとえどんなことでも不肖、刀崎忠志。やり遂げて見せます」

そして俺はこの後、誰の頼みでも安請け合いするものではないということ学ぶのであった

「そう、ありがとう。頼もしいわ。あれを見てくれる」

そうして橙子さんは店の壁を指差す。どうやら歴代の大食い記録保持者の名前が掲示されているらしい。

「えっと、あれに挑戦しろってことですか？」

「違うわ。あっちの方、ペアの方を見て」

ペアの方？

ああ、あの横に掲示してある方のことか。ために一位の名前を見てもみよう。

一位『蒼崎橙子・蒼崎青子』

え？

見間違いではないらしい。名前の表記も、下に書かれた恐ろしい記録も。

「え、と、橙子さんと一緒にあれに挑戦しろってことですか」

「そうだ」

「蒼崎青子さんって」

「私の愚妹だ。あれの名前があそこにあるのは我慢ならん。引きずりおろすのを手伝え」

口調が戻ってます、橙子さん。

それにしてもあの数字。当時のここの店員は俺たちとじゃ数の数

え方が違うじゃないかと疑いたくなるような数字だ。

あの数を二人で食べたのか。

正直言って、超逃げたいが引き受けた以上やり遂げねば、男が廢る。

「よろしくお願いします」

覚悟を決めて座席に座る。さあ、戦いの始まりだ。

結果として、俺と橙子さんはこの激闘を制した。

一位 蒼崎橙子・刀崎忠志

戦利品はこう刻まれたネームプレートと吐き気と虚無感、そして皿の山を見て引きつった店員の顔だった。

いや、もう一つあった。店側が世紀の記録の記念と撮った全員での唯一の集合写真。

中央には、ダウン寸前の俺が力なく笑い、その横ではタバコをふかす橙子さん。心なしか上機嫌に見える。後ろには幹也さんが困った笑顔で立っている。その右隣には鮮花さんが笑顔を浮かべて寄り添うように立ち、左隣には式さんが映っている。幹也さんの隣で不本意な写真撮影に怒っているように見えるが、口元がすこし微笑んでいる。

そんな、てんではばらばらな集合写真。だけど、其のバラバラでも何処か纏まっている所がこの人たちと俺らしい写真なのかもしれない。

五日後

―伽藍の堂・事務所―

「これで全部か。案外少なく纏まったな」

俺の荷物を見て橙子さんがそう感想を漏らす。

トランク一つ。それだけで俺の荷物は済んでしまった。あとは松風をペット用の籠に入れたしもう荷物は無い。確かに少ないかもしれない。

「まあ、こんなものですよ。服とかはあっちで買えばいいですし」

「それにしても、忠志君が倫敦に行くなんてなあ。この事務所の男は、また僕一人になっちゃうのか。淋しくなるなあ」

そう幹也さんが愚痴る。

そうだ。今日が倫敦への出発の日。恐らく、この場所も今日で見納めだ。

感慨深く部屋を眺める。短い間だったが本当に濃い時間をここで過ごした。

「それにしても倫敦か。一応、姉弟子なのに完全に追い越されちゃったな私」

続いて鮮花さんが呟く。

実際、そんなこと無いんだがなあ。

「鮮花。こいつは魔術師として時計塔に招かれていくんじゃないぞ。万年人手不足の部署に頼み込んで就職するんだ。そういうもんじゃないさ」

確かに執行者ほとんど傭兵みたいなものだ。給料は良いらしいが、常に死と隣りあわせの憎まれ役だ。

だからこそ、俺はそれに成らなければならないのだが。

だけど、倫敦に行く前にやらなければならないことがある。

「式さん、幹也さん。奴らに襲われたのは俺のせいです。本当にすいませんでした」

謝っておかなければならない。

俺のせいではなくても良い怪我をさせてしまった。

悔やんでも悔やみきれない。

「忠志君、気にしないでくれ。君がいなくても僕たちは、式は襲われていたかもしれない。逆に君が居たことで式を狙ってるやつらがまだ居るってことが分かったんだ。これで対策を立てられる、だから、君が謝ることじゃない」

「どつちにしる目をつけていただろうしな。この前のやつみたい而降りかかる火の粉は払うだけさ。それに悪いと思ってるならとつとと、あの胸糞悪い連中を始末しろ」

これからも式さんは狙われることになるだろう。

それでも気にしないと行ってくれた二人のためにも式さんの言うとおり、奴等を一日でも早く倒すことが俺にできる恩返しなのだろう。

「ありがとうございます、幹也さん、式さん。本当にお世話になりました」

決意を新たににして、二人に頭を下げる。

「鮮花さんもありがとうございました」

「いえ、私は何もしてないですよ。倫敦でもがんばってくださいね。そんなことはない。彼女という姉弟子が居なければ俺はここまで成長できなかったはずだ。」

「はい、頑張ります」

最後に所長席に向き直る。

「橙子さん。今まで本当にありがとうございます。橙子さんは俺にとつて最高の師匠でした。それに橙子さんがいなかったら俺きつと何も知らないまま死んでました。命の恩人です。救ってもらった命、絶対無駄にはしません。必ず恩は返します」

橙子さんは少し驚いたような顔をして、こう答えた。

「私の弟子なんだ、必ずやり遂げる」

「はい！」

「自信を持って。お前の運命は随分と数奇だ。成し遂げる日が来るやもしれん。其の日まで以後悔だけはしないようにしろ」

「わかりました、肝に銘じておきます」

「それと、これは私からの饞別だ。どうしても私の助けがほしいときはそれを開ける良いな？」

橙子さんから、封筒を受け取る。何の変哲も無い封筒だ。だが、きつと俺の危機を救う事になるだろう。

「そして、これだ」

橙子さんが取り出したもの、それはアルバムだった。

ただのアルバムではない。そうだこれは俺の

橙子さん。これ………」

言葉に詰まる。声が出ない。

「お前の家から持ってきた物だ。お前は必要ないといっていたが、まあ一つくらい持っていても罰は当たるまい」

うれしいサプライズといえるだろう。

ページをめくり、写真を眺める。

目じりが熱くなる。心が震える。

「まあ、少し写真をたしてあるが」

橙子さんの言うとおり、自身の記憶にないページにも写真がはさまっている。いったい何の写真だろうか？

「これは………」

あのときの集合写真が、今まで空白だったページにはさまっている。

言い知れない感動が湧き上がる。

また、思い出が増えるなんて思ってもいなかった。

「本当になにからなにまでありがとうございます。大事にします」

橙子さんに再び頭を下げる。助けてもらってばかりだ。俺からはほとんど何も返せちゃいない。

いつか必ず、恩返しをしよう。

「そろそろ時間か。行け、間に合わなくなるぞ」

時計を見る。確かに時間はあまり残っていない。そろそろ出発しなければならぬ。

まだ、言つべきこともたくさんある。だけど、以上は無粋である。
う。

荷物を持ち、扉に向けてゆっくりと歩き出す。

一歩、一歩が感慨深く胸に残る。

背後から、別れの言葉が聞こえてくる。

「じゃあ、さようなら。元気でね忠志君」

「あばよ」

「もし、倫敦に行くことになったらよろしく頼みますね。忠志さん」

「さようなら、刀崎。縁があつたらまたどこかで」

別れにしみつたれた顔ではつまらない。

「はい、それじゃあ、みなさん。行ってきます」

そう、笑顔で告げて、扉を開け放つ。

己の運命を進むために。

空の境界編 第二十話 運命 後編（後書き）

どうも、big bearです

今回で空の境界編終了です。予定では十五話で終わっていたはずなのに長くなってしまいました。しかし、最後の最後でこの展開・・・
・クリスマスプレゼントは文才にするべきでした。

ですが、読者の皆様のおかげで拙いながらも、ここまでこれました。では、こんなだめ作者と拙い文章ですが、どうかこれからも暖かい目でもよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひぜひお書き込みください。

倫敦編 第一話 出会い

イギリス南部の地方都市、メイフィールドはどこをとっても平凡な街だった。

とりわけ有名な観光地があるわけでもなく、大きな産業があるわけでもない。ゆえに街に若者が残るはずも無く、街は高齢化の一途をたどっていた。

そんな何処にでもあるような典型的な地方都市が、一躍三流タブロイド誌の三面記事から、全国紙の一面にまで躍り出たのは、肌に突き刺さるような寒気が訪れた十月中旬頃だった。

『地方都市の恐怖 連続する失踪事件の真相は魔女の呪い!?!?』
そう銘打たれた記事は誰の目に止まることもなく、次の週にはUFOやUMAにとって変わられるはずだった。

それが全国紙に載るほどの大事件に発展したのは、再度取材に向かった三流タブロイド誌の記者たちと失踪していた数人の人々が、その一部が発見されたことに端を発する。

だが、当初騒ぎ立てていたのは新聞をはじめとするマスメディアだけで、当事者である街の住民たちは、特にその大多数を占める老人たちは極めて冷静だった。

「今年はやけに多いな」

それが、彼らの胸の内にあつた唯一の疑念だった。

しかし、彼らが事態を静観出来ていたのは、年明けも迫る十二月までだった。

十二月を皮切りに、週ごとに一人だった失踪者は日増しに増えていった。一人が二人に、二人が四人に、四人が八人にねずみ算の如く増えていった。

「いくらなんでも多過ぎる」

街の住人たちに恐怖が伝染するのにそう多くの時間は掛からなかった。

街からは人の営みが消え去り、街は暗い沈黙に覆われた。

それでも失踪者、いや犠牲者は増えていく。八人が十六人に、十六人が三十二人に、ねずみ算に増えていく。

とうとう自分たちの手には負えないと、地元警察が倫敦に泣きつく直前に、その妙な東洋人は街にやってきた。

その男は、当然観光客ではなく、野次馬や、記者たち、警察関係者とはまったく違っていた。

「ダベンポート邸への道を教えてくれませんか？」

ほかの者たちと違い、彼は街で最も歳をとった老人にそう尋ねるだけだった。

老人は訝った。数年前に無人になったはずの地主の館に一体の用だろうか。

だというのに、老人は彼の問いに答えた。町外れの森にあると。

彼の目を見たその瞬間、答えなければならぬという強迫観念が沸き起こったのだ。

我に帰った老人が質問を発するより、先に短く礼を言うと彼は足早に立ち去っていった。

その夜、ダベンポート邸で原因不明の火事が起こり、館は全焼。住民の恐怖をより煽ることとなった。

しかし、その火事の翌日から失踪者はパツタリと途絶えた。

メイフィールド・地下下水道

「ギ、ギギシャ」

獣は駆けていた。ただひたすら逃走のために。

獣には理解できなかった。自身の行動が、自身が抱く衝動が。

獲物だと認識していた。今まで喰らってきた獲物と同じものだと。いつも道理の簡単な狩り。後ろから忍び寄り、首を噛み切る。そ

うして仕留めた獲物を巢に続く穴に引きずり込む。ただそれだけ。ただそれだけのはずだった。

「ギ、ギギグ」

激痛が思考を蝕む。彼が生まれてから初めて味う恐怖という感情。その衝動に身を任せ、駆ける。

だが、いくら速く駆けようとも彼を追う足音は消えることはない。もはや立場は完全に逆転していた。

狩人は獲物に。獲物は狩人に。

「ギギギ」

より速く駆けるため、四肢の全てを駆使用する。

爆発的な加速。人には到達できない速度で狩人を突き放す。

足音が遠ざかる。

「キキ」

彼は安堵した。

巢はもう目と鼻の先。傷を癒すことができる。何よりあそこには同族が居る。

「案内、ご苦労。そして、さようなら」

雑音が聞こえる。彼には狩人の言葉は理解できなかった。

ただ最後に彼は自身に降りおろされた刃の意味だけを理解した。

彼らは理解できなかった。

同族たちが一方的に殺戮されているという状況が。

獲物でしかないはずの生き物に自分たちが殲滅されていく様が。もはや半数の同族が、切り裂かれ、吹き飛ばされ命を落とした。

刃が振るわれれば鮮血が舞い、叩きつけられた拳からは爆炎の花が咲く。

まさに、少数による多数の虐殺だった。
逃走すらも許されない。

例え、この人型の死神を掻い潜つても、さらなる死が待ち受ける。彼らの速度をはるかに上回る四足の死神。

白銀の体毛はドス黒い鮮血に染まり、その牙と爪は彼らを見事に八つ裂きにする。空間すらも揺るがす怒号のごとき咆哮は、彼らの本能に直接恐怖を植え付ける。

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

彼らの中でも一際大きな個体が甲高い鳴き声と共に、死神へと突撃する。

おそらくは彼らの長であろう。

彼の胸中に渦巻くのは一族の長としての誇りか、一族を滅ぼさんとする外敵への怒りか、それとも死神への恐怖か。

なんの技巧も、思慮もない速度だけの突進。だが、それは人間の命を奪って余りあるもの。

「ようやく親玉のおどめしか。丁度いい、あんまり齒ごたえが無くて飽き飽きしていたところだ」

それを前にして紺碧の死神は望むところだと笑う。

「ガッ!？」

時速六十キロに達するほど突撃も当たらなければ意味はない。

「ハッ!」

刃が血を飛び散らせ、肉を裂き、骨を断つ。

それでも命を散らしながら、彼は飛びかかる。

続いて残り少ない同族たちも飛びかかる。

自分たちが生き残るにはこの死神を打倒するしかないと理解していたからだ。

しかし、幾多の獲物を引き裂いてきた彼らの力も、この死神には通じない。

受け流され、防がれ、その度に同族の鮮血が舞う。

もはや、百頭近くいた彼らはもはや数頭ほどに激減してしていた。

「ギ、シャアアアアアア！」

彼らの死神への怒りは頂点へと達する。

何故自分たちが根絶やしにされねばならないのか、我々はただ腹が減っていただけなのに。

人ならざる叫び声がそう訴える。

「それがどうした。お前らは殺しすぎた」

死神は冷酷に刃を振り下ろす。貴様らの事情などどうでも良い、ただ殺すだけだと。

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

再びの咆哮。今度こそ、外敵を排除せんと彼らは再び決死の突撃を開始する。

同族ゆえの完璧な連携による飽和攻撃。

死神とて彼らと同じ生者、一部の間もない連携の前には無残に屍を晒すだろう。

「糺ぎ払え、劫火^{アンサス}」

勝利を確信した彼らが最後に目にしたのは闇すらも焼き尽くす紅の劫火だった。

2001年・十一月

倫敦・時計塔・ロード・ヴァインベルグ執務室

「手早い仕事だ、注文通りだな。しかし、なんとまあ

」

そうして薄っぺらい報告書をめくるのは俺の上司であり、封印指定執行者の取りまとめ役でもあるロイド・エルメス・ヴァインベルグだ。

年の頃は三十後半、なのだがどう見ても二十代前半にしか見えな
い。これで妻子もちだといえるのだから驚きだ。

「館に放火とは、派手にやったものだな。毎度のことだが、もう少し穏便にことを済ませられんのかお前は」

不機嫌に葉巻を吹かしながら、いつも通り嫌味をつぶやく。ここ二年で慣れたものだ。アンティークの机の上に山のようにたまった書類を見るに仕事がたまりにたまっているのだろう。

「超特急って話だったんでね。注文通り、原因の処理と後始末、ついで研究結果の回収、全部一日済ませて来たんだからそれでいいでしょう」

まあ、確かに奴等の死体の処理のためとはいえ、下水道の一角を吹き飛ばすのは自分でもやりすぎだとは思うが。

「まあいい。数が数だ。これ以上長引けば事が露見しただろう。それにしても人間と鼠のキメラとは彼女にしてはひどくお粗末だ」

最近威厳があるように見えるという理由で生やし始めた髭をいじりながら、何かを思い出すようにブラットが呟く。

「あんた、あそこの管理者と知り合い何かだったのか？」

「学生だったところの同級生だ。ミス・ダベンポートは使い魔の使役についてはすばらしい才能を持っていたんだがな……まさか死徒化に失敗して亡くなっていたとは。しかも結果として使い魔を暴走させてしまうとは彼女も無念だろう」

惜しい才能をなくしたと、ブラットは溜め息をつく。もう二年近くの付き合いだが彼のこんな姿は始めてみる。

「それじゃあ」

退室しようとして声をかけたそのときコンコンとノックの音がした。

続いてゆっくりと扉が開く。

「おや、帰っていたのですかタダシ」

「ああ、そつちも今帰ってきたのか？バゼット」

バゼット・フラガ・マクレミッツ。俺の同僚である。つまりは、俺と同じ執行者だ。

容姿は一言でいえば、男装の麗人。スーツ姿がピシッと決まっている。

まあ、決まりすぎて最初彼女を彼だと間違えて、自慢の鉄拳でノックアウトされたのだが。

今は歳が近いこともあって、友人のような関係になっている。

「ええ、そうです。それと話は聞いています。貴方もなかなか大変だったようですね」

少しはにかみながら、バゼットが労をねぎらってくれる。

「そっちはえつと……死霊使いか。ネクロマンサー俺なんかよりそっちの方がきつかっただろう」

封印指定を受けるにいたった魔術師だ。脅威の度合いであれば、あの鼠人間ども何ぞ比べにならない。

「いえ、考えたよりは楽でした。幸い代行者の相手はせずに済みましたから」

「ミス・マクレミッツ。談笑は結構だが、報告書は何処かね？」
苛立ったブラットが急かすように声をかけてくる。

「え、ああ、ここにあります。ロード・ヴァインベルグ」
バゼットが報告書を取り出しブラットに手渡す。

俺は出ていた方が良かったろう。

手振りで、バゼットにさよならとつげ、ドアノブに手をかける。

「さて、刀崎。アレンがお前を呼んでいる、速く向かうのが得策だと私は思うぞ」

「アレンが、俺を？何ですか？」

「試作品の感想を聞かせろ、だとかなんとか。相変わらず爆音がうるさくてな、よく聞こえなかった」

そうだった。破碎箒手を貰った時、そんなことを言っていた様な気がする。明日じゃだめなのだろうか。いや、だめだろうな。もっと酷い事になるだろう。それでも

嫌だ。

「嫌なのは心底判るが……また工房を吹き飛ばされてはかなわん。仕事だと思って割り切れ」

「はあ」

バゼットとロイドの哀れみの視線を背に受けながら、重い足取り

で歩き出す。

橋の底

大英博物館の最深部、通称『橋の底』。知る人ぞ知る其の場所は、封印指定を受けたいろんな意味で危険な魔術師たちを幽閉する魔術師版アルカトラスだ。

そんな頼まれても近づきたくないその場所のすぐそばに、俺を呼びつけた人物は引き籠もっている

「生睡を飲み込み、覚悟を決めてドアノブに手をかける。今日はどうんな罠かが掛けられているのだろうか。

黒く大きい鉄の扉を開いたその瞬間。

「まったく」

ガラクタの山から、すさまじい速度で槍が飛んでくる。まあこのくらいなら良いほうだ。

冷静に蛮刀で叩き落として、一步工房の中に踏み込む。

ガチャリという罠の作動音。

どこからか砲弾が数発飛来してくる。いったい何を考えているのだろうか、あの変態は。

前方へ全速力で、駆け込む

爆風に背を押される。

それをかいくぐったら今度は落とし穴。何とか飛び越えると次は

「はあ、はあはあ」

一体どうしてこんな目に。この前の鼠狩りより明らかに疲弊して
るぞ。

周囲は、爆心地グラントゼロの様相を呈している。

これで罾は全部のはずだが、さて今度は何処に埋まっているのだ
ろうか。

「ああ、ここか」

かろうじて見える腕をつかんで、ガラクタの山から引きずりだす。

「おはよう、アレン」

「む、おはよう。誰かと思えば君か。だいぶくたびれている様だな、
どうした？」

この人物はアレン・ヘリオス・アナトリア。見た目はさえないサ
ラリーマンのような男だが、こう見えてもここ時計塔とならぶ三大
部門の一つ、アトラス院出身の錬金術師だ。アトラス院を追放され
た理由は本人曰く「私の有り余る才能を妬んだ院長が私を姦計には
めたのだ!!」だそうだが、人によって聞いた話が違うので当てに
ならない。ともかく何かの事情があつてアトラス院から、時計塔に
流れ着いてきたのはたしかだ。それ以来、技術提供を条件に此処に
間借りして日夜兵器の開発に精を出している。

「誰かさんの仕掛けたとんでもなく迷惑な罾のおかげでな」

それを聴いた瞬間、寝ぼけ眼のアレンの顔が笑顔に綻ぶ。

「そうか、そうか。素晴らしい。少し稚拙すぎるのではと思ってい
たんだが……君を疲弊させられたなら合格か。だが、改良
が必要だな。もっと凝った罾を増やすか、いやここはやはり

「
などと考え込むはじめる。こうなったらただでさえ話を聞かない
のがさらに悪化する。」

「やはり、レーザーが必要か……つとそういえば君はど
うして此処に？」

「あんたが呼んだんだろうが」

「おお、そうだった、そうだった。試作品N01876号の感想を

聞こうと思つてね。やはり兵器のデータ採取は実戦が一番だから」
俺の礼装の整備や開発もアレンに依頼しているのだが、兵器の実験だか、なんだか知らないが、尋ねるたびに何処の刻館か、インデージョーンズかってレベルの罠を仕掛けるはいい加減やめてほしい。切実に。

「籠手なら基本的に問題はなかったよ。ただあの反動どうにかならないのか？腕を強化しても反動を殺しきれなかったぞ」

そういうとうむとアレンは再び考え込む。

「ふむ、できないことはないが、それでは殺傷能力を落とさざるおえなくなるな。それではつまらない、ということでの話は終わるだ」

「はあ、わかった。自分で調整するよ」

こう言い出したら、こちらが折れないと話が進まない。

「ふむ、それでいい。話は終わりだ。ああ、新しい礼装がいるときは私にいたまえ、必ずだぞ。おっとこんなところに私の天才的センスによって創造された素晴らしい兵器が」

言い切る前に逃げる。前にあんなことを言つて渡された兵器を使用したところ見事に爆発を起こしたからだ。幸い戦闘に使う前に試し打ちした時だったが。

時計塔・廊下

どうにか、アレンから逃げ切つた俺はとりあえずマンションに帰つて体を休めるため、家路の道を早歩きで急いでいた。

長い廊下には窓から月明かりが差し込み、独特な雰囲気をかもし出している。

「む、あれは」

目の前にある苛立ちを隠せない背中には見覚えがある。こんなところを出歩いてるなんて珍しい。

「おい、プロフェッサー」

声をかける。イライラしているのはいつものことだから気にしない。

「何だ！今日はもう講義しないぞ！！
ん、何だ君か」

「こんばんわ、プロフェッサー」

「あ、ああこんばんわ」

挨拶をすると、不機嫌そうに彼、ロード・エルメロイ二世が挨拶を返してくる。

彼こそは、彼の弟子になれば大成は間違いなしといわれる時計塔の名物講師である。その人望は彼が教え子たちを集めれば時計塔の勢力図が変わるとまで言われている。が、本人はそれが気に食わないらしくいつも不機嫌に院内を歩き回っている。

「随分とすぐに帰ってきたのだな。それにしても随分とくたびれているが」

「まあ、すぐに済む仕事だったからな。あと、くたびれている理由については聞かないでくれ」

「よほどひどい目にあっただようだな。まあいい、なら対戦は後日だ。疲れを敗北の言い訳にされてはこまる。見ている、次こそは必ず君を打ち倒す」

本来、知り合うはずがない俺たちがフランクに会話を交わしているのは、主にこの対戦が原因だ。

俺が倫敦に来て一年ほどがたったころだったか、突然ロード・エルメロイに呼び出されてこんなことを聞かれたのだ。

「君はほらあれかな。あの街には詳しいのかな。ウエノとか、アサクサとか、そのあたりに近い話なんだが……」

とりあえず知ってることには、知っている。友人に連れられいっ

たこともある、と正直に話したところ。

「そうか！ではテレビゲームに興味はあるかね？」

と聞かれ、一応、元一般人だし持っていたと話したところ、彼にゲームの対戦につき合わされ、たまたま勝ったことから度々対戦を申し込まれる。というふうな奇妙な関係を形成している。

でも、疲れを言い訳につて、そんな子供じゃないんだから。

「そうだな、また今度付き合おうよ」

だが、ありがたい。正直、今夜は疲れきっている。一刻も早くベツトに入りたい。

「それじゃあ、プロフェッサー。また今度」

手を振り、出口を目指して歩き出す。

翌日

ロード・ヴァインベルグ執務室

「今回の仕事は単純な護衛だ。ある女性を倫敦ロンドンまで無事に連れて来てくれ。どうだ？何かを爆破する必要のない簡単な仕事だろう」

「嘘くせ」

いきなり朝っぱらに呼び出されたと思えば、いきなり仕事を依頼された。しかも簡単だと言ってるがどうせろくでもない目にあうこととは判りきっている。

「ん、何か言ったか？」

「いえ、なにも。かまいませんけど、物騒な仕事じゃないなら俺よりも適任がいると思いますよ。大体、護衛なんて執行者の仕事じゃないでしょう」

まあ、封印指定の魔術師なんて大物は、そう頻繁に出るわけもなく、魔術がらみの揉め事の処理がもっぱらの仕事なのだが。

「実はな、その女性というのは私の姪だ。つい先日、義兄が亡くなつてね、身寄りがないから妻がこちらで引き取りたいと言っているのだ。つまり」

「はあ、なるほどそういうことか。」

「アンタがそれを安請け合いして、でも仕事が忙しくて迎えにいけないから俺に代わりに行けつてことですか」

「そのとおりだ。理解が早いな、ここ二年で成長したんじゃないか」
ここ二年の間で、ロイドの私事の使いをすることはよくある。なぜなら、もともと俺が此処に来た理由がロイドへの個人的推薦、つまりはわが師、蒼崎橙子さんの推薦であるからなのだ。それ故に俺の就任の際にはいろいろ根回しが大変だったらしい。結局、俺の立場は執行者、兼ロード・ヴァインベルグの私兵という物に落ち着いた。

だから、こつゆう私的な仕事が回つてくることはよくあるのだ。そのおかげで倫敦ロンドンに居られるのだが。

「オーケー、判りました。それで、何処まで行けと」

「ウェールズの片田舎だ。最寄の駅から車で約半日といったところだな。細かいことは後で地図を渡すから確認しておいてくれ。田舎だけあって自然が豊かで、景色も素晴らしい。二、三日休暇だと思つてゆっくりしてくるといい」

地図を受け取り、ざつと眺める確かに田舎だ。近くに大きな町は見当たらない。

「遠いな。とにかく今週中にあんたの姪を連れてくれば良いんですね」

「そつだ。くれぐれも彼女によるしく頼む」

翌日

レイフオート村

「まあ、確かに悪くない」

指示された場所はまさにこう言っちゃ悪いがまさにド田舎だった。列車から見えた景色は見渡す限りに小麦畑が広がっていたし、駅前でタクシーを捜すのにも手間取る始末。

それから、半日ほどその奥地に向かったのだから、もう周囲の景色は自分が自動車に乗って居なければ中世と錯覚しそうになるほどだ。その分空気も綺麗で、景色もいいのだが、これも代わり映えしないと気が滅入ってくる。

そんな場所だが、一応レイライン上にあり、一端の霊地ではある。「お客さん、着きましたぜ。代金は25ポンドでさ」

どうせ代金は後からブラットに請求すれば良いので、財布から料金を手渡す。

ドアを開いてタクシーから降り、トランクから荷物を取り出す。

「よっと」

バックはずっしりと重い。こうなると念のために持ってきた装備が疎ましくなるが、そうも言ってられない。

「じゃあお客さん。お帰りの際は電話してくださいえ」

「ああ、ありがとう」

荷物を背負い、足早に歩き出す。

周囲の視線が突き刺さる。こんな田舎じゃあ外国人自体が珍しいのだろう。

「さて、いくか」

早く目的地に向かおう。見世物みたいになるのはあんまり好みじゃないしな。

メイスン邸

ブラットから聞いた情報を思い出しながら歩いていると、目的地に辿り着いた。

鬱蒼と茂る森を背後にした館は、独特の雰囲気をかもし出している。独特なのはそれだけではなく、幾重に張り巡らされた魔術結界が否応なく、ここが魔術師の館であることを認識させる。

「おお、ロイド様の使いの方ですか。お話は伺っております、倫敦からこんなに遠いところまでご足労いただきありがとうございます」
しかし、門を叩き素性を名乗ると館の老執事はそう歓迎してくれ

た。
「いえ、お気になさらず」

「そうですか。しかし、申し訳ございません、生憎お嬢様はお出かけになられています」

「はあ、えつとどちらに？」

「裏の森でございます。いつもは五時くらいにはお帰りになられますが……」

五時か。こっちから会いに行つたほうが良いだろう。主がいないのに勝手に館でくつろぐほど、神経太くないしな。

「じゃあ、ご迷惑でなければこちらから森に出向きますが。構いませんか？」

「はい、私めは構いません。お嬢様もお気になさらないでしょう。お手を煩わせてしまい、申し訳ございません」

「いえいえ、こっちが勝手に行くだけです。荷物をお願いしても？」

「お預かりします」

裏の森

そうして、森に入ったのだがこれがまた意外と広く結構歩くこととなった。

周囲の森はあまり日の光が差し込まず、暗い。時折、虫や動物の鳴き声が聞こえてくる。

「中央辺りに小屋があるって言ってたが」

まだ先なのだろうか？

愚痴っても仕方がないので、とにかく歩く、歩く。

そうして歩いていると、日が差し込む開けた花畑に出た。

「これは」

雑多だが、色鮮やかな花々が咲き誇りそれらが、互いを損なうことなく調和していて、とても美しい。中には魔力を放つものまである。小屋は予想していたあばら家ではなく、ガラス張りのプラントーといった風情だ。

先ほどの暗い森とは打って変わって、ここはまるで童話に出てくる妖精郷のような場所だった。

その中に溶け込むように、まるでそこにあることが当然であるかのように、健気にしかし、しっかりと美しく彼女はそこに佇んでいた。

声が出なかった。

彼女の美しさに目を奪われたわけではない。ただ、なぜか彼女の在り方がひどく尊く感じられた。

それが、俺と彼女、エレナ・メイスンとの出会いだった。

何処かで運命の歯車がカチリと嵌った。

倫敦編 第一話 出会い（後書き）

どうも、big bearです。

今回からオリジナルの上、オリキャラ大量発生、オリジナル設定・
・・・不安がいつぱいです。

とりあえず、宣言通り、休みの間に投稿できてよかったです。

ちなみに、名前と地名は基本的に適当です。

では、こんなため作者と拙い文章ですが、どうかこれからも暖かい
目でよろしく願います。

誤字脱字報告、ご意見、ご感想、ご質問等ございましたらぜひひ
お書き込みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6440u/>

我復讐す、故に我あり

2012年1月6日03時48分発行